
魔法戦記リリカルなのは聖伝 ~ S D ガンダム・マイソロジー ~

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは聖伝～SDガンダム・マイソロジー～

【Zコード】

Z7682S

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

神候補である星の加護を持つた聖なる獣達に宿った鋼鉄の戦士達の力を受け継いだ戦士達と魔法の物語。あるSDガンダム物とリリカルなのはのクロスした小説です。自サイトで連載している小説です。修正を加えていますけど基本的に内容は変わりません。

プロローグ？ -全ての始まりの時 -

-高き空の上にて蘇りし翼の元、聖なる獸従えし英雄現われる -
作られし獸従えし翼の名を持つ英雄と、炎の獸従えし神の名を持つ英雄、彼の翼の上にて王と戦わん

無限の欲望、雷光の獸従えし自由の名を持つ英雄と、時の獸従えし運命の名を持つ英雄によつてその欲望を碎かれる
翼地に落ちし時、英雄を従えし王その姿を現し、法の真実を曝し、法の塔を碎かんと動き出す

だが、英雄達を従えし王も善にあらず

絶望と共に英雄と聖なる獸達による世の破壊は始まる、それは戦いに有らず、破壊である

王の軍勢、その全てが英雄なり、聖なる獸の力を分け与えられし英雄に魔導の力は通用せず

だが、希望を失う事有らず、法の塔の崩壊と共に王と戦う英雄も現る

月の獸従えし始まりの英雄、全ての英雄達と戦わん

だが、忘れてはいけない、聖なる獸は統べからず法の塔とそれに組みする者に絶望を運ぶ

ある日、聖王教会において『カリム・グラシアス』は自身の能力によつて現れた予言に疑問を持つた。後に機動六課の部隊長である『ハ神はやて』他の者達にも知らされるのだが、多くの者がその予言の意味に頭を捻つた。

それから程なくして、その予言の意味を理解する。

『聖王のゆりかご』内、エース・オブ・エース『高町なのは』は窮地に立たされていた。聖王となつた娘『ヴィヴィオ』に圧倒されて。

そんな時、二つの人影が彼女達の間に立つた。彼らこそ予言に有つた『翼』と『神』の名を持つ英雄。

「計算通りだな。寸分の狂いも無い。：パーフェクトだ」

パソコンと接続したバイザーを付けた茶色の髪の青年はそれを外し、隣に立つ赤い髪の青年へと視線を向ける。

「だが、オレの計算よりも2秒程到着が早くなつた。お前の力を正確に測りきれて居なかつた様だな」

「へつ、オレが簡単に測れるかよ！」

「あなたたちは……？」

なのはの言葉に気付き、一人の青年は笑みを浮かべる。

「マイシス親衛隊隊長、『天津 あまつ 翼』！」

「同じく、マイシス空戦部隊長、『神野 じんの 炎』！」

『マ、マイシス、なんですか、それは！？』

突然の乱入者に『クアットロ』は驚愕を露にするが、二人は更に言葉を続けて行く。

「もう一つの名は……」

「またの名を……」

別の場所…

『ジエイル・スカリエッティ』等に捕らえられた『フェイト・T・T・ハラオウン』の前にも、一人の青年が現われる。

「ふつ、完璧過ぎる。ああ、私こそ神が生み出した唯一無二の一万年に一度の大天才」

「はあ……何故、拙者がこいつと組まされなければならないのでござる?」

自分によつているナルシスト氣味の金髪の青年と、そんな青年に対して頭を抱えながら古風なしゃべり方をする黒髪の青年。

「貴方達は……どうしてここに?」

「私はマイシス陸戦部隊隊長『光羽雷斗』」

「拙者は『時野龍也』…マイシス空戦部隊の副隊長」

『ゆりかご』にあらわれた一人と同じく驚愕する一同を尻目に一人は言葉を続けて行く。

「「またの名を…」」

『ユナイト…』

二つの場所でそんな声が響いた時、四人の姿は鋼の英雄の物へと変わっていた。

「『ウイングガンダムゼロ』」

『天津翼』…作られし獣従えし翼の名を持つ英雄『ウイングガンダムゼロカスタム』。

「『ゴッドガンダム』…」

『神野焰』…炎の獣従えし神の名を持つ英雄『ゴッドガンダム』。

「『ストライクフリーダムガンダム』……」

『光羽 雷斗』：雷光の獸従えし自由の名を持つ英雄『ストライクフリーダムガンダム』。

「『デスティニー・ガンダム』……」

『時野 龍也』：時の獸従えし運命の名を持つ英雄『デスティニー・ガンダム』。

ゆりかごにあらわれた二人の英雄は僅か一人でその戦いを制圧し、スカリエットのアジトではスカリエット等を無力化し、その姿を消す。

そして、全ての戦いが終わった時、英雄達を従えし“王”がその姿を現した。

戦いの余韻も残るミッドチルダの上空に映し出される立体映像。そ

の中でも多くの者にその姿と力を見せつけた四人を含めた五人の青年達が片膝を着き、頭を垂れる。

『…この次元世界のみなさん、はじめまして。私は『マイシス』総帥『エイロス』。先ずは、この度の戦いで犠牲になった全ての命に對し、心から冥福を祈らせて頂きます』

その言葉に従うように総帥に従う五人も黙祷を捧げる。

『さて、私は皆さんに重大な事実を告げなければ行けません。死後の冥福さえも受ける権利の無い…罪深き罪人達の事を…』

マイシス総帥を名乗る者から告げられるのは今回の事件を始めとして、管理局の裏が行つていた違法行為の数々とそれに関わった者達の情報と確かな証拠。

『今回の事件の原因は、全ては管理局の上層部が行つた罪の一部

ウイングが告げる。

『あんた達の中には今回の事件で、家族を、恋人を、友人を失つた奴も居るはずだ!』

ゴッドが訴える。

『命を玩ぶ、鬼畜としか言えぬ行為の数々…とも、人に出来る事ではないでしょう』

フリーダムが淡々と告げる。

『管理局の旗の元に立つ全ての者よ…己が背負う名は決して誇りではない！ 恥と知るが良い！ 失った友に、恋人に、家族に対して… 恥じる心が有れば、潔く腹を切れ！』

デステイニーが言葉によつて切り捨てる。

『オレ等マイシスにこそ、真なる正義がある』

高らかと叫ぶのは最後の一人…マイシス海戦部隊隊長『クロスボンガンダム』

『…私達マイシスはここに、時空管理局からの全次元世界の開放を宣言します』

総帥と名乗った人物の宣言と共に五人の英雄達は雄叫びを上げ、マイシスの名を称える無数の叫びが立体映像の中より木霊する。

第97 管理外世界『地球』

高町なのは、八神はやての故郷にもマイシスの演説…その映像は届いていた。

「…なるほど、マイシスが動くのはミシドか」

コンビニのお握りを飲み込み、青年は皇帝を睨みつける。

『ゴナイトー』

純白の姿を持つ始まりの英雄へと姿を変え、その青年『月宮』つきみや時也『時也』ときやは高らかに己の力の名を叫ぶ。

「来い、聖獣・ハイソロジー」マイソロジー 戦いの場所は… あそこだ…

始まりの英雄『ガンダム』となつた青年は人型の異形の存在と共にミッードチルダへと旅立つて行く。

…今ここに物語の幕は開く…。

未だJRS事件の傷痕も癒えぬミッードチルダへと侵略を開始したマイシス。

空中を制圧するマイシス空戦部隊『ムラサメ』の大群と、地上を進軍するマイシス陸戦部隊『ザク』の一団。両軍は管理局の魔導師や騎士を圧倒し、進軍する。

「ここの分では、隊長達の出番は無むかつだな

「おつと、油断はよくなじな…どうやら、敵の主力のお出ましの様だ

空中を進軍するムラサメの大群を打ち落とす（田を廻しながら墜落するムラサメにぶつかって地上部隊のザクにも被害が出ている）桜色の光を避け、空戦部隊の隊員『ムラサメ（黄）』は陸戦部隊隊員『ザク（角付）』と通信を交わす。

「彼女達は隊長方の得物だ、我々は露払いと行こうか」

「その通りだ」

空中に現われたマイシス幹部…マイシス特務部隊…そして、親衛隊隊長ウイングゼロと空戦部隊隊長ゴッドガンダム、空戦部隊副隊長デスティニーガンダム、陸戦部隊隊長ストライクフリーダム…ここに始めてマイシスの軍の四軍の内三つを束ねる将がその姿を見せた。

そんな幹部達に一礼し、ムラサメ（黄）は別の戦場へと飛び去つて行く。

ここに機動六課とマイシス…かつてのJSC事件の時には協力した者達の戦いの幕が切つて落とされる。

「あの時は協力してくれたのに、どうして…？」

「残念ながら、砲撃はこっちも得意でね」

ツインバスター・ライフルを構え、なのはと砲撃戦・空中戦を演じるウイングゼロ。

「信念無き剣で拙者は切れんぞ、烈火の将！」

烈火の将『シグナム』と剣を結ぶ『デステイニー』。

「残念ながら、その程度のスピードでは私を捕らえる事は出来ませんよ」

2丁のライフルを武器にフェイトと高速戦闘を行うストライクフリーダム。

「ぶち抜けえええええ！」

「教えてやるよ…オレの拳に砕けないモノは無いって事をな！！！」

鉄槌の騎士『ヴィーター』とハンマーと拳をぶつけ合つゴッド。

だが、マイシスの英雄は彼等だけではない。地、海、空、そして、親衛隊の長の立場を与えられた最強の英雄達に率いられし者達も、また英雄達。

「あはははは…最高だね、もつと踊つてよーーー！」

フィン・ファンネルを操り変幻自在な攻撃でライトニング分隊のフオワード、『エリオ・モンティオル』と『キャロ・ル・ルシエ』の二人と戦うのは管理局によつて生み出された人造魔導師の生き残り

にして、マイシス空戦部隊の一人になった少年の姿を変えた『 ガンダム』。

「 うーん、歌は良い… 」の演奏が貴女達への『 鎮魂歌^{レクイエム}』ですよ

ギターを弾きながらスターズ分隊フォワード、『 スバル・ナカジマ』と『 ティアナ・ランスター』の二人を翻弄する、マイシス陸戦部隊副隊長『 インフィニットジャスティスガンダム』。

「 さて、そろそろ終わりにして差し上げましょ うか… 」

「 見せてやる う、拙者の奥義を… 」

「 ！」こつで終わりにしてやるよー 」

戦う相手から距離を取り、ストライクフリーダム、『 デスティニー、ゴッドはここに』『 えられし、力を叫ぶ。

「 、「 バイング… 」 」

自身の姿が漆黒に染まり上がり、ストライクフリーダムの翼が、『 デスティニーの体が、ゴッドの右腕が異形の物へと変わる。

「な、なんだ… その姿は？」

今まで以上の力と、今まで本氣も出していなかつた敵の底知れぬ力に驚愕を露にする機動六課の隊長陣を他所に…

「これで、終わりますー！」

「貫けえ！…！」

「バインド一刀流！…！」

トドメの一撃を放とづとした瞬間、何者かに弾き飛ばされ、異形のパーティが元に戻ると同時に漆黒の色彩も碎け散る。

「あれは…？」

「…なるほど… 現われたようですね… “あの御方” が

なのはと戦いながらその戦場に現われた者へと視線を向けるウイングゼロ。彼の視線の先に有るのは…。

「わ、私達のバインドを…」

「く、食らったのかー！？」

「お、御主… 何者でござるのかー！？」

自身のバインドを奪われた三人。彼等は現われた白き戦士へと向かって叫ぶ。

「…オレは『ガンダム』…！　お前達マイシスを止める者だ！
覚えおけ…！」

現われたガンダム…。

「私達の…味方なの？」

「まさか、あの人人が予言にあつた…」

敵と同じ力を持つた新たな乱入者に呆然とする者達…。そして、彼がカリムの予言に有つた“王と戦う英雄”であると言つ考えへと至る。

そして、異形の右腕を持つた漆黒のバインドガンダムから、『ゴッド、ストライクフリーダム』のパーティを持つた『シャドウフレアモード』…そして、『デスティニー』のパーティを持つた形態へと姿を変える。

ガンダムに『ハーディア』のパーティを奪われたゴッド等が“本来”^{マイクロジー}の聖獣の力を持つたバインドを呼び出そうとした瞬間、出される撤退命令。それにより、時空管理局は始めてマイシスより勝利を得る事に成功したのだ。

そんな時、ガンダムへと掛けられる拘束魔法。^{バインド}

「クロノ君！」

なのはがそれを使った相手…『クロノ・ハラオウン』へと抗議の声

を上げる。

「時空管理局だ、君がマイシスと戦うと言つのなら、いかがの指示に従つてもらおうか」

バインドガンダムは翼を広げ力任せに拘束を破壊し、

「オレはオレの意思で、マイシスと戦う…。そして」

頭部へと触れるバインドガンダム…それと同時に最後まで元のままだつた頭部が異形の物へと形を変える。

「“彼女”の願いと共に…お前達、管理局を潰す…！」

全てがガンダムの印象を残さぬ姿となつた時、黒い影がガンダムから弾き出され、漆黒の大型の異形がその姿を現す。

「来れ、マイシスロジー聖獸・ハーディア…！」

それが、鋼の英雄達の魂を受け継ぐ英雄達の物語の始まりを告げる。

「エクリプス…クライドオオオオオオオ…！」

今、鋼の英雄達の激闘が始まる。

「どうして…どうして、時也さんと戦わなきゃ、行けないんですか！？」

「…スバルちゃん…。悪いけど…君が管理局モリに居る以上…オレは君の敵である事に変わりない」

マイシスとの戦いの中で何度も救われ、また英雄の力を得た星の名を持つ少女と始まりの英雄の少年…。互いの仲間が戦う中、分かり合ってきた二人の悲しき戦いの幕が開く。

プロローグ？ -始まりの終わり-

「あらがとう、時也。貴方は本当に姉思いな子ね。」

素顔を隠していた複眼の仮面を外し、ビームライフルを構えたガンダムの姿の『月宮』時也と対峙するマイシス総帥『エイロス』の正体…時也の実の姉『月宮』時音は微笑を浮かべながらやう告げる。

「姉さん…いや、エイロス！…お前だけは…オレ達が止める…！」

「あら、今更私達を止めた所で何になるって言つの？ 大破壊はもう始まつているのに。もう手遅れよ…あの愚か者達のお蔭でね。」

鈴の鳴るような声で嘲笑しながら時音はガンダムの叫び声を嘲笑う。彼女の言葉通り、マイシスにより引き起こされた大破壊により、全ての次元世界は次々と崩壊、消滅して行つてゐる。

「そんな…それじゃあ、私達のして來た事つて。」

「全部私達の為になつてくれた。あらがとう、貴女達機動六課と時也達の働きには心から感謝してるわね。」

呆然と告げる青い髪の少女『スバル・ナカジマ』の言葉に對して時音は何処までも優しく、残酷に彼女の言葉を切り捨てた。

「そんな…私達…私…何の為に時也さんと…何の為に…みんなは…」

「スバルちゃん…。」

呆然とマイシスによつて積み上げられた犠牲の…互いに惹かれ合いながらも戦うしかなかつた思いの人との戦いの結果に呆然と呟く彼女の名を呼ぶが…そんな彼女へとかける言葉は浮かんでこない。

『高町 なのは』を除く機動六課の隊長陣・副隊長陣とスバルを除くフォワード達はハーディアとガンダムによつて時音エイロスによる洗脳が解けた事で、彼の仲間となつたフリーダム、デスティニー、ゴッドとの戦いで既に相打ちに近い形で戦闘不能となり、彼女等と戦つた彼等三人も既に聖獣を呼び出す事も出来ない程に消耗してしまつている。

そして、なのはは…スバルと共にガンダムと彼の聖獣ハーディアと戦つていた最中に不意を付く形で乱入した『天津 翼』の『バインドウイングガンダムゼロ』の剣で腹部を貫かれ、現在は機動六課の本部となつた次元航行艦『アースラ』でヴォルケンリッターの『湖の騎士シャマル』による治療を受けているが意識は戻つていない。

そして、彼女の撃墜と共にマイシスはエイロス…時音のもつ一つの姿である『キュベレイ』と彼女の聖獣『ウラノディア』により管理局本局の上層部の乗る次元航行艦を撃墜。

それを合図にして残された最後の聖獣使い（バインドユーザー）『クロスボーンガンダム・フルクロス』の率いる部隊である海戦部隊が時空管理局の艦隊に大打撃を与え、多くの船を撃墜させた。『ク

ロノ・ハラウォン』もその戦いの中で帰らぬ者となつた。

本来、かつてゴッド達が率いていた地、空、海の三部隊は同格だが、実は最強を誇つていたのは、クロスボーン率いる海戦部隊である。

親衛隊以上に少数精銳…『ガンダム試作一号機』、『リックディアス』、『ジオング』、『スーパー・ガンダム』等、一騎当千のバインド使い達による部隊…それが海戦部隊なのである。

時音は時空管理局…もつとも、評価していなかつた相手であるそれを最大限に利用しマイシスにとつて最強の敵である時也達四人の聖獣使い達を消耗させ、その戦力の大半を削る事に利用したのである。

マイシスの攻撃より生き残つた一部の上層部は密かに回収していたロストロギア『アルティメシア』を起動させたのだが…それが、時音の狙いだつたのだ。

既に失われた四つのそれを含む五つの『アルティメシア』…それの所在を知る事が時音の…マイシスのこの戦いを引き起こした目的だつたのである。

「あの愚か者達…いえ、時に愚か者は賢者以上の働きをしてくれるわね。貴方達の立場にしてみれば、愚か者達の行動は結果的には救いだつたわけだしね。」

そう言つて彼女は巨大な黒いガンダム『サイコガンダム』へと指示を出す。

その指示ともにサイコガンダムの右腕は禍禍しく肥大化し『バインドサイコガンダム』へと変貌し、禍禍しさを増した右腕からビーム

を放つと海戦部隊と戦う艦隊へとビームが降り注ぐ。

「あの愚か者達のお蔭でもう一つの究極聖獣のパーティはこのサイコの右腕を除いて全部失われちゃったわね。だから…私達はこの世界をやりなおす…。大破壊を持つてね。」

「つー? まさか…。」

彼女の言葉の意味…聖獣の研究に関わっていた時也と“ガンダムの記憶”があるからこそ全てが理解できる。

記憶の中で同じ様にガンダムやゴッド達はキュベレイの率いるマイシスと戦っていた。…その戦いの中でハーディアに似た白銀の聖獣と究極聖獣“エイロディア”的激突により、引き起こされた大破壊によつて全てが滅んだ瞬間まで記憶していた。

そして、大破壊の先に有る世界が…ガンダム達の力を宿した聖獣が残され、再構築された世界こそが今の次元世界に当たる。

ガンダム達の記憶が残つている様に、聖獣の力を一部でも宿した者はその記憶を再構築された世界へと引き継ぐ事が出来る。MS達の力を手にした者でさえ彼らの記憶を知る事が出来るのならば…同一人物ならば、ほぼ完全に次の世界へと記憶が引き継がれる可能性は高いだろう。

だが、それは100%とは言えない可能性…。結果的に全次元世界の全ての生命を犠牲に彼女は…。

「理論の上では私達、聖獣使い（バインドコーナー）やバインド使ひは大破壊による世界の再構築によつて記憶を失う事はないわ。現

アルティメット・マイクロジー

在ではなく過去なら、今の情報から全てのパートを得る機会が巡つてくるわ。」

意図的に引き起こした大破壊により、己の目的の為に世界を遣り直すつもりなのだ。己の目的を果す為に。

「はつ、良いねえ！ 存分に暴れられる訳だ。野郎ども、過去への航海だ、乗り遅れるんじゃねえぞ！！！」

首長龍を連想させる聖獣『ポセイディア』の背に乗り現われるのは雄叫びを揚げる海戦部隊を率いる狂戦士クロスボーンガンダム・フルクロス。

「総帥。私と親衛隊各員、一名も欠ける事無く最後までお供いたします。」

鎧武者を連想させる人型の人造聖獣『ヘルメティア』の肩に乗り現われ片膝をついてそう告げるのは、なのはを撃墜しただけでなく、管理局で唯一のバインド使いの資格を得たスバルの家族の命を最も多く奪つた男、親衛隊長のウイングゼロ。

「ありがとう、二人共。それじゃあ、時也…楽しみましょ。この世界の最後の宴を…。ユニオン。」

二人の従者へとそう告げ、時音はその姿をキュベレイへと変え、ウイングゼロ、クロスボーン、バインドサイコガンダムへと命令を下す。

「お前は…！… よくも… よくも、なのはさんを、ギン姉を、父さんを、みんなを…！」

「待て、スバルちゃん！ くつ。…悪いが…エイロティア…お前を次の世界に残す気はない！！！ ハーディア！」

難い仇の姿を見て飛び出して行くスバルを止めようとするが、尊敬する人を、姉を、家族を奪つた相手への憎しみを抱いた彼女を止められず。既に起こつてしまつている大破壊を止める術はない。せめて実の姉を邪悪な聖獣の意思から解放し様と考え、ハーディアを呼び出しスバルと共に時音達へと向かつて行く。

姉を含む一対一では勝ち目がないであろう強敵が四人…それを己とスバルの一人だけで戦うと言う事実に対する絶望はガンダムの中にはない。狙うは…次の世界へと向かおうとする惡意を討つ事…惡意を宿したキュベレイだだ一人なのだから。

「エクリプス…。」

「ティバイン…。」

「…あら、残念…時間切れよ…時也。」

ガンダムとスバル…二人の持つ最大の一撃を放とうとした時、時音の告げるその言葉を合図に一人の視界は白く染まつた。

世界が消える瞬間、世界の終わりの時、この時を持つて…全ての次元世界の再構築は始まつたのだ。

プログラミング

『月宮 時也』設定

名前：『月宮 時也』

年齢：19歳（崩壊前） 9歳（一話現在）

設定

始まりの白き戦士『ガンダム』に変身するマイシス総帥の弟にして、元マイシス総司令官（ただし、彼がマイシスを抜けたのは結成直後の為に知っているのは一部のメンバーのみ）。月を守護に持つ黒翼を持つた漆黒の人性の聖獣ハーディアを持つが、本来ハーディアの守護星は月ではなく冥王星とされている。

マイシスの結成から管理局への宣戦布告までの期間の消息は不明。また、J.S.事件後のマイシス宣戦布告時には既に彼の聖獣ハーディアの頭部のパーツを所持し、第97管理外世界『地球』に居た。

“彼女”と呼ぶハーディアの頭部パーツを託した人物の存在に縛られている。

管理局の関係者とは一部を除いて敵意を露にして居る。特に最初のコンタクトから最悪な破壊前の『クロノ・ハラウォン』には最も敵意を明らかにしている。（知らぬ事とは言え、管理局を盲信しているクロノの口から出た“彼女”の願いや聖獣を侮辱する言葉に特に怒りを感じているため、その影響でハラウォンの名を持つ人間は残らず嫌っている。）

姉の事を“エイロディア”と呼び、聖獣の事を“ガンダムの記憶”から最も良く知っている人物。龍也等の洗脳が解けた後は彼等のリーダーとして行動している。

大破壊が起こった後の“過去”では海鳴市に居なかつた為にP.T.事件には不参加。だが、参加した龍也と雷斗の二人には対管理局の計画を進めてもらつていた。

一人称は『オレ』

ガンダム

設定

時也の変身するMS。SDガンダムバインドの主人公であり、現在は時也^{マイソロジー}が変身した姿。本作では仲間達程の特別な武器や能力はなく、聖獣を使わなければ決定打に欠ける。実は肩にアムロ専用のペガサスマーカー付きだつたりする。他の者達と違ひ武装の数は豊富で、自由に取り出すことができる。本来、MS時の武装の非殺傷設定が適応されるのはビーム兵器限定だが、ガンダムに限りバズーカにも適応される。なお、頭のバルカンは飾りじやないのだが、撃つと自分の聴覚に受けるダメージの方が大きいので使えない。

武装

ビームサーベル×2
ビームライフル
ビームジャベリン
ハイパーハンマー
ハイパーバズーカ×2

聖獣ハーディア^{マイソロジー}

設定

月の満ち欠けにより、その特性を大きく変える。バインダーの精神状態により、同様のことが起こる。必殺技『エクリプスクライド』はソード状の腕によつて、的の光と影の境界を両断する技。また、本作の設定ではバインダーである時也の意志によつて強くもなり弱くもなる。必殺技『エクリプスクライド』も時也自身の意志によつて光と影の境界だけでなく^{すべて}万物を両断する技となつてゐる。パートはガンダムの右腕、デステイニーの体、フリーダムの翼、ゴッドの左腕と、アプラサス?の頭部のパートから完成する。

本来は月ではなく冥王星を守護に持つ聖獣だが、ハーディアの存在を知る者達からは『月の守護を持つ聖獣』とされている。

エイロスの持つ究極聖獣『アルティメットマイソロジー』からは『エイローディア』からは『同朋』と呼ばれている。

時也自身気付いていないがハーディアの持つ特別がエイローディアに対抗する為の唯一の力になっている。

001ステージ - 運命と自由の過去語り -

時也SIDE

あの戦いの後、気が付いたらオレは小一の頃の年齢になっていた。エイローティアの狙い通りオレにはあの戦いの記憶が有つて、聖獣の力も使える。：全てが奴の^{エイローティア}思い通りに成ったのかとも思つたけど、それは違つていた。

一つに“前回”的オレの本来居た世界とは違つ世界。第97管理外世界『地球』に住んでいる事。

次に時音姉さんが…あの時のままでオレの姉として居てくれた事。

そして、『海鳴市』と言つ所で、『高町^{たかまち}』なのはの同級生として『デスティニー・ガンダム』『時野^{ときの}龍也^{りゅうや}』と、『ストライクフリーダムガンダム』『光羽^{みは}雷斗^{らいと}』の一人が居ると言う事だ。

何故一人の存在がハッキリしたかと云つと、原因は不明だが時折眠つてゐる最中だけだが、聖獣使い同士の意識が繋がるらしく、夢の中と言つレベルで互いに会話が出来た。

互いの存在を現実に確認したのはその夢の中でお互いの住む家の電話番号を教え合つて、現実で直接話したからなんだけな。：もつとも、まだ『ゴッドガンダム』『神野^{じんの}焰^{ほの}』の存在ははつきりしていない。

子供に出来る事は限られているが、それでも…高町なのはのクラス

メイトとして一人が居る事と、マイシスの総帥の姉さんが身近に居るのはありがたい。そう、オレ達は新たに『対マイシス・時空管理局計画』を立てたのだ。

龍也と雷斗の一人には高町なのはが時空管理局に入らない様に…もつと根本的に言えば、魔法と関わらない様にしてほしいと頼んでおいた。本来、この世界には魔法技術のない世界なのだから、彼女が魔法と関わった切欠こそが管理局と直結するであろう事は推測できる。

距離的にオレの行動は直接一人を手伝えない代わりにオレ達同様姉さんが前回の記憶を持つている可能性を考えでの監視。

「…上手く行けば会う事も無いだろうけど、スバルちゃん…。マイシスの事はオレ達が終わらせる。だから…。」

マイシスを止め、オレにハーディアのパーティを託してくれた“彼女”の願いを叶える為に時空管理局の闇の部分を潰す…。

時也としての己の意思と、力を託してくれた“彼女”の願い…。マイシスと違い、管理局の方は壊滅させる必要は無く最悪腐った頭（上脣部）を潰すだけで良い…それだけでも、管理局は潰す事は出来る。それを果す為にも、この意思だけは何が有つても曲げられない。でも、願う事なら…。

「…君には笑つていて欲しい…。」

あの戦いの中で何度も見た泣き顔や辛そうな顔、憎しみに満ちた顔は見たくない。“前回”の時に得られたはずの幸せなを得て欲しい。例え、傍らにオレが居なくとも…スバルちゃんには笑つていて欲しい。それが…『月宮 時也』の…。“願い”だ。

物語が動き出すのにはこれより、三年の雌伏の時期を挟む事になる。

そして、三年後…小学三年生、時也達9才時

真っ白な空間…そこに有るのは一つの影。

龍をイメージさせる紫色の聖獣^{マイソロジー}『クロスティア』の足元に立つテスティニア・ガンダム。

人馬の騎士をイメージさせる金色の聖獣^{マイソロジー}『アローディア』の足元に立つストライクフリーダムガンダム。

「来ましたね。」

「来たで！」
「来るな。」

二人がそう呟くと、その言葉通り新たに漆黒の大型の異形の影…聖獸『ハーディア』と共にガンダムがその空間に現われる。

「悪い、遅れた。」

「いや、気にしなくても大丈夫で！」
「時也殿。」

「ええ、ここにはそれほど自由に来る事は出来ませんしね。」

ガンダムの謝罪の言葉に一人はそう返す。

「…それで、『白い悪魔』はどうなった？」

二人のその言葉に安心したのか……どう考へても自分の方が相応しい渾名でなのはを呼ぶガンダムだった。

「…時也殿…彼女の事嫌いで！」
「来るか？」

「…まだ『悪魔』じゃないんですから。」

「…あー…確かに。…なんか、オレの中だとんでもない砲撃魔法を撃たれ続けたイメージが多いからな。」

「確かに。」

主に前回の記憶の時にマイシスでなのはの相手をしていたのは『ウイングガンダムゼロカスタム』『天津翼』だつたのだが…巻き込まれたら危険なレベルの砲撃戦を繰り広げてくれていたその姿を思い出し、ガンダムの言い分に何故か納得してしまつ「一人で有つた。

「それで…拙者と腐れ縁の雷斗の一人でなのは殿が魔法に関らないようにしたんですが…。」

「結論から言つと…ダメでした。」

「そうか。」

「一人の言葉に思わずうなだれてしまつがそれ程気にはして居なかつた。実は計画としては対时空管理局計画の方は現時点では対マイシスに比べて重要視していないのだ…。」

「いや、マイシスの資料で、なのはちゃん…じゃ無かつた、なのは殿が魔法に關つた『PT事件』がこの時期に起つた事や事件の内容はある程度知つていたので…。」

流石は元空戦部隊副隊長と元陸戦部隊隊長と言つた所の元マイシス幹部の一人…マイシスが調べ上げた事で管理局の情報はある程度細かい所まで知つている。

「それで…先に私達が鳴海市に落ちたと言つ『ジュエルシード』と言つロストロギアを全て回収してしまえば良いと思つていたのですが…。」

「…拙者が最初のそれを見つけた時には『ユーノ・スクライア』によつて、デバイス『レイジング・ハート』を渡され、既に魔法に關

つてしまつたで「じやる。」

「……やーの? 誰だ?」

「テスティニーの言葉に有つた聞き覚えのない人物の名にガンダムは思わず首を傾げてしまつ。

「……無限書庫の同書長ですよ……時也さん。」

「いや、そう言われても顔が思い出せない……って言つたが、前回の時にそいつに会つた事有つたか、オレ?」

そう言われるとテスティニーとフリーダムの二人は暫し考え込み…。

「「あー……。」」

「そう言えれば会つた事無かつたですね。私達も優秀なサポート型の魔術師として、マイシスの要注意人物の資料で知つていた程度ですから。」

「結局、戦場で会つた事無く、写真でしか見た事はなかつたでござるな。拙者たちも。」

思わず頷きながら言つ一人で有つた。

「それで……高町なのはが魔法に觸つた後はどうしたんだ?」

「実は予定変更して時空管理局が現われる前にサッサビジュエルシード全部回収して、ユーノ殿に渡して帰つてもうつもりだつたのでござるが…。その…知り合いの女の子が化け物に襲われている姿

を見て思わず助けに入ってしまった。」

「…なのはさんに正体を知られ、コーノさんやなのはさんはさんに色々と質問をされてしまったんですよ。…」の姿への変身はレアスキルで通常して私達や使わなかつたバインドの事は黙つて居たみたいですが…。」

溜息を付きながらそいつのフリーダム。そして、「申し訳ない。」と頭を下げるデスティニーに「氣にするな。」と言つてガンダムは続きを促す。

「それで、拙者も協力する条件として、全て拙者の事を黙つて居てもいい事にしたのでござるが…その後…。」

そこまで話した後、横田でフリーダムへと恨みがましい視線を向けるデスティニー。

「…『フロイト・ト・ハラウォン』…いや、正しくは『フロイト・テスター・ラッサ』殿と一緒に…な・ぜ・か、雷斗殿まで敵対してくれたのでござるぬ。」

「つー? あの死神さんもこの事件に関わったのか?」

「し、死神でござるのか?」

「…フロイトさんとの事も嫌いなんですか…時也さん?」

「…………あの『K.Y』^{クロノ・ハラウォン}の妹なんざ、好く理由が無いだろ?が。」

……ファーストコンタクトから最悪だったクロノに対しての好感度

はマイナス方面に付き抜けているガンダムだった。…身内であると言つだけで無条件で嫌うほどに…。触れてはいけない部分に無遠慮に踏み込んでしまつた“前回”のクロノが悪いと言えば悪いのだが。

「…あー…まあ、あれがＫＹなのは否定しないでござるが…。」

「…彼女達は良い子なんですから、余り嫌わないであげてください。ＫＹは別に良いですけど。」

「……………今度は管理局に洗脳でもされたか、お前ら?」

なのはとフュイトを弁護する一人に対し、これ以上ないほど失礼な事を言つてくれるガンダムだつた。何気に一人の中でもクロノに対する扱いは酷いのはこの際どうでも良いだろ?。

「…ＫＹは良いとして、雷斗の方は何で死神さんに協力してたんだ?」

「まあ、私の方は偶然からですね。私の方は見つかる事無く順調にジユノルシードを集めていったんですが…。」

そこまで言つた後、僅かに言葉に詰まりながらフリーダムは…。

「…その内の一つの時に偶然会つてしまつたんですよ。…まあ、その後、ジユノルシードを巡つて戦闘になつてしまつたんですけど。…勝つちゃいました… 一方的に。」

「…当然の結果だろうな…。」

まあ、その結果も無理はないだろう。…フリーダムは主に前回の時

にはマイシス時代もガンダムの仲間になつた後もフェイトを相手に戦つていたのだ。彼の聖獣アローディアも有り、子供に戻つた事で身体能力が低下していたとは言え、未来の彼女との戦闘経験が有るのだから、彼が過去の彼女に負ける道理はないだろ。

「はあ…何と言つか…時々顔を合わせてジュエルシード回収していなんんですけど…無理している姿が見てられない事と…罪悪感もあり、私は彼女のジュエルシード集めに協力する事になつたんです。最悪、彼女が全部持つていつてくれればそれはそれでOKでしたし。」

「…管理局との接触を恐れて、時々しか手伝わない拙者とは大違いでござるな。」

「…何度目か戦つた時、今まで手を抜いていたんですけど…つい私と龍也が一人して本気になつてしまい…次元震を起こしかけてしました。」

聖獣同士の激突なのだ、寧ろ起しそうになつただけで止まつただけでも良かつたとも言えるだろ。…思わず本気で戦つてしまつほどに相性の悪い一人に対して頭を抱えてしまつガンダムだつた。

ぶっちゃけ、フェイト+ストライクフリーダム（アローディア付き）に対してなのは原作以上に圧倒的な展開になつただろ。フリーダメに対抗できる一応なのは側のデステイニーは時々しか手伝わなかつたし。

「…まあ、戦闘面は主に私が引き受けましたけどね…。」

小声で溜息交じりでそう付け加えるフリーダムだつた。

「…それよりも、次元震の後の管理局との接触でしたけど…。後で話聞いたら、大変でしたね…龍也。」

「…そうでござる…。あの、ＫＹとユーノ殿が。なのちゃんも、黙つてくれとあれほど頼んでいたと言つのに。」

詳しく述べると、実はなのはには何の罪もない。次元震が起つた時にデスティニーの存在はアースラ側に知られていた事と、それ以上に彼女の嘘がつけない性質…。…加えて、数回ほど協力した時と、自分達が手も足も出なかつた（本人達はかなり手加減して戦つていたが）フリーダムと互角に戦う彼の実力を目の当たりにし、今回件の一番の罪人である『ユーノ・スクライア』がなのはの負担を少しでも軽くしようと龍也との約束を破つて報告してくれた訳である。

取り引きか何かでの強力な力を持つた彼に協力してもらえたると考えた結果では有るが。

なお、ユーノが自分が話した事を告白して謝ろうとした訳だが、それを話した瞬間主にクロノが原因で頭に来ていたデスティニーに謝る前に『お前が原因かあー！！！』と『パルマフィオキーナ（非殺傷）』を叩き込まれた事を追記しておく。余談では有るが、MSの姿になつた時の武装の幾つか（主にビーム兵器）は非殺傷設定にすることが可能。

「まあ、ユーノ殿となのちゃんが約束を破つてくれたお蔭で才…拙者の存在までアースラに知られてしまつた訳でござる。」

「…流石にその後の対応は、私も可哀想になりましたけどね…。泣いてましたよ、彼女。」

「…何をしたんだお前？」

責めるようなガンダムとフリーダムの視線に耐え切れなくなつたデスティニーは慌てて弁明する。

「な、なにして、『絶交だ。もつ一度と拙者の事は名前で呼ぶな。』つて言つただけでござるよ……！」

「「……それはかなり酷いだらう（でしよう）。」

「う・・うぐう…。せ、拙者だつて大変だつたんでござるよー。学校の帰り道、あのＫＹが上から田線な態度で無理矢理連れて行こつとされて。」

実際の流れは『一緒に来てもらおう』『断る。大体、この世界に時空管理局なんて組織はないぞ』『暫しの言い争い』『龍也身長の事を言つ、クロノ実力行使開始』『戦闘開始』である。

なお、結果から言つとクロノの完全敗北、デスティニーの勝利で終わった。決まり手は、『クロノキャプチャー（相手の時間停止）』から必殺技『クロノディメンション（峰打ち）』。『リンクディ・ハラオウン』が止める前に決着がついた。

デスティニーとクロスディアの必殺技『クロノディメンション』は一種類あり、一つは『オリジン』と名付けた空間を切り裂き相手をく物と、もう一つは『オーリジン』と名付けた空間を切り裂き相手をそこに叩き落す物の一種類がある。殺傷力を極限まで削いだ一撃は必殺技の定義から外れるだろうが、僅かでも威力が勝つていたらクロノの命は無かつただろう。

「…その後もサーチャーで監視されるし…。」

悉く破壊したが、通信で何か言われたが完璧に無視した様である。

「まあ、もうＫＹと獣の事は別に良いでしょ。重要なのはその後、フェイトさんが海でジュノルシードを強制発動させた時です。」

フリーダムの言葉に真剣さが加わり、それだけで話の重要度がはね上がった事を告げていた。…重要度の高い話題とは、つまり管理局関係ではなく…。

「クロスボーンとウイングゼロ…マイシスが動きました。…その時に発動したジュエルシードは全てクロスボーンと奴の聖獣『ポセイディア』に奪われました。」

マイシスの事だ。

「その通りでござる。拙者と雷斗がウイングゼロとヘルメティアと戦っている隙に…。」

「つー?」

フリーダムとテスティーの言葉にガンダムは思わず言葉を失ってしまう。敵の中に自分が今まで監視していた姉の姿が無い事には僅かながら安心したが、マイシスが既に動き出したと言う事実は大きい。

(…どうこう事だ…姉さんは動いて居ない筈…。姉さんは今はまだエイロティアの意志は宿っていないのか…。オレは今までずっと

監視していた筈だぞ。）

大切な家族に対してもそんな目で見ていた事への罪悪感と同時に沸き上がつてくる一つの安堵…。だが、それ以上に問題なのは…。

「…流石はどちらも時也殿や雷斗と組んでやつと倒せた程の相手…負けないまでも思つたよりもダメージを負つてしまつたで『じれるよ。』その時に管理局の船に回収されてしまい…雷斗とは違つて、すつかり、正体を知られてしまい管理局の方に目を付けられてしまつたで『じれるよ。』時也殿も気をつけた方がいいで『じれるよ。』」

「まあ、管理局には目を付けられるだろうな…。聖獣自体が魔力を持つてゐる事もあるから、ロストロギア扱いも有る意味仕方ないと思つていた…。気に入らないけどな…。それ以上に気になるのは…。」

「…マイシスの動きで『じれるな。』」

「…ええ、奴等はジュエルシードを利用して見た事の無い聖獣のパマイソロジーーツを手に入れていましたけど…何が目的なのかは…。」

「…アルティメット・マイソロジー究極聖獣…。」

フリーダムの言葉にガンダムはそう呟く。フリーダムの言葉から前回のマイシスとの最終決戦で見た巨大なバインド…『バインドサイコガンダム』の存在が思い浮かんだのだ。

「究極聖獣…で『じれるか?』」

「それは…前回の時に時也さんが見たと言つ…。」

「ああ。あの時、オレが戦つた大型のバインドだ。マイシスの目的がそれなら…これ以上奴等にそれを渡すわけには行かない…。それと、来月からはオレも海鳴の方へ引っ越す事になるから、これからはオレも協力できる。」

マイシスの総帥と思っていた姉が動いていない以上、自分が監視し続けていても意味は無いと考え、自分も動いている敵に対応すべきと考えそつ告げた。

「それは心強いでござる。」

「ええ、これで焰が揃えば私達全員が揃うんですけどね。」

フリーダムの言葉に未だに所在が分かつてない最後の一人であるゴッド…焰の事を考えてしまう。四人で力を合わせれば強大な力を持っているマイシスにも絶対に負けないだろう。

「…まあ、次の事件が起きた時の管理局の動きは拙者が監視していくので、任せておいて頂きたいでござる。」

「…オレ達の事は知られない様にしておいてくれよな。」

「…それは心配しなくとも大丈夫でござるよ。…事件の後に、こつちは善意の協力者だと言うのに、容疑者の様に尋問してくれたＫＹにも腹が立つたから、何も教えなかつたでござるよ。」

「…さつさと逃げて良かつたですね…。」

フリーダムは一人だけ先に逃げた様だ。…元々彼の正体は知られて

いなかつたし。デスティニーに恨みがましい視線を向けられている
が……全面的に無視している。

「つと、そろそろ時間切れか。」

ガンダムの言葉通り彼の姿とハーディアの姿が少しずつ消え始めて
いる。それはガンダムだけでなく、フリーダムとデスティニーにも
起きていた。

「そうですね。では、次は実際に会って話しましょつか。」

「それがいいでござるな。知らせるべき事は多いでござるし、限ら
れた時間では話しきれないでござる。」

「ああ。じゃあな。それと、ちゃんと謝りとけよ。」

「……そうですよ、原因が向こうにあると入っても、貴方の対応は酷
過ぎますから。」

「つて、ちゃんとなのちゃんとば、謝りたでござるよ……。」

消える寸前のガンダムとフリーダムの二人からの冷たい視線に思わ
ず全力で叫ぶデスティニーであった。

そして、その場から三人の姿が消えると、後には白い空間が残った。

「あらあら、元部下とは言え、女の子を苛めるのは良くないわね。」

「…突っ込む所ですか、総帥？」

「…つーか、最後の部分だけなんで聞こえたんだ？」

「キュベレイ、ウイングゼロ、クロスボーンの三人が何時の間にかそこに居た。なお、台詞は上からキュベレイ、ウイングゼロ、クロスボーンの順です。

「彼らの言葉はここでは聞こえないはずなんだけどね。ふふふ…そもそも、お互いに正体を隠している必要が無くなってきたからかしらね？」

「それでは、そろそろ…再始動ですか、総帥？」

「ハツ、そいつは良いねえ、存分に暴れさせてもらひぜ…」

「フフ、存分に暴れさせてあげるわね。それと、ウイングゼロ、究極聖獣のバーツの一つをよく手に入れてくれたわね。そして、クロスボーン、貴方も」¹苦労様。」

「「ハツ！」」

キュベレイからの効いの言葉にウイングゼロとクロスボーンは片膝を突いて答える。

「でも、バインド使いの方は残念な事に手に入らなかつたわね。」

「はい。裏切り者達と時空管理局が邪魔をしてくれたお蔭で…。」

「いいわ、パートは手に入つたんだから、バインド使いが一人くらい欠けても最終的に聖獸が完成すれば問題無いわ。でも、次のパートを入手するのは絶対にしくじらない様に…闇の書が失われては一度と手に入らなくなるんですからね。」

「では…。」

「で、オレ達は連中の妨害に全力を尽くせばいいんですか?」

「ええ、でも…完成だけはさせておいてね。あの子の、白銀の超戦士を誕生させる為の当て馬には丁度良いし、最悪用済みになれば、私が直接消して上げるから」

「「な!?」」

キュベレイの言葉にウイングゼロとクロスボーンは思わず言葉を失つてしまつ。

「そ、総帥が…。」

「直接…ですか?」

「ええ、私も動かないと運動不足になりそうだしね。運動不足の解消には丁度良いわ。それじゃあ、二人共…よろしくね。」

「「ハツ!」」

楽しげに語るキュベレイの言葉に高らかに宣言する用に答える一人
。動き出すガンダム達、マイシス…一つの勢力…『夜天の魔導書』
を巡る物語の中で、遂に本格的に動き出す時を迎えるのだった。

つづく…

002ステージ -始まりの月-

時也 SIDE

海鳴市に引っ越してきた初日、オレは引っ越してきたばかりの土地の事を知る為に散歩している。時音姉さんの好意で自分の荷物の整理が終わつたから、散歩してきても良いと言われた。姉さんの監視は出来ないけど…姉さんの事は父さん達に聞けば大丈夫だろう。

何時までこんな事を続けていれば良いんだろうか…？ オレにとつて姉は以前も今も大切な家族だ。ここなら、失つた両親も生きている。…聖獣の事や“彼女”の事、スバルちゃんの事を全部忘れてしまえば楽になれる。もう、姉さんを疑わずに済む。

龍也達には悪いが管理局も関係ない、マイシスも関係ない…。そう開き直つて全て忘れてしまおうとも考えたことも有る。…だけど…“エイロ”ディア…奴の存在だけは許す訳にはいかないんだ。管理局と戦う事を止める訳にはいかないんだ…。

ハーディアを…エイロ”ディアを…聖獣達を復活させてしまったのは、前回のオレの責任なのだから…。管理局と戦うのは、ハーディアのパートと共にオレに託された願いなのだから…。

ついでに逆恨みと分かつてはいるが…託された“彼女”的願いを穢したクロノ・ハラウォンも絶対に許したくは無い。…願いを汚した奴はやり直される前に死んでいる。そして、今のクロノと前回のクロノと重ねてしまうのも失礼とは……一秒ほど思つたが、早々にまあ良いかと切り捨てている。

そして、じつして、龍也達がP.T.事件に巻き込まれた海鳴に引っ越した事でオレも厄介事に巻き込まれる事は間違いないだろ？。ウイングゼロとクロスボーン…ここを中心てマイシスの幹部の一人も動き出していくのだから…。

ハーディアという様々な厄介事を引き寄せる餌はオレの中にあるのだから…。厄介事は向こうから来てくれる事だろ？。

そう考ながらオレは空を見上げる。二十歳位の桃色のポーニーテールをした美しい女性がいた。

現に今も厄介事が一つ引っ掛かってくれたな…。他の人の気配もないし、隔離する為の結界も張つてくれているんだろう。

まったく…管理局の狗の狗が…お前らとは死んでも仲良くしたくないとつくづく思う。本当にこいつ等は管理局に居なくとも余計な事に巻き込んでくれるな。将来の狗共…悪魔と死神と仲良くしてゐるの一人の気持ちが理解できない。

だろう…

「すまない。心苦しいが。我が主の為、悪いがその魔力、貰つていぐわ。」

この、似非人…狗の狗共の将、シグナム…！…

「…どちらかと言えば、狸かあの女は。」

思わず本音が吐き捨てるよつて出でてしまった。

「…どちらかと言えば、狸かあの女は。つと。」

いつの間にか迫ってきた女の剣をバックステップで交わす。

（…確かに、狸の狗は守護騎士とか言つ…魔力を奪う…蒐集だつたか？ そんな機能がある魔道書…『夜天の魔道書』とか言つたか…？ そのデータ生命体…確かに、それが関係している事件だつたな、あの狸が管理局に入つた切欠は。まったく、ジュエルシードの事件が有つたばかりだつて言つのに、一年過ぎない間に一体、何件事件が起ころんだ、ここは？ 何かそういう物を引き寄せる要因でも有るのか？）

「ほお、我が太刀を交わすとは。」

（…あの狸が…。前回といい、今といいオレに恨みでもあるのか！？ チツ！ どうする、戦わなかつたら、最悪ハーディアが奪われる…戦えばオレも一人の様に管理局に日を付けられる可能性もある。大体、この女の相手は龍也の担当だろ？ が！？）

女の言葉を耳に入れず攻撃を避けながら時也は自分の取るべき選択肢を上げるが、どちらも彼にとつての最善とは程遠い。最悪と最悪

の一「者」。」

「大人しくしてくれないか？　あまり傷つけたくない。」

軽く溜息を付き、自分の取れる行動の結果に存在する不利益を考え、まだマシと言える選択肢を選ぶ。

…ハーディアを奪われた時の不利益と、管理局に見つかった場合の不利益を考える。前者は奪い返す手間が掛かり過ぎるし、マイシスの動きに対応できなくなる。…後者は精々ＫＹ筆頭の局員共を叩き潰す程度…。最悪でも龍也と適当に手を抜いた戦闘の真似事をする程度だ。マイシス時代の様に洗脳されている訳でも無いので本気の潰し合いにはならないだろう。

（よし、考えるまでも無い。）

そう判断すると避けるのを止め、

「観念してくれたか。」

安心した様に見当違いの事を言う女を一瞥しながら、時也は己の中の始まりの英雄の力を借りる為の言霊を告げる。

「ユニークンー」

叫び声と共に時也の肩に装飾の無い白い肩当が装着され、同時に腕

を覆う装甲が装着される。白い装甲が胸部、足と覆っていく。一本のブレードアンテナが額の前に浮かぶと、時也の装甲が包んでいないう場所を装甲が覆っていく。

全身が装甲に覆われると、白い色を残しながら青、赤、黄の三色の色彩を得、最後に十字の星が刻まれた盾が現れ、それを背中に背負い、右肩に赤いペガサスを思わせるマークが表されると、時也はその姿をMS『ガンダム』へと変えた。

「な!? その姿は? それに…その魔力は…。」（姿も魔力も、あいつに似ている。）

「何で丁寧に、自分の手の内を一々敵に説明してやう無さやならないんだ?」

ガンダムの姿を見て驚愕を浮かべているシグナムを一瞥しつつ、そう答える。

目の前の…厄介事を運んできてくれた相手への怒りを感じながら、理不尽かもしけないが、『狗の罪は飼い主の罪』と、こいつらの主とは“絶対に”仲良く等するかとハつ当たり気味に思ひ。…親しくなる気など最初から無いので丁度良いとも思つてゐし。

そんな事を考えながら、バックパックから伸びる柄を外しそれを握ると柄からビーム状の刀身が伸び、ガンダムの接近戦用の武器『ビームサーベル』を抜き放つ。銃等の遠距離武器もあるが、間合いを考えてこれが最適と判断する。

「…わざと掛かって来いよ…騎士気取りの通り魔風情が。」

憂さ晴らしの嫌味を言いながら、シールドを背中から腕に装着し、戦闘準備を整える。戦闘準備を整えた時、相手から放たれる殺気が増すのを感じ取る。そして、表情を見て…

（笑つてゐるな…。前回…龍也の時もそうだつたけど…この女…本当に戦闘狂だな…。まったく…こつちは本当にいい迷惑だと言つたのに。）

余計に怒りを煽つてくれる。厄介事に巻き込まれた挙句に、最悪と最悪の一着押一をさせてくれたと言うのにその本人は楽しんでいるのだから無理も無いだろう…。

…後で大事な主に報復を兼ねての襲撃とやらつてゐる事の大暴露でもしてやるうかと物騒な腹癒せの方法を考えながら、

「名乗れ。我はヴォルケンリッターが将シグナム。」

（普通なら、自分の名を名乗る所だらうがな…。オレだけこんな思いをするのも不公平だらう?）「通り魔の騎士」に付けていた義理は無い。騎士じつこで遊びたいなら、他でやれ。」

イライラを感じながら、少しでもこの思いを思い知らせてやるうかと思って、プライドと使命に泥を塗る様な嫌味を言つてやる。やつてやるとシグナムの表情に怒りが浮かぶのを感じる。

「ふつ、それもそうだな。」

だが、返された言葉を聞き心の中で舌打ちしてしまう。相手も自分

の行動を自覚しているのだな？…。

余計な事を考えず、意識を戦闘用に切り替える。前回の記憶では龍也が多く戦った相手だが、自分が戦った経験が無い訳ではなく、実力者だと言つ事は良く理解している。

「「行くぞーーー！」

ガンダムとシグナムの声が重なる。

「レヴァンティンーーー！」

『.ja』

「はあーーー！」

ガンダムは相手の剣をビームサーベルとシールドで防ぎながら剣戟を繰り広げる。最初から理解していたことだが、剣の技量では残念ながら相手の方が上なのは理解できる。

本来万能型のガンダムとしては相手の得意では無い。もつと言つてしまえば、相手の不利な間合いで戦闘に持ち込むべきなのだが、残念ながらそれは簡単にはいかない。バックパックに有るブースターの加速を利用して、パワーでは上回れるがそれでも、有利には働くかない。

聖獣を使えば一気に勝利できるのだが、下手に使つて管理局に存在を教えたくは無いという考え方から、バインド化も聖獣の力も使っていない。

それに

(…舐めてるのか…？ つて、それはオレも同じか…。)

地上で戦っている相手に対してもう少し戦ってみようが、改めて考える
と、それはお互い様だとも思う。バインドや聖獣を使わない時点で
自分も同じなのだし、ガンダムが得意ではない空中戦・バインドや
聖獣の力が無くては空中には跳ぶ事しか出来ないのだから。

シグナムに対してガンダムに有利な点が有るとすれば、それは武器
の質だろう。

シグナムの持つレヴァンティンは斬る為の剣なのに対して、ガンダムの武器はビームサーベル…斬る事も突く事も出来る万能な武器である。そもそも、実体剣とビームの剣では切れ味も格段に違う。力を溜めるために引く、振り上げると言つた動作が必要なシグナムに対してガンダムは斬る動作にさえ引く必要も無ければ、振り上げる必要もない。

戦闘において一動作の差が動きを大きく分ける。故に剣の技量の差を武器の質の差でカバーできている現状でもあるのだ。

：付け加えて言つと、バックパックに収納されているガンダムのビームサーベルはもう一本ある。防御を無視してシールドを投げ捨てて一刀流にすれば攻撃回数では圧倒できるだろう。

だが、付け焼刃程度の剣術に、一刀流の真似事では余計に不利になる可能性も有るので、シールドを使っての防御は欠かせないので。

前回の時に彼女と戦った時の経験を活かそうにも、精々ビームライフルによる遠距離攻撃か、隠す必要の無かつた聖獣の力を使ったの

マイソロジー

でこの場に活かせる経験にはならない。ならば…切り札を知られない内に、接近戦の経験値を得ておこうとする。

「ふふ、面白いな。」

「ヒツちはいい迷惑だ！」

「…そう言つたな、出来ればお前の名前も聞きたかつたな。」

「…言つたはずだ…通り魔の騎士ヒツヒに付き合ひ気は無い…」

そつ叫びながら廻し蹴りを放ちシグナムとの距離を取る。はつきり言つて苛立ちを感じてしまう。自分にしてみれば、迷惑しているといつのに相手は現状を楽しんでいるのだから…。

（…後先考えずに必殺技を撃ち込んでやるつか…。）

「レヴァンティン、カートリッジロード…！」

《Sutherland Form》

ガンダムが距離を開けるとシグナムもレヴァンティンへと形態変化を命じると、刀身の付け根部分がスライドし、薬莢が排出される。

（ヒツの戦闘狂…。どうする…？ あの形態に対抗する方法は…聖獣^{マイクロジー}を使うか…？ いや…ダメだ。）

その事は記憶している。前回の記憶の中で龍也…「テスティニアガンドムが翼を広げて強い潜つていた蛇腹剣の形状。」この間合い、それに対抗する武器は聖獣を除いて一つしかない。

（…聖獣は使えない…。）こんな所で頼つているようじゃダメだ。オレは、もつと強くならなきゃ駄目だ…。マイシス幹部の…ウイングや…クロスボーンの域まで…。）「武器選択…ハイパーハンマー。」

ビームサーベルを収納し、鎖付きの鉄球『ハイパーハンマー』を呼び出す。

（セウジヤナイト…オレは…オレ達はエイロディアを倒せない…！）「うおおおおおおお…！」

ガンダムの咆哮と共に鉄球に付けられたブースターによる加速と共にハイパーハンマーが振るわれる。

（ハイパーハンマー…）（ハイパーハンマー…）（ハイパーハンマー…）

前回の時、不意打ちや策略を使い戦っていたウイングも自分達は一対一では勝てなかつた。ウイングに勝てたのも、焰に龍也、雷斗の三人の協力が有つてだ。しかも、相手はヘルメディアの能力を一切使っていなかつたのだ。

ウイングは十分過ぎるほどの実力の上に策略を用いる戦い方を用いているのは、単純に効率的に戦えるからだつた。

エース・オブ・エースを相手に本気を出さずに互角に戦えるだけの能力を持つたマイシス一の策士。それが、親衛部隊隊長『ウイングガンダムゼロ』なのだ。

（…ハイパーは頼るだけじゃない…。オレ自身がもつと強くならなきや…マイシスは止められない…。エイロディアは倒せない！オレの意思を貫くためにも…オレは強くなる…！）

特化した部分が無いゆえの弱さが己の弱点ならば、特化した部分が無い万能さが己の長所…ならば…最弱の万能の先に有る“最強”となる事。それが、マイシスと戦う為にガンダムの出した“答え”だ。

ただ、ガンダムの場合は得意分野としてはやや射撃の方に偏つても居るのだが。

「そんな武器まで持つていたのか！？」

ガンダムの振るつたハイパー・ハンマーの鎖が蛇腹剣に巻き付いていく。

「見せてないだけで、持つていたんだよ！…！」

思わず前回の記憶の中の彼女と同一視してしまった台詞を叫んでしまつ。そう、今回使つたハイパー・ハンマーは前回の時は使わなかつた武器なのだ。

前回の時は常にマイシスとの戦いが控えている事を前提としたり、マイシス聖獣の事が既に知られていた為に、ハーディアやバインドを使って戦つていたのだから。

武器を封じると同時にハイパー・ハンマーの加速を利用して地面に叩きつけようとするが、その前に鎖は切断されてしまつ。

（…やつぱり、鉄球をぶつける武器じゃこれ位が限度か。）

そのまま体制を立て直したシグナムを一撃しつつ、再びビームサー贝尔を抜く。

「楽しかつたぞ。だが、これで終わりにこむらあう。」

剣を鞘に收め、居合いのような構えを取る。よくは聞こえなかつたが、無機質な声と薬莢が飛び出した音も聞こえた。

（…あの構えは！？ 大技が来るか…仕方ない…。）

既に覚悟を決めているのだから、聖獣を見られる事を改めて覚悟し、自身の影へと触れる。第一、

「來たれ…月を守護に持つ我が聖獣…聖獣ハーディア！！！」

告げられるは神候補の一角たる「」の聖獣を呼び出すための祝詞。

ハーディアは『月』を守護に持つ聖獣。月の満ち欠けによってその特性を大きく変える。バインド使い…バインダーの精神状態の変動にも影響される。不安定な心で使つた所で大した事は出来ずに終わるだけだ。

その呼び声と共にガンダムの影から現れる漆黒のガンダムに似た巨大な人型の異形の影。ソード状になつた左腕に、鍔…否、口の様になつた右腕。それこそがガンダムの聖獣ハーディア。

「！？ そんな奥の手まで持つては…やはりお前は面白い！」

「それはどうも。今回は素直にそう言わせて貰つよ。」

そう言いながらガンダムが左腕を振り上げるとまつたく同じ動作でハーディアもソード状になつた左腕を振り上げる。そして、

「紫電……」

「ヘカディ……」

放たれるは互いの必殺技。

「一閃……！」

「ブレイド……！」

ぶつかり合うハーディアのソード状の腕とレヴァンティン……激突と衝撃……そして、ガンダムとシグナムはその衝撃によつて弾き飛ばされる。

「くっ、互角か。」

「いや……オレの勝ちだ！」

悔しげにそう言ひシグナムだが、逆にガンダムは余裕の有る言葉と共に真上に腕を振り上げている。それも当然だ。まだガンダムには、

「受けろ……光と影の境界をも切断するオレの……ハーディアの最大の必殺技……！」

最大の必殺技を出していなかつたのだから。

「なに！？」

既に追撃の……それも新たな技の体制に入つてゐるガンダムに対して驚愕の声を上げるが、そのまま空中に立ち止まる。

「すまない、急用が出来た。」

「はあ？」（行き成り襲つてきて、それか？）

「改めて名乗ろう、私は守護騎士ヴォルケンリッターの将にして烈火の騎士シグナム。…やはり、名乗つてはくれないか？」

「……………。こつちは聖獣^{マイソロジー}ハーディア、オレはハーディアのバインダー、ガンダムだ。」

何処か悲しげに告げられる言葉に従順の後、己の…英雄と聖獣の名前を名乗る。

「そうか。ガンダム、勝負は預けた。この決着は何れ…。」

「一度と来るな。」

そう言つて飛び去つていくシグナムの背中にそう言い放つておく。溜息を付きながらガンダムの姿から戻ろうと考へた時、ガンダムはハーディアへと視線を向ける。

「どうした、ハーディア？」

ハーディアの視線がシグナムの飛んでいた先へと向いていた。それだけじゃない…ハーディアが何かに共鳴している。

「…他の聖獣がこの先に…？ ここに居るとすれば…クロスティアか、アロー・ディアか…？ 雷斗か龍也の一人でもいるのか？」

心中でウイニングとクロスボーンだつたりどうでもいいとも思つて

いるが、マイシス総帥の存在だけは無いとも考えていたりする。寧ろ、それだと逆にシグナム達の方が心配になる。

「…仕方ない…あいつ等だった時の事を考えて、オレも行くか。行くぞ、ハーディア。」

そう告げてガンダムがハーディアの肩に飛び乗ると、ハーディアは背中の翼を広げ、シグナムの飛び去った先へと飛翔する。

つづく…

龍也SHIDE

さて、時期的に既にシグナム殿達が動き出している頃でござるな。詳しい事情は知らぬが、拙者としても、再び刃を交えられるのは実は少し楽しみでござる

それにもしても……以前あつた時也殿、辛うじて感じたでござる。姉上は大切な家族だったと言っていたから、やはり、そんな相手を疑つて監視するような真似はしたくないのでござるわ。

「まあ、これからは拙者と雷斗も協力できるから、少しほは時也殿の負担も軽くなれば良いでござる。」

一人じや出来ない事も協力すれば出来るでござる。時也殿には前回の時に救つていただいた恩も有るのだから……前回の時の結果は不本意でしかなかつたでござる。

デステイニーの姿で素振りをしながら、そんな事を考へていると拙者
者の影から「ドラゴン型の拙者の聖獣クロスティアが現れたでござる。
珍しいでござる、呼びもしないのに出でくるとは。

「どうしたでござる、クロスティア？」

拙者がそつ問いかけると、クロスティアは別の方向へと頭を向けたでござる。……まさかとは思うが……。

「……なのぢやんでござるか？」

拙者の問い合わせにクロスティアは頷く」と答えてくれたドジである。

はあ…“前回”では拙者が居なくとも大丈夫だった。しかし、今回
は拙者達の存在で未来が変わっている可能性もあるでござる。な
のちゃんも心配だから行つて見た方がいいでござるな。

そう考えて拙者は光の翼を広げてクロスティアの教えてくれた方向
へと飛ぶ。

SIDE OUT

赤いドレスの少女『鉄槌の騎士ヴィータ』がビルに鉄槌型のデバイ
ス『グラーフアイゼン』を振り上げ、叩きつけられたなのはにトド
メを誘うとした時、

「バルマ…フイオキーナ…！」

光の翼を羽ばたかせ、運命の剣士『デスティニーガンダム』がそう
叫びながら右腕を前に向けて突進、加速をつけたデスティニーの右
手がヴィータのデバイスと激突すると同時に爆発、そのまま互いに
弾き飛ばされる。

「ふう、間一髪…でござる。」

「りゅ、龍也くん。」

「間に合つてよかつたでござる、なのちゃん。それに……『一人共久しふりでござる。』（それでも、やつぱり、『夜天の魔道書』の守護騎士だつたでござるな。シグナム殿ではなく、ヴィータ殿とは少し残念でござる……それに、ああ言ひ武器を正面から打ち返す物ではないでござる。ちょっと手が痛いでござる。）

なのはの言葉に答えながらそんな事を考えながら、背中の大剣（正しくは対艦刀だが『テストイニー』の場合、サイズ的にそうではない）『アロンダイト』を抜き放つ。

「『めん、なのは、遅くなつた。』

「もう大丈夫だよ、なのは。」

同時に現れる一人の少女と少年…金色の髪の少女『フェイト・テストロッサ』と少年『ユーノ・スクライア』の二人だ。

「ユーノ君…フェイトちゃん！」

心配そうになのはを見つめている一人に『テストイニー』はヴィータへと視線を向けながら、

「フュイト殿、フリーダム殿が居なくて残念でござるな。」

「えー？ そ、そんな事……。」

『テストイニー』の言葉に顔を真つ赤にして慌てるフェイト…そんな彼女を面白そうに眺めながらも、注意を外さず…。

「仲間か！？ それに、テメー… その姿は…。」（何で似てるんだよ…。『兄の姿に…。』）

「幼馴染で、『じぞるー』」

「友達だ！」

ヴィータの言葉にそう答えるテスティニーとフェイトの二人…そして、テスティニーはフェイトとコーンの方に視線を向け、

「フェイト殿に、コーン殿…なのちゃんを頼んだで、『じぞるー』。奴は拙者が取り押さえるで、『じぞるー』」

「え、でも。」

「せつじつの拙者の得意分野で、『じぞるー』」

有無を言わせず、そう言つてテスティニーはヴィータへと向き直る。

「なんだ、テメーらー！？ 管理局の魔導師だつてのか？」

「いやいや、フェイト殿は兎も角、拙者は違つで、『じぞるー』。拙者は…。」

アロンダイトを構えながらテスティニーはヴィータを睨み付ける。

「幼馴染を怪我させてくれた落とし前を付けさせてやりたいだけで、『じぞるー』。大人しくするなら、手荒な真似はしないで、『じぞるー』が…どうする？」

「誰がするかよー。」

「皿のと思つた……でござる。」

そつ言つて『テスティニー』は背中の翼を大きく広げると、アロンダイトを構えて、ヴィーターに向かつて突進していく。

「つー？ はええーーー！ グラーフアイゼンー！」

『Schwalbe fliegen』

突きの体制で一瞬で距離を詰めようとする『テスティニー』に向かつて左手に鉄球を四つほど取り出し、それを打ち出すして迎撃しようとする。

「つー？」

それに気が付き、無理矢理軌道を変え真上へと飛び上がるが、打ち出された鉄球は方向を変えて『テスティニー』を追いかける。

「誘導型射撃魔法と言つてでござるかー？ なりーーーー！」

それが示すものを前回の記憶で知つていた『テスティニー』は、背中から大型ビームランチャ―『高エネルギー長射程ビーム砲』を展開させ、引き金を引き、自分を追いかけていた鉄球を打ち落とす。

「これは飾りではないでござるよー 続いてー！」

続いて打ち落とせなかつた鉄球に対して右肩のビームブームラン『フラッシュコロッジ』を投げて迎撃する。

「……」

「一つ言つておく……これは拙者の射程範囲でござる。来たれ、土星を守護に持つ時の龍、聖獣クロスティア……」

紡がれる祝詞と共に『テスティニー』の影から現れる紫の体色をした『テスティニー』と似た面影の頭部を持つ翼龍……聖獣クロスティア。

「クロノキャプチャー！」

「なー？ 動けねえ……！ どうなつて……。」

「無駄でござる。」

クロスティアの角が輝くと同時に、ヴィータが動きを止める。

「『クロノキャプチャー』……詳しく述べは無いでござるが……そつちにも分かり易く言つてみれば、これは『タイム・バインド』と言つた所でござる。時間」と停止させてしまえば何者であつても動く事はできないでござる。」

『時間停止』、それこそが指定した物体の時間を止める事の出来る土星の加護を持つ聖獣クロスティアの能力。

「終わったみたいだね。」

「あとはそれなりの仕事でござるよ。」

自分の横へと飛んできたフェイアへとそつ告げる。……精々自分の役目は幼馴染に怪我させた相手へのお返しなのだ。あとは管理局に所

属しているフュイト達の仕事と判断して後は任せる。

「うふ。さて……。お前と出身世界、目的を教えてもらひうよ。」

デステイニーの言葉にそつ答え、フュイトは彼女の『バイス』バルディッシュ『』を向けて警告する。

「く……くそおおお……」

逃れようと必死にもがいてはいるが時間を停止せられているのだから、そこから間違いなく逃れる事は出来ないだろ？

「はつ！ なんかやばいよ、フュイト、龍也……！」

その時、大声でフュイトの使い魔である『アルフ』からの警告が入る。それと同時に誰かが現れる。ガンダムとの戦いを斬り止めてこの場へと駆けつけたシグナムである。

シグナムはそのままデステイニーとフュイトへと向かってレヴァンティンを振り下ろす。

「くつ……」

「あああ……！」

二人はそれぞれの武器で防ぐが、背中の翼の出力を上げて踏みとどまつたデステイニーに対して、フュイトは押し負けてそのまま弾き飛ばされてしまつ。

(……拙者も運がいい……。今の貴殿とは別人だが……申し訳ないが……前

回の時は引き分けだつた決着…付けさせて頂こう…烈火の将。)

今回の世界と前回の世界とは別人と理解しているが、アロンダイトを構えながら目の前に現れた前回の時に何度も戦つた宿敵ライバルを視界に納め、デスティニーの心は喜びに震えていた。納得がいかなかつた前回の戦いの決着を付ける事への…。

だが…クロスマイソロジーディアの視線が上へと向いている。そして、同時に感じるのは聖獸マイソロジー同士の共鳴。

「拙い…！」

慌ててクロスディアと共にその場から離脱するが、今までデスティニーとクロスディアの存在していた場所を火炎弾と爆雷の爆撃が襲う。

「この攻撃は…まさか…。」

そう言つて真上へと視線を向けた瞬間…そこにはクロスディアと同じ大きさの赤い鳥が存在していた。

「『アレシティア』…！…ゴッドの聖獸マイソロジーが何故！？」

今まで消息の掴めなかつた仲間の存在を示すモノに思わずそう叫んでしまつ。

「ほむ…ゴッドか？」

「おう、オレも加勢に来たぜ、つと…まさかあいつに会つなんて

な…。」

「知り合いか?」

「まあな。それと、ヴィータ、もう動けるだろ?」

「あ、ああ…。ありがとな…。」

クロノキヤプチャヤーの効果が切れて動けるようになったヴィータがアレジディアの背に立つゴッドとシグナムの元に合流した。

「どうした、ヴィータ、油断でもしたのか?」

「ま、あいつの技は注意しようが無いだろ?からな、時間停止なんぞ、反則そのものだろ?」

「うるせーよ。って、そんな反則なモンだったのかよ、ゴッド兄!?

「拙者が説明したで!」

三人の会話が聞こえて来たのか思わずそう突っ込みを入れてしまつデスティニーだった。

「あなた達は何者ですか!? その子は何も罪の無い民間人を襲つた犯罪者です。もしその子の協力者だと言うのなら、私は管理局の魔導師として逮捕させていただきます。」

デスティニーの隣に戻ったフェイトが新たに現れた乱入者…『ゴッドガンダム』とシグナムに向かつてそう宣言する。

「はあ……。つたく、動物や覚悟も有るだろう管理局の連中なら別にいいが、民間人襲つた、つてのは、どーゆー事だ? 聞き捨てならねーぞ。」

アレシティアの背中に立ちながらゴッドは横田でシグナムとヴィー
タを睨む。

「あ、いや……その……。」
「それは……その……。」

「……つたぐ、ヴィータだけじゃなくて、シグナムもかよ……。まあいい……それはあとで追求させてもらいうだ。」

そう言ひて「ゴッドハーテステイニー」とフロイトの一人へと向き直り…

「ザフィイも来た様だし、はじめるぞ。あいつには悪いが、バインダ一同士で相手させてもらひうござ！」

そう告げるゴッドの視線の先にはアルフと戦っている使い魔らしき男の姿が有つた。そして、宣言どおりゴッドとアレシティアはテス

「つ！？」

ପାଦପାଦିକାରୀ ପାଦପାଦିକାରୀ ପାଦପାଦିକାରୀ ପାଦପାଦିକାରୀ

衝撃音と共にぶつかり合ひ、ゴジードの拳と、それを受け止めたテステイニーのアロンダイト。同時にアレシティアとクロスティアも激突する。

「…焰殿…何故！？ 拙者達が戦つたらどうこう事になるか、分か
つていいのでござんなか！？」

「そんな事分かつてゐるゼー… 残念ながら… 今、お前を足止めできる
のはオレだけだからな… 付き合つてもらひゼー… 龍也ア…！」

SIDE OUT

時也SIDE

「…どうこう状況なんだ、これ…？」

ハーティアの肩に乗りながらガンダムはそう呟いてしまつ。

鎌と剣で切り結んでいるフロイトとシグナム。
殴り合つてゐるアルフと使い魔らしき男。
追いかけっこを繰り広げてゐるヴィータとゴーノ。

「いまでは別に良い。問題なのは、次だ。

拳と剣、鳥と龍の聖獣同士がぶつかり合つてゐる「ガッシュ」と「スティ
ニー」。

「あいつら…聖獣同士の戦いは最悪の場合、大破壊が起こる危険性
が有るの……自覚してゐるから、本気で遣り合つていいのか。」

結構本気な様子で戦っている「ゴッジードビースティ」を一瞥しながらそう思つてしまつが、自覚していないのなら必殺技を既に使つてゐる事は考えられるので、一人とも危険性は十分に理解していることは分かる。

それなりに本気を出している「ゴッジードビースティ」は兎も角、クロスティアもアレシティアもただ体だけを武器としていて能力を一切使つていないのでから、最悪の危険性は少ないだろう。

「…とは言え、あいつらを戦わせておくと何処で最悪の事態に陥るか分かつたもんじやないよな…。それに…マイシスの連中も…。」

そう言つて視線を上へと向ける。

（結界の一つも張つてゐるだろつ…仕方ない…結界を破壊して、戦いを止めるか…。）

そんな事を考えていると防御魔法を使いながら、ヴィータの攻撃を防ぎながら追いかけっこを繰り広げていたコーノがガンダムの所へと近づいてきていたのだが、まったく気が付いていなかつた。

（Hクリップスクライドなら一発で十分だよな…。さつやと破壊するか…。）

そう考たガンダムが片腕を上げると同じ動作でハーディアがソード状になつた腕を振り上げた所に、

「ぐつ、つて、うわあー」

「エクリプス……って、なんだ！？」

ハーディアの背中に何かがぶつかった事で動きが止まつてしまつ。

「てめえ……！」

そこに振り下されるヴィータのグラーフアイゼン。

「つて、危ない！」

慌てて避けるガンダムとハーディア…そして…

「うわああああああ……！」

運悪く避けられもせずに無防備なまま、ヴィータの一撃の直撃を受けて地面へと叩き落されていくユーノの図。

「…………。」
「…………。」
「…………。」

共に想像外の結果だつたのだろう、突然と落としていくユーノを見て、いるガンダムとヴィータの二人…。

「あー……え、えーと…『クモ誰力知ラナイ奴ヲ』（棒読み）。」

なんか棒読み氣味にそう言うガンダム。…どうでも良いが、前回も今回もガンダム（時也）は一度もユーノと会つていないので、名前は知つても顔は知らない。

「つて、てめえがそんな所に立つてたのが悪いんだろ？」「……！」

「……あー……そうかもしないな……。仕方ない……誰か知らない人の代わりに位はなつてやるか……。掛かつて来いよ……『鉄槌の騎士、ヴィータ』。」

「つー? てめえ、なんであたしの名前を知つてやがる!?」

「企業秘密だ『夜天の魔道書』の守護騎士……。オレに勝つたら教えてやるよ。」

「上等だ! てめえの魔力も蒐集してやるよ!」

「オレとハーディアに勝てるか、見せてもらおうか?」

「一対一で……あたしらベルカの騎士に負けはねえ!?!」

「そう叫んでガンダムへと向かってくるヴィータ。それを一撃しながら、ガンダムは……。」

「そつか。残念ながら、オレとハーディアは……“一人”じゃない!?!」

ハーディアのソードを構えながらヴィータとぶつかり合つ。

SIDE OUT

「へーーー。」

「ゴシズラッシュ！」

叫び声と共に出力を増したゴシズのカーベルをテスティーはアロンドライド受け止める。

「くつ、劍じや、お前には勝てないかーーー。」

「当然でござるよーーー。」

「だつたらーー！」こつが一番遣り易いぜーーー。」

「テスティーー言葉にそひ昌びながら空中のテスティーーに飛び蹴りを放つ。

「ひーー？ 拳で剣に勝つには二倍の腕は必要でござるーーー。」

「くつーーマイシス時代は同じ部隊の隊長と副隊長だった事忘れたのかよーー。」

「確かにーー。だから、互角程度は覚悟の上だ！」ぞるーーー。」

「くつ、上等だぜーー。」

セツラヒテスティーーは力を込めてゴシズを押し返す。そして、背中の翼を広げーー。

「パルマ…。」

「受け立つぜ…。ゴッドフィールド…。」

背中の翼を広げるとゴッドの背中に光輪が現れる。

「フィオキーナ…!…!…」

「ダッシュコ…!…!…」

最もスピードの乗った一撃を互いにぶつけ合へ。

「ぐー。」

「素手なら、この方が上なのは、当然だぜ…!…!…」

一つの技の激突で弾き飛ばされるのは「ステイニー」の方だった。

（…あれば…なのちゃん…。ボロボロなのに、砲撃を撃つ気でいるか…。まったく、相変わらず無茶をするでござる。）

吹き飛ばされた時、それが視界の中に入る。それによつて、なのはの魔力収集に気が付いた「ステイニー」は心中でそう呟き、ゴッドと向き直る瞬間、二人の間を何かが通り過ぎていった。

「つー? ヴィータ…!…!…」

ゴッドはそれが何なのか見切ると、慌ててクロスティアを押さえていたアレシティアを向かわせ受け止めさせる。

そして、「ステイニー」との戦いを斬り止めてアレシティアと合流す

る。

「…なにが…？」

「大丈夫か、ヴィータ！？」

「ゲホ…ゴッド兄…。」

ヒビだらけになつたデバイスを持ったボロボロになつたヴィータはそのままゴッドに抱えられて、アレシティアの背中で意識を手放す。そして、ゴッドとテスティニーは彼女が飛ばされてきた先へと視線を向ける。……そこには、

「お前は…。」

「時也殿…。」

ハーティアと共に冷たくヴィータへと視線を向けていたガンダムの姿があつた。

「よう、龍也。それで…ゴッドの方は焰で良いのか？」

「…ああ…。」

何時もと変わらない気安い態度…それがテスティニー達にはいつ思われている。今の彼は“何かが違う”と。

「ゴッド殿…その子を連れてここから離れ方が言いできやがる。」

「ああ。悪いな。」

セツニヒ ハ「アレシティアはヴィータを連れてその場を離脱していく。それを確認すると、デスティニーはガンダムへと向き直る。

「時…ガンダム殿、何故あそこまでする必要が有る…?」

「敵を倒した…“それだけ”だろ?今はこいつから首を突っ込んでしまったとは言え、襲われたのはオレの方だ。マイシングロジー聖獣を…バインドパーティを奪われる危険は排除したほうが良い。…違つか?」

デスティニーの怒りの言葉にガンダムはただ冷静に返す。

「だからと書いて…あそこまでする必要はないだろう…!? や目的は分かる…それでも…今の貴方は…違つ…!」

「何が違うんだ? オレはオレだ。誰かに洗脳されて「違う、そんな事ではない…!!」…どういふ意味だ?」

「…拙者達を救つてくれたガンダム殿は…共に戦つたガンダム殿は無意味に相手を傷つけるような者ではなかつたはずだ…!! マイシングロジー聖獣を使つていてる以上、あそこまでしないでも、倒す事は出来たはずだ! それなのに…何故…?」

「…オレは強くならなきやならない…。…エイロディアと戦える様に…マイシス幹部とも戦えるように…。…第一…前回の時、ウイングゼロにトドメを刺せなかつたオレの甘さが、スバルちゃんから家族を奪つた。敵にトドメも刺さずにいたオレの甘さが“彼女”を殺した。…だから…オレは強くなる…甘さも捨てる…それだけだ。」

ガンダムの叫び声を聞きながらテスティニーは彼を悲しげに見つめている。

「…違う…。前回の貴方の行動は何も間違っていない…！… 翼殿を救おうとしたガンダム殿の優しさが奪つた訳ではない… ガンダム殿の弱さが“彼女”を殺した訳ではない…！」

「…だから…どうした…？」

「…すまないで！」やる…。恩人の…仲間の気持ちにも気付かずについた拙者達の罪で！」やる。だから…。」

「だから？」

「…今のガンダム殿は間違つている…！…だから…これ以上間違える前に…拙者が…ガンダム殿を止める…！」

クロスティアの頭部に立ちアロンダイトを構えテスティニーはガンダムを睨み付ける。

「…分かつているのか…聖獣^{マイソロジー}同士の戦いは…。」

「…分かつている…。だが、危険性が有るだけで一対一ならば危険も少ないので…？ 四体の聖獣^{マイソロジー}同士のぶつかり合いでも、起こらなかつたのだから…。」

ガンダムの言葉に淡々と答えるテスティニー。

「ガンダム殿…たとえ大破壊の危険性が有つても…ガンダム殿への恩を返す為にも、今のガンダム殿を止めるのは拙者の役目で！」やる

! ! !

「いいだらう…… 証明してやるよ…… 今のオレは向も…… 間違つてないつてな……」

デステイニーはアロンダイトを背中に戻し、フラッシュユニッジ2をビームブームランとしてではなく、ビームサーベルとして抜き、ガンドムはビームサーベルの柄の部分を延ばし槍『ビームジャベリン』として持つ。

そして、「己の主達…ガンダムとデスティニーの意思に従い、月と土星の聖獣達は翼を広げて臨戦態勢を取る。」
マイソロジー

「デスティニー・ガンダム……時野龍也」……。

「ガンダム…『月宮時也』…。」

「これ、参る……」

激突しあうハーディアとクロステイア。そして、ガンダムとデスティニー。デスティニーがクロノキヤプチャーでハーディアの動きを止めようとすれば、その隙を逃さずガンダムはヘカティブレイドを叩きつけようとする。

「デスティニーがビームサーベルとして持っているフラッシュ・ショエッジ2を振るいガンダムの懷に飛び込もうとすれば、ビーム・ジャベリンを振るうガンダムがデスティニーを近づけさせない。」

互いの目に映るのは己の眼前の相手のみ…既に他の誰かの姿も言葉も、互いの目には認識していない。

暫くの間の激突を繰り返した後、天へと上るピンクの光の柱を連想させるなのはの砲撃を背景に睨み合う、ガンダムとハーディア、デステイニーとクロスティア。下手に動けば相手に隙を見せる結果に終わり敗北する。そう理解し合い、互いに動けずに居るのだ。

「…妙な因縁で「やるな…。」

「…何の事だ?」

デステイニーの言葉にガンダムはそう言葉を返す。

「…忘れたで「やるか、エイロスに洗脳されていた頃、拙者とガンダム殿が一対一で戦つた時の事を…。」

「…まだ完全に聖獣^{マイクロジャー}を使いこなせなくつて、負けたつけな…。それがどうした?」

「…ガンダム殿の間違いを正すためにも…もつ一度勝たせていただぐで「やるな…。」

「丁度良い、その時の借りを返させて貰う。」

互いに睨み合い、次の言葉が重なる。

「「次の一撃で決める…。」

クロスティアの頭の上でフラッシュユニットを肩へと戻し、アロン
ダイトを抜き放ち両手で持つデスティニーに対し、ハーディアの
肩の上でガンダムもビームジャベリンを背中へと戻し、腕を振り上
げる。

互いに取るのは必殺技の体制…。

互いに必殺技を放てる体制になりながら動けずに居る一人…。互い
に使おうとしている技が強力な大技であるが故に先に動いた者に与
えられる物は敗北。

（失敗したでござる。クロノディメンションの体制では、エクリプ
スクライドを避けてからのカウンターは可能だが、それは相手も同
じ。…どうする…クロノキャプチャーを使おうにも、下手をすれば
相手の動きを止める前にこちらがやられる。）

（…技の選択を間違えたな…今ならお前がクロノキャプチャーを使
う前にオレが先手を打てる。動きさえ止められなきや、条件は同じ
だ。）

互いに一步も動けずに睨み合つ二人…。このまま時が過ぎていくの
かと思われた時…。

『ストップだ、龍也。』

デスティニーの視界を遮るようにモニターが現れる。

「な!? 邪魔をするな!」

『邪魔とはなんだ、君は…。』

ガンダムはデスティニーがモニターに映し出される少年^{クロノ}と話している隙を逃さず必殺技を発動させ、動き出す。

「エクリプス…。」

「くつ、バインド一刀流奥義! ! !」

エネルギーが集中した事でソードを輝かせながら向かってくるハーディアとガンダムに対して…。

「クライド! ! !」

切り裂かれる直前で真上へと飛翔し、ガンダムの必殺の斬撃を避けた。

「なに! ?」

「…ガンダム殿…ハーディアは月の守護を受けた聖獸^{マイソロジー}。月が姿を変える様に、扱う者の心の満ち欠けでその力は大きく変わるはず。以前の貴方のエクリプスクライドは、こんなに簡単に避けれれる技では無かつたはず。」

そう宣言しながら、デスティニーが背中の翼を広げ、クロスデイアが咆哮する。

「一番大事な物を見失つている、今の貴方では、拙者には決して勝てない！！！」

「…」

「以前のガンダム殿を…拙者の剣で…この一撃で思い出せ…!!!!
忘れていた大切な事を…!!!! バインド一刀流奥義…!!!!」

ガンダムとハーディアとの距離を詰めてその懷へと飛び込むデステイニーとクロスディア。そして、放たれるのはクロスディアの嘴撃と共に繰り出されるデステイニーの斬撃。

それこそが……次元さえも破壊するクロスティアとステイニーの必殺技……。

「クロノディメンション……！」

ハーディアの胸部が大きく切り裂かれると、そのダメージはガンダムにも襲い掛かる。そして、吹き飛ばされながら、ハーディアが消えてガンダムは地面へと落下しながら、意識を手放していく。

「ガンダム殿…今の貴方の心は…前よりも…弱くなつたでござるよ…思い出すでござる…以前の貴方が持つていたはずの…“本当の強さ”を…。」

最後に聞こえたのは、デスティニーのそんな言葉だった。

004ステージ -炎の翼と雷の騎士-

雷斗SIDE

やれやれ…少々遅れてしましましたね。まあ、元々関わる気は無かつたので、丁度良いと言えば良いんですが、これは時期的には夜天の魔道書の事件の様子ですね…。

（まつたく、あの人には頼まれた分も有るとは言え、面倒な事ですね…。）

思わずそんな事を考えてしまいます。前回のP.T.事件の時に…強いて言つなら『嫌がらせ』で、あの人を助けたんですが…。まさか、あんな願いを託されるとは思いませんでしたよ。記録だけでは人の本質を知る事はできない…改めて思い知りましたね。

「私の力は必要なさそうですね…。恐らくですが、私達の知つてゐる未来に繋がる戦いだとすれば、下手に手を出さない方が良策でしょう。（下手に私が手を出したら、余計に不味い事になる可能性もあるでしょうし。）」

私は他の戦いに視線を向けながらそう呟き、次にデスティニー…龍也と「ツッ…焰の戦いへと視線を向ける。

（…まつたく、聖獣を使うバインダー同士の戦いの危険性は理解しているようですが、危険なマネをしていくと血眼も有るようですが…。）

心の中で溜息を付きながら、私はストライクフリーダムの姿とは言

え、腰に装備された武装の二丁のビームライフルから手を離す。人馬の騎士型の私の聖獣アローディアも影に戻しているので、気を着けていれば簡単には見つからないでしょう。

雷斗SIDE OUT

「あれば、時也さんですか？」

行動を決めかねていたフリーダムの視界の中に見覚えのある影が飛び込む。ガンダムの聖獣ハーディアの影だ。

上空に浮かぶハーディアの影を見上げながらフリーダム（雷斗）はそう呟く。そして、その行動を見上げながら何をしようとしているのかを大まかに推測し、アローディアを呼び出し、ガンダムと合流しようとした時、

『うわああああああああ！！！』

ハーティアの近くから何かか落ちてくるのを確認した。

「あ、あれはあ；

『あのまま落ちたら死なんじゃね?』と疑問符が張り付きそうな勢いで落下してくるコーカーの姿を見た瞬間、慌ててフリーダムは背中の翼を広げて落下しているコーカーに追いかけて、腕を掴んで受け止めてゆっくと地面へと降ろす。

「…あ、危なかつた…。い、い、生きてます…よね、ひ、この人?」

思いつき汗を流しながらうつ伏せに倒れているコーカーを眺め、誰にとも無くそう問い合わせる雷斗だが…コーカーは気絶しているが無事(?)生きている。

「まつたく、少し周囲の様子を確認してくださいよね…って、ええええええええええ!…?」

今度はハーディアがヴィータを吹き飛ばした後、デステイニーのクロスティアとハーディアが戦っている姿が目に飛び込んでくると思わず叫んでしまうフリーダムだった。

「な、なにが起こってるんですか!…って、何が有ったんですか、貴方達にい!…?」

一連の会話が聞こえていないフリーダムにはガンダムとデステイニーが戦っている理由など解らないのだから、その反応も無理も無いだろう。

マイシロジー

「聖獣同士…それも味方同士で戦わせておく訳には…仕方ないです…結界を破壊すれば止まってくれる…と良いんですけどね…」

そう呟き2丁のビームライフルを抜き背中の翼を広げて空に飛び上がった瞬間、

「うわあー。」

『しまつた、外しちゃつた。』

思わず視界に飛び込んできたなのはの胸から人の手が出ていりとうある意味スプラッタな光景に絶叫してしまつ。ビルの上に居るのはの胸から一度手が引っ込むと、再び出てきた人の手には何かの光が握られていた。

「う、ああ、うあ…。」

呻き声を上げるなのはに暫く目を離して呆然としていたフリーダムだが、直に我に返つて周囲を見回す。マイシス時代に機動六課と呼ばれた者達の全員の戦闘データは記憶している。…こんな特殊な事が出来る相手のデータを忘れるわけがない。

「…つ！？ あれは…『湖の騎士シャマル』…！…確かに資料では能力は支援型の騎士でしたけど…。（…この人が実は最凶なんじゃないですか！？ 攻撃力に乏しくても…一撃必殺の攻撃ができりや十分過ぎるでしょうがあ！…）」

思わずその惨状（？）を作り出した者の名前を叫んでしまつ。そして、前回の時は直接戦闘を行わなかつた相手の情報を過去に見た資料の中から思い出すが…。

その報告書に書かれていた『ドジっ子』と書つフレーズを思い出して、思わずその場ですつこけてしまつた彼に罪は無いだろう。

…どうでも良いのだが、旧マイシス時代、機動六課及び時空管理局

の要注意戦力の報告書を書いたのは、“あの”ウイングゼロ…翼だ。妙に彼に似合わない事を書いてあつたので全員で爆笑してしまつた記憶がある。

「これは完全に余談だが、翼の書いた報告書にそれを書き加えたのはエイロス…時音なのだ。

（邪魔をされたくないですから…先にサポート役を叩いておきましょう。）

気を取り直してフリーダムは周囲に視線を向ける。

『リンクカーボア捕獲。蒐集開始。』

誰かの声が一重に重なつて響く。その声の主があの手の主…シャマルと言うこの場にいる五人目の相手だろう。フリーダムは2丁のビームライフルを連結させ、ロングレンジ・ビームライフルへと変形させる。

「ターゲット・ロック！ シュート！」

その声の位置からターゲットの居場所を確認し、背中の翼を広げる同時にロングレンジ・ビームライフルの引き金を引き、それと同時に最高速で飛翔する。

「あやー！」

直撃させずに飽く迄威嚇のみ。敵で非殺傷設定とは言え女性相手にそんな物を当てるのは趣味ではない。第一：

（…一撃必殺の攻撃が出来たとしても、サポート要員…直接戦闘では私の方が上ですからね…。）

威嚇射撃の成功と共にフリーダムは一冊の本を持った手の前の黒い空間に手を突っ込んでいる緑色の服の金髪の優しそうな女性に分離させたビームライフルを突きつける。本に書き込まれている所から見てそれが『夜天の魔道書』なのだろう。

「あ、あなたはいったい？」

「取り合えず…敵対するかどうかは解りませんが…結界を破壊するの「オラア…!…!」にい…?」

二丁のビームライフルを向けてそう宣言じよつとした時、別の方向から飛んできた光弾を慌てて回避する。

「ほ…ゴッドくん…?」

「話は後だ、ヴィータを頼む…」

ガンドームによつてボロボロにされたヴィータを抱き抱えながら、聖獣アレシティアから飛び降りるとアレシティアはゴッドの影に消える。

「きやあ、ヴィータちゃん…!… 何が…。」

「厄介な奴と戦つたみたいだ。まさかお前まで居るなんてな雷斗…
お前の相手はオレだ！！！」

「ヴィータをシャマルに預けるとゴッズは地面を蹴つてフリーダムに向かっていく。

「クッ…」

背中の翼を広げてゴッズの間合にから逃れようと飛翔するが、それと回じだけゴッズもフリーダムとの距離を詰める。

「ハアアアアアアアアア…！」

己の間合にまで近づいての連打技『ゴッズストライク』を放つゴッズとそれを避け、ゴッズとの距離を取りながら自分の射程まで逃れようとするフリーダム。

「まつたく、こいつは結界を破壊したいだけだとこいつの…」

ゴッズとの距離を大きく開け2丁のビームライフルと腰に有る1つ
のレールガンによる一斉射撃を放つが、

「ゴッズフィンガーシールド…！」

ゴッズの右腕の掌から放たれる光の壁がフリーダムの攻撃を防ぐ。

「あ、A-LIVE…？ それは別作品の…しかも、シャイニング
ガンダムの技でしょう…！」

「へっ、別作品だらうが何だらうが、シャイニングガンダムに使え

て『ゴッズガンダム』に使えない訳ねえだろ？が……』

「リアルじゃない！……」

『MSに変身してゐる時点で、当たり前だ！……』

異次元の会話を繰り広げながら遠距離戦に持ち込もうと逃げ回るフリーダムと接近戦に持ち込もうと追う『ゴッズ』。

元マイシス陸戦部隊隊長『ストライクフリーダムガンダム』…『光羽 雷斗』

元マイシス空戦部隊隊長『ゴッズガンダム』…『神野 焰』

スピードと遠距離からの銃撃、多彩な遠距離武器を使い多対一を得意とするフリーダムに対し、相手の懐に飛び込み反撃を許さない格闘戦で相手を叩く一対一の戦いを得意とする『ゴッズ』。

共に自分の間合いではない接近戦、遠距離戦用の武器は持つてゐる物のそれは飽く迄いざと言う時の備え程度でしかない。同じ元隊長にして互いに己の得意な射程は正反対なフリーダムと『ゴッズ』。己の得意な距離に持ち込む為に動く一人だった。

（……流石は焰さん…下手な攻撃では簡単に防がれてしまいますね。アローディアを使いますか？）

（チツ、流石は雷斗…簡単には近づけさせてもられないか。どうする…アレシディアで一気に決めるか？）

互いの能力を最大限に把握してゐる一人であるから、互いの得意な距離には決してしない様に動き回つてゐる。故に戦闘範囲が広くな

つてゐるのは必然と言える。

その膠着する戦いに苛立ちを覚え始めている両者…先に痺れを切らしたのは慎重なフリーダムと比べて気が短いゴッドの方だった。

「来い、火星を守護に持つ炎の翼、聖獸アレシティア！…！」

「仕方ないですね。来たれ、金星を守護に持つ雷光の騎士、聖獸アローディア！…！」

祝詞共にゴッドの影から現れるのは不死鳥を思わせる真紅の鳥型の聖獸『アレシティア』

祝詞共にフリーダムの影から現れるのは黄金に光り輝く鎧と煌く炎の翼を持つた人馬の騎士を思わせる聖獸『アローディア』

「駆け抜けろ、アローディア！…！」

「迎え打つぜ、アレシティア！…！」

光速の動きでゴッドとアレシティアに対してフェイントを含めた連續攻撃を放つフリーダムとアローディアに対しゴッドは味方の有無を確認した上で、アレシティアの全火力を使つた周囲への無差別の攻撃によつて対抗する。

「無駄です！…！」

「へつ、じつちが本命！…！」

無差別攻撃の中を無傷で駆け抜けながらアローディアの突きつけるランス…『イナンランス』と共にゴッドへと突撃を放つた瞬間、ゴ

ツドは背中のフィールドを広げ、右手を真紅に輝かせる。

本来、ゴッドの狙いは火力を利用した爆煙で相手の軌跡を確認する事、そして、それに合わせてカウンターを放つ事がゴッドの最大の狙い。

「ぶうあああああく熱！！！ ゴオツドオ！！！ フインガアアア
アアアアアアアアアアアー！！！」

聖獣を囮にしたフリーダムを得意の接近戦で倒す事、それがゴッドの狙いだったのだ。

「クツ！」

それに気が付いた時には既に遅く、無理矢理アロー・ディアの動きの軌道を変える事で自分への直撃を避ける事が限界だった。其れさえも、アロー・ディアの持つ超スピードが無ければ不可能な動きだっただろう。だが、『ゴッドの『ゴッドファインガ』は避け切れずアロー・ディアの腕に直撃していた。

「お返しですな！――！」

ゴッドの攻撃を避けながらフリーダムはバックパックからハ機のドラグーンを射出、周囲を取り囲んでの一斉射撃によりゴッドを狙う。

一
チイ
！
！
！

アレシティアがゴシドを包み込み、ドラグーンからの一斉射撃からゴシドを守る。

「オレ達の力が真っ赤に燃える……」。

「なつ！？ その技は！？」

フリーダムからの攻撃に対する防御をしていたアレシティアが翼を広げると同時にその全身が炎に包まれる。それは前回からの仲間であるからこそ理解できるゴッドガンダムと聖獣アレシティアの必殺技[…]。

「全てを穿てと轟叫ぶ！－！－！」

アレシティアの咆哮と共に「シドとアレシティアは巨大なフューチクスとなる。

「クッ！ 仕方ないですね…。」

フリーダムの宣言と共にアロー・ディアの前方に六つのエネルギー球をリボルバー状に展開する。それこそがフリーダムとアロー・ディアの必殺技……。

巨大な不死鳥となつての突撃『スバルタンインフェルノ』とエネルギー球を貫く形で放たれる光速の六連突き『G・R・B^{グレートローリンガルト}』が激突しそうになる瞬間、

『スター　　ライト　　ブレイカアアアアアアアアアアアアツ！！！』

丁度戦いながら動いていた事でそこに移動してしまったのだろう、二人の真下から伸びるピンク色の光の柱が一人の激突を防ぐようにな打ち出され、結界を突き破り粉々に粉碎する。

「…あの年齢でこの破壊力ですか…」

「…なんて言うか…未恐ろしいな…」

ギリギリの所でそれの直撃を免れた二人は必殺技を解除して目を点にしながらそんな事を呟きあう。

「結界が破壊された、離れるぞ…」

「おう…じゃあな、雷斗。」

そう言って他の四人と一緒にゴッドはバラバラに飛び去っていく。そんなゴッドの背中を眺めながら真下を見下ろすとなのはが倒れたのが視界に入る。

（…管理局の応援が来る前に離れるとしますか…。）

アローディアと共にフリーダムがその場から離れよつとした時、

「あ、あの。」

後から話しかけられる。

「ああ、フュイトさん、久しぶりですね、元気そうで何よりです。」

前の事件では協力することになった少女、『フュイト・テスター・ロッサ』へと笑顔を浮かべながらそう話しかける。

「フリーダムさん、どうしてここに？」

「…まあ、単なる偶然と言えばそれまでですけど…。ああ、あそこでそちら側の人と思われる人が落ちてきたんで助けておいたので回収してあげて下さいね。」

「あ、ありがとうございます。」

あとは余計な人間が来る前にガンダムとでも合流してその場を離れようとデスティニーと戦っているガンダムを見た瞬間、フリーダムの表情が凍りついた。

「な…？」

デスティニーの一太刀によつて切り裂かれたハーディアとガンダム…。必殺技の直撃を受けたハーディアはそのままガンダムの影へと消え、意識を失っているのだろう地面へと向かつて落下していく。

「不味い…！ アロー！ ティア…！」

「あ、待つて…。」

「時空管理きよ…。」

既に対象が居なくなつた場所に虚しく発動するバインドとそれを掛

けた本人である…何時の間にか駆けつけた『クロノ・ハラウォン』を放つておいてフリーダムはアローディアの最高速度でガンダムを回収し、その場から立ち去つて行つた…。

「…行つちやつた。あの時のお礼、言い損なつちやつた。」

姿が見えなくなつたフリーダムの背中に對して残念そひて、そう弦くフロイト嬢だつた。

（…時也殿の事は雷斗殿に任せたければ心配ないでござるな。後はなのぢやんでござるが…魔法関連であれば、管理局に任せた方が良さやつでござるな…不本意でござるが…。）

ガンダムを回収して飛び去つていくフリーダムとアローディアを見送り、ビルの上で倒れているなのはを見下ろしながら、デステイニアは一応は安心と思つてそこから飛び去つとした時、

「待てー！」

「…………何の用でござるか、豆粒ドチビ…じやなくて、ハラウォン。」

彼を呼び止めるクロノに対し絶対零度の冷たさを含んだ口調で振り向きもせず、そつ言い放つ。

「…時野龍也…君も一緒に来て「誰が行くか。」…。ツー？ 公務執行妨害で逮捕しても良いんだぞ。」

「相変わらずでござるな…所詮“は”“管理外”の世界だらう…他所の世界の法を持ち込むな。」

そして、誰にも見えないよう冷たい笑みを浮かべ、

「…まあ、付き纏われるのも面倒だから、このまま見せしめにお前を地獄に呑み込んでやつてもいいんだぞ。」

アロンダイトを抜き放ち殺氣を込めた言葉でクロノの言葉を一言で切り捨て、そこから飛び去る。とした時、

『ちょっと待つてくれるかしら。』

デスティニーの前に現れたモニターに映し出された女性がデスティニーを呼び止める。

「…何の用だ…ハラウォン母。」

現れたモニターに『る女性』リンディ・ハラウォンを睨み付けながらアロンダイトをモニターへと突きつける。

『以前の非礼は改めて謝罪します。話をしたいだけですから、「こつちはしたくない。」…せめて、話だけでも聞いてもらえないかしり。』

「あ、あの…私からもお願ひします。」
そう言つて今度はフロイトからも頼まれる。

「はあ…なのちやんの事も心配だから丁度いいか…。（まあ、クロノには時也殿の件で借りも有るし、フロイト殿に頼まれては…雷斗殿…貸し一つで）」さるよ。最悪、クロスティアでここ（海鳴）には

戻ればいいでござる。」

溜息をつきながら、モニターへと視線を向ける。

「話を聞くだけだ。こちらは何を聞かれても答える筋合には無い。…それで構わないだらうな？」

「かあさ…いや、艦長！…こいつはあのフリーダムとか、アンノウンや他の二人の事も知っているはずです！」

『あの件は貴方に責任が有るわ。おとなしくしていなさい。』

「くつ…。」

こつして、クロノが沈黙した事で、テスティニー…龍也はアースラへと向かう事になった。これが物語にどんな変化を与えるかどうかは誰にもわからない事である。

別の場所…

「くつ…。」

「気が付きましたか、時也さん。」

意識を取り戻した時也に掛けられる声に気が付き、そこに振り返るとそこには雷斗の姿が有った。周囲を見回してみれば、公園でベンチの上に寝かされていた様だ。

「……お前…雷斗か？」

「ええ、じつして、今年年齢で会うのは初めてですね。」

そう言つた後、『飲みますか？』と聞い掛け雷斗は持つていた缶ジースを差し出す。無言のままそれを受け取つて口を付けると、雷斗は

「…………なんで貴方達が戦つていたんですか？」

恐らくだが、ヴォルケンリッター…夜天の王である『八神はやて』の側に付いているはずの焰が敵対するのは解る。だが、ガンダムとデスティニーが戦う理由などは無かつたはずなのだ。

「…………オレを止める…それがオレと戦つた理由らしい…。なあ、オレは…間違つてたのか…？ 強くなる為に…彼女を守れなかつた…スバルちゃんの家族を奪つた…オレの弱さを…甘さを捨てて言つてるのは…間違つてたのか？」

「ええ、間違つてますね。少なくとも、そんな強さは、誰かを守れる強さではないですよ。」

「つー？」

「……“前回”の時、マイシスとの決戦…私は『弱かつた自分を変えた』と言いました。」

そう言つた後、雷斗は自嘲氣味に苦笑を浮かべる。

「…事故とは言え前回の時に私の住んでいた世界は結果的に管理局に滅ぼされました。…だから、私はマイシスに入つた…私の様な悲しみを作らない為に…でも…私は負けていたんですよ…弱さに。」

「雷斗…。」

「…一度は中から変え様とも思つた…。まあ、“無意味”な事に気付かせて貰つた点については今でも感謝しますけど…。…私は悲しみに…大切な人達を失つた苦しみに負けて…総帥に洗脳された…。いや、身を委ねたんですよ…。」

雷斗の表情に浮かぶのは悲しみの感情…。かつて、マイシスに所属していた者達は全員が全員大なり小なり管理局に対して恨みがあつた。それが、エイロスによる洗脳の足がかりとなつていたのだろう。

寧ろ、その中でも雷斗達は聖獣を扱える最強戦力となるえるだけではなく、その望みが『破壊』ではなかつたから、洗脳を受けていた。

「…憧れていた…貴方の強さは、優しさでしですよ。『弱い自分を変える。』…目指すべき強さを教えてくれた貴方がそれを否定しないで下さい…!!…」

「……。」

「…私達にとつて、貴方は仲間であり、恩人です。結局…私達は貴方をまた一人でエイロスと戦わせていたんですね…。すみません。」

「… そうかもしないな…。オレ達はマイシスを止め… 少なくとも… マイシスの生み出す悲しみを“断つ”。」

「はーー!」

「そつて時せ]と雷斗はその拳をぶつけ合ひのだった。

「…まあ、管理局の闇を潰すと言つては同意ですが…。“また”連中のせいで世界がリセットされるのは”ermen”ですからね。」

「もうだな…。…画面の田標は取り敢えず、上層部とあの脳髄共か…。」

おまけ…

「クス。二人とも、私達の予定^{シナリオ}は解つているわね。」

「はい。…例の物の破壊時に私達の手で必要な部分を回収でしたね?」

キュベレイに対し、片膝をつきながら親衛隊長ウイングゼロは答える。

「ええ、万全を期する為に…確実にシナリオを進めるために、今回も貴方はクロスボーンと一緒に動いてもらひわ。」

「「はつ……」」

「それと、クロスボーンには、今の内に第一のパートのバインダーの回収をお願いね。」

『クスクス』と笑いながらキュベレイはクロスボーンにそう告げる。

「了。つたぐ、『ミミ漁りかよ…早く戦いたいぜ。』

「もう言つた、クロスボーン。これも総帥のお考えだ。」

不満を見せたクロスボーンを嗜めるワイングゼロはキュベレイへと向き直り、

「それでは、総帥…。また、定時連絡の時に…。」

そう言つてワイングゼロはその姿を消していく。

つづく…

「所で……雷斗……夜天の魔道書の事件ってどう言つ流れで事件が終わるんだ？」

「残念ながら、私がマイシスに居た頃に読んだ資料で知つてている事は、精々時期と関係者、何時頃に始まつて終わるのか程度の情報しか……。第97管理外世界での事件についての調査は私の管轄外でしたので、調査結果の報告書で呼んだ位ですね。」

雷斗の言葉に暫く考え込む時也だつたが……

「…………なあ、この世界の事件つて、誰が調査したんだ……？」

「……確かに、翼さんでしたね……」この調査したのは。

雷斗の言葉を聞き一人して溜息を付いてしまつ。

「情報面ではマイシスに優位に立たれていますね。」

「完全に後手に廻るしかないか。」

自分達ではなく、今も敵・マイシスに所属している翼が知つている事を思うとエイロスは現在のこの事態までも完全に予想していたのかと思えてくる。

……真相を明らかにすると、当時のエイロスには特にそんな意図は“一切”無かつた。誰が何処の調査をするのかは、單にくじ引きで決めただけだから（滝汗）

「…まあ、あの連中も管理局が動いた以上、自分達の本拠地があるこの世界で活動するリスクは背負わないだろ？…他の世界での戦いが中心になるだろ？…。」

「あとは、この世界に網を張つている管理局との迎撃戦ですか…。マイシスの動きも気になりますし、管理局側には龍也が居るでしょ？…、私達はクロスティアの反応を追いかけて探すとしますか…。」

「…そうだな。…管理局にはオレ達四人が仲間って事は知られない方が良さそうだし、龍也との連絡は、最小限に留めた方が良さそうだな。」

「…そうですね。でも、私は龍也とは同じクラスですから、誰かに聞かれた時を考えて、分かり難い連絡は避けるにしても、遠まわしな連絡で留めるべきでしょうね。正しく伝わればいいんですけど。」

雷斗の言葉に考え込んでしまつ二人。

「時也さんが何処に転校するのかは分かりませんけど、龍也との連絡は私が受けました。」

「ああ、そつちは任せた。」

そんな、ある意味間抜けな真相を知つてか知らずか、深刻な表情で今後の行動を決めている時也と雷斗の『反マイシスチーム（今命名）』だった。

車椅子の少女『八神 はやて』は図書館に来ていた。車椅子を動かしながら、田的の本が有るかどうか探していると、田的の本を見つけた。

「あつ、有つた！ やつぱり、今日来て正解やつた！」

彼女の目的の本は人気のある本で、大抵は来る時は何時も貸し出されていたのだが、今日は一冊だけ置いてあつた。

早速その本を取ろうと思つたはやてだったが、目的の本の位置は普通の子供でも手が届く位置なのだが、車椅子のはやてには、その高さは脅威だった。

「うへん…もうちょっと…。」

「あつ。」

横から声が響き、その反対側から伸びた手が本を取つていた。

「取つたかった本はこれか？」

本を取つた少年がそつとさやてに本を差し出す。

「あつ、ありがとうございます。」

「いや、オレも余計な事をしたみたいだしな。」

そう言つて微笑みを浮かべながら、その少年『天津翼』ははやての後にいた少女『月村すずか』へとそう話しかける。

そう言つて翼はその場を立ち去つていいく。すずかとはやての一人は互いに何度も顔を合わせた事が有つたのだろう、何度も言葉を交わす内に仲良くなつていった。

（…やれやれ…総帥からの任務も無いからゆづくつと読書でもしようと思つて来てみたが…まさか、こんな所で会うとはな…。）

そんな一人の少女へと視線を向けながら、翼は心の中でそう呟くのだった。

（…残念だが、読書は諦めて焰に会つ前に帰るとするか…。）

心中で溜息を付きながらそう呟き、翼は図書館を出て行った。流石に戦つて勝てない相手ではないとは言え、こんな所で無闇に戦うのは彼の本意ではなく、何よりも…。

（…命令なら鬼も角…それ以外で焰とは戦いたくは無いからな…。）

総帥への“忠誠”を除けば彼の中での最も重要な物…それが焰との友情なのだ。今でこそ敵同士になつてはいるが、そんな相手とは必要以上には戦いたくないと呟つのが、彼の本音である。

（…時也様と言つお前と言つて、何故マイシスの創成期のメンバーに限つて、総帥を裏切る?）

『総帥エイロスの意思の元に理想的な次元世界を作り出す事』…それがマイシスの持つ反管理局組織としての目的。…そのために必要

なのが、『月を含めた太陽系の惑星』を守護に持つ七体の聖獣の力
と一体の究極聖獣の力…。

そして、七体の聖獣の内、月の『ハーディア』、火星の『アレシティア』、土星の『クロスティア』、金星の『アローティア』の四体は敵対している時也達の手元にある。

（…今更だな…。お前が敵なる以上、オレは…お前を討つだけだ…。）

心の中でそう呟き、図書館を後にする翼だった。

だが、太陽系の惑星は月を含めれば、10存在している。そして、確認されている聖獣は7、欠ける星は…『地球』『木星』『冥王星』の三つ…。この三つの惑星に究極聖獣の一体を当て嵌めたとしても、一つ欠ける星がある。

図書館を立ち去っている途中の翼の前に一人の少年が現れる。黒い髪に上質な服を着た少年。

「…『クロスボーン』…何の用だ？」

「…その言い方ア、酷いねえ、オレとお前の仲じやねえかよ？ まあ、用は有るんだがな。」

翼の言葉に笑みを浮かべながら肩を竦めると、少年『海王宗一』

はその表情に真剣な物を浮かべる。

「総帥からの指令だ。オレ達の次の行動についての勅命だぜ。」

宗一の言葉を聞き、翼もその表情を変える。

「……話せ……。」

「ああ。オレとお前で書の完成までヴォルケンリッターと焰の加勢だそうだ。まあ、オレは面白い戦いができるや、どんな命令でも良いんだけどな。」

『狂戦士』^{ヘルセルク}の名に相応しい、これから起るであろう大きな戦いへの期待を込めた楽しげな笑みを浮かべる宗一に翼は溜息をつき、

「雷斗、龍也の一人と時也様…流石にバインダー三人を焰一人ではきついだろうからな。あれが完成してもらわない事には此方としても困る。」

「それと、お前のバインダーの能力なら、顔を出さなくとも良いんじやないのか？」

「……いや、オレとお前で直接加勢する。オレ達の存在も有る事だ、此方の目的達成の前に封印等と言つ事になつたら解くのも手間だ。加勢の序でに猫を一匹…潰しておくか…。」

「つたく、メインは猫狩りかよ、つまらねえ戦いになりそうだな。」

「…言うとは思っていた…。そつちは、オレだけでやつても構わない。お前は龍也でも、雷斗でも、時也様でも好きな相手と存分に戦

「へー、流石、翼だな 話せるねえ。」

「へー、流石、翼だな 話せるねえ。」

SIDE OUT

龍也 SIDE

時空管理局本局、そこは様々な世界の技術が集められた巨大な基地であり、時也達元マイシスもメンバーにしてみれば、過去の事とは言え敵の懐の中とも言える場所である。

（…一人でこんな場所に来てしまつとは…せめて、雷斗でも居てくれれば良かつたでござる。）

ヴォルケンリッターとゴッド（龍也）には時也との一戦がメインだつたけど）との戦闘を終えたアースラは魔力を奪われたなど、怪我を負つたゴーノの治療の為にそこに戻つてきていた。

「あー…龍也…せめて武装解除くらいしてくれないか？」

「…自分達がそこまで信用されていと想つていてるでござるのか？ 大体、誰の許可を貰つて拙者の名前を呼んでいる？」

武器は持つていらない物の完全武装な『ステイニー』の姿で隣に立つ龍也にそう頼むクロノだつたが、『ステイニー』にはそつ一蹴される。重ねて言つが、『ステイニー』の意識の中では「こゝは敵地に当るのだ。

「…その格好だと窮屈じゃ…心配要らないで」『ゼル』。」
「そ、そ…うか。」

そんな『ステイニー』を睨むが、逆に睨み返される。妙に『ステイニー』から距離を取つてゐるのは、以前彼にボコボコにされた事が尾を引いてゐるのだろう。

「はつきり言つて空氣が重い……。近くに居るフェイトもオロオロとしている。

「はあ…。せめて、これだけは教えてくれないか…」「…時野で良いで」『ゼル』。」…時野。君は『ゴッド』と呼んだ君と似た力を持つた奴とは知り合になのか?」

「あ、あの…それに私に協力してくれていたストライクフリーダムつて人の事も知つてるなら…。」

クロノとフェイト…二人に問い合わせられると「はあ。」と溜息を吐き。

「知り合こと言ひ訳ではなこで」『ゼル』。」

「ただ?」

「…一人とも前世の…『ステイニー』の仲間で」『ゼル』。」

知り合いで無こと無い点では思いつきり嘘だが、前世の『デスティニーの仲間』と言つ点では一重の意味で嘘ではなく事実だ。そして、『デスティニー』の口から出たそんな言葉に思わず？マークを浮かべてしまつ一人だった。

「もう一つだけ教えてもらえるか…君の能力についてだが…。」

「…前回身を持つて体験したのではなかつたの？」

そう言われて白くなるクロノだつた。…時間停止からの必殺技の流れの一撃は流石にトラウマになつてゐるのだろう。何故か各聖獣の必殺技だけは問答無用に非殺傷には出来ず殺傷設定に固定される為に意図的に手加減するしかないのだ。もつとも、『必ず殺す技』と書いて『必殺技』なのだから、それは無理も無いと言えるのだが。

「あ、君の口から詳しく述べて欲しい…。」

「…正しくはあれは拙者ではなく、クロスディアの能力でござるが…。そつちのバインドとか言つ魔法と大して代わらないでござるよ。」

「

どう考へても相手の意識を保つたまま時間停止させるのだから大して変わらないと言われたらクロスディアが泣くのではないだろうか？

「じゃあ、君の体を此方で調べさせて貰えないか？ 詳しい事が「必要ない。」…何故だ！？」

「少なくとも、この姿の事も、聖獣の事も、ここに居る誰よりも拙者の方が良く分かっているでござるよ。」

それは嘘ではない。マイクロジー聖獣の事もMSの事も『デスティニーの記憶』から良く分かつていて。流石に時也の持つていてる『ガンダムの記憶』に比べれば遙かに劣る知識でしかないが、前回の経験から『デスティニー』の能力の殆どは把握している。

「大体拙者は前にも言つたが、そつちの言つ管理外の世界の人間で『ござるよ?』

「…君の様に特殊な能力を持つ人間はその類に入らない! 大体、デバイスも無しにそこまで魔力を操れる上に並のロストロギアを遙かに凌駕する能力を持つ化け物を従えているなん…君は危険すぎる!」

(…化け物…まあ、向こうからしてみれば、そう言われても仕方ないと言えば仕方ないでござるな…納得などしてやる気は無いでござるが…。)

クロノの言葉に思わず頭に#マークを浮かべる龍也だが、冷静な部分でそう考える。

「君は自分の力の危険性を本当に分かつていてるのか!? 人より強い力を持つ者はそれだけで周りの人間に危害を加える危険性がある! 管理局の保護を受ければ、君の力をもつと多くの人の為に正しく使えるはずだ!!!!」

「下らない…。」

『デスティニー…龍也はクロノの言葉をそう切り捨てる。

「オレはそんな建前の為に力を使う気はない。オレは常に自分の守

りたいものを守るために、力を貸すべき戦友（仲間）の為にオレはオレの力を使う。（そして、どんな理由が有つても、罪は罪。過去のオレが犯した罪を償つため。）

「だが！」

更にクロノが言葉を続けようとした時、医務室の扉が開き。「すまないが、もう少し静かにしてもらえるかな？」

医師が出てきて沿う注意されてしまつ。

「すみません、少し騒ぎすぎました。」

クロノが謝るよりも先に、テスティニーがそう言つて頭を下げる。そして、医師はクロノに何か話が有つたのだろう、クロノに二、三話すとそこから離れていく。

「…クロノ・ハラウォン…一つだけ聞くでござる。お前の戦う理由は何だ？」

クロノの背中にそう問い合わせ掛け、そう言つてテスティニーはフェイト共になのはの居る医務室に入つていく。

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫でござるが、なのはちゃん？」

「龍くん、フェイトちゃん、大丈夫だよ。」

「「」あんね……もつ少し早くなのはの所に行けていれば……。」

「拙者も……結界が張られた事に気が付ければ、もつと早く助けられたんだ」「さるが……。」

二人はなのはの傍らまで行くとそつ謝罪する。一度息を吐くとテスティニーーの姿から龍也の姿に戻る。

「……それに、前に酷い事を言つて、ごめん。」

「あ、ううう……私の方こそ、龍くんとの約束破つちゃって、ごめんね。」

以前の事件の際に言つてしまつた事を喜び合ひ、約束を破つてしまつた事を謝り合ひ。半年振りの再会と仲直り、それを喜び合つた。

「……ストライクフリーダムさんとは、また会えるかな……。今度こそ、お礼が言いたい。」

「うん、私もストライクフリーダムさんともお友達になりたい。」

「……大丈夫でござるよ。『絶対に』また現れるとは思つから。」

『絶対』と言つ所を強調して言つ知り合ひの龍也だった。ふと、話題がフリーダムの事になつた時の会話である。

「はっくしょんー！」

「風邪か、雷斗？」

行き成りくしゃみをする雷斗に時也はそう聞く。

「つーん… 風邪と言つよつも、誰かが噂をしている氣がしたんですけど…。」

「あー… 風邪には氣を付けろよ。」

「はい。」

ティッシュを取り出している雷斗を横田で見ながら時也は、

「そう言えば、雷斗…マイシスで動いているのは…今の所、ウイングゼロとクロスボーンだけでなのか？ 連中の部下の…。」

「あつ、はい。私も龍也も他の親衛隊や海戦部隊のメンバーは見ませんでした。これは推測ですけど、まだマイシスは組織として成り立っていないと思います。」

直接的な上官の居る親衛隊と海戦部隊のメンバーの姿さえ見えないのなら、事实上指揮官を失っている陸戦部隊と空戦部隊のメンバー

を見る事もないだろ？。

「…近面はマイシスの連中とは幹部一人と究極聖獣のパート争奪戦
か。」

「ええ。それで…私達としてはどうしまじょ？…？」

「どうするつて、何がだ？」

雷斗の問い掛けに疑問を浮かべる時也。…今後の方針も決まり、どう動くのかも決まっている以上、何をどうするのか？

「いえ、龍也さんやフェイトさん達に協力するのか…と言つ事ですけど。」

「…はあ…。…龍也や焰との二つ巴は避けたいしな…。焰を叩きのめして事情を聞く。お前は前回の事件の事で『フェイト・テスター』ツサ個人に協力する』と言つ事で手を貸す気なんだろうが？」

「分かつてましたか。」

溜息を付きながら雷斗の行動を眺めていた時也はジト目で睨みながらやう聞く。そんな時也の言葉に苦笑を浮かべながら、雷斗は答えるのだった。

「…まあ、オレもお前や龍也には貸しが有るし、お前達に手を貸すか。」

(…『貸し』つて…そんな物、私達の方が何倍も大きい恩が有るんですけどね…。)

頭を搔きながら叫び続ける母の言葉に心の中でやうやくのだった。

ウルム

（…さて、最悪は雷斗殿を無理矢理でもフリーダムの姿で首に縄を付けてでもフロイト殿の前に突き出すべきでござるか…。）

冒頭から物騒な事を考へてゐる龍也だった。

先ほど合流したクロノに連れられて、なのはとフロイトと共に龍也は激しい戦いで破損したレイジングハートとバルディッシュのいる部屋まで案内されていた。

警戒心全開の場所でデステイニーの姿になつていないので、流石になのはの前で敵意を全開にするのもどうかと考へた結果である。最悪拘束されてもデステイニーの姿に変身出来ない訳はなく、クロスディアを召喚すれば簡単に逃げられる。実際、“前回”の時には時也が同じ事をしてゐたし。

さて、暫くして部屋に付いた三人を出迎えたのはユーノとアルフだった。

「あつ、なのは！……と龍也あー！」

「なのは、体は大丈夫かい？ 龍也も元気そうだね。」

「ユーノ君、アルフさん。……ユーノ君、どうしたの？」

「ああ、アルフさんも久しぶり。って、ユーノ…どうしたんだ？」

龍也の顔を見た瞬間、思いつきり距離を取つて蹲りながら『ゴメン

ナサイ』と連呼しているコーカの姿を見ながら思わず呆然と聞いてしまったのは龍也だった。

「お、おーい、コーカ…。」

「ひいい!? ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、光る掌は止めて! ! !

PT事件の時、龍也に会った時に叩き込まれた『パルマ・フィオキーナ』がトラウマになっている様子のコーカだった。

「あー…オレ、席を外した方がいいのかな…これ?」

怯えるコーカを指差しながらそう問い合わせずには居られない龍也だつた。確かに頭に来たとは言え全力でパルマ・フィオキーナを非殺傷設定でとは言え叩き込んでしまつたが、まさかここまで怯えられるとは思わなかつた。

クロノの手で強制的に正気に戻されたコーカと、アルフに半年振りに挨拶を交わすと、龍也もコーカと半年前の事を謝りあつ。

そんな会話を交わした後、フェイトが部屋の中央にある装置の中に浮かんでいる相棒の下へ歩き出すとなのはと龍也もその装置の中を覗き込む。

「随分と酷くやられたな…。」

装置の中には激しい戦闘によつて躰の入つてしまつている一人の相棒^{トナ}、レイジングハートとバルディッシュが有つた。

一度変身を解除すれば武器が勝手に完全に復活する龍也の「テスティ
ニーの武装とは違い、ただの武器では無い相棒の姿に悲しそうな表
情を浮かべている一人が視界に入る。

「ユーノ、一機の状態は？」

「うん、一機とも損傷が激しくて、今は自己修復機能で直している
けど、一度再起動をかけてから、部品の交換もしないと…。」

クロノの質問にユーノは、なほは達にレイジングハートとバルディ
ッショの状態を説明する。

「そうか。一応聞いておくが、龍也、君の武器は？」

「オレの武器は一度元に戻れば、再変身する時は完全に修復されて
るから、大丈夫。流石に最後のクロノ^{クロノ}ディメンションだとアロンダ
イトに輝は入てつたけどな。」

今更ながら、流石にシグナムの一撃を受け止めた後、ゴッドの拳と
ぶつけ合い、必殺技^{クロノディメンション}の使用の流れは思つた以上に「^{テスティ}」の愛
剣アロンダイトにもダメージが多かつたようだ。

（身体能力だけじゃなくて、武器の強度も多少退化しているみたい
で「^{テスティ}」さる。）（いつ^{テスティ}つ時、武器が実態剣じやない時也殿や雷斗が羨ま
しいで^{テスティ}む。）

ビームサーベル等の武器が主力の一人に対して、そう思わずには居
られない龍也だった。なお予断だが、焰^{フレイム}…ゴッドの武器は拳なので
別に羨ましくは無い。

「でも、あいつらが使っていたデバイス、…だったか？　あれはなんだか、なのちゃん達の使っているデバイスとは違うみたいだけど…あれは？」

「あれは『ベルカ式』と呼ばれる物だ。中・遠・広範囲での戦闘を主体にしている『ミッド式』とは違って、ベルカ式は“対人戦闘”に特化した物で、その使い手は『騎士』と呼ばれている。」

前回の記憶から『アームドデバイス』と『ベルカ式』の事は知っているのだが、それを隠す為に一応そう質問する龍也にクロノが答える。

「じゃあ、あの弾丸みたいな物は？」

「あれはベルカ式のデバイスの特徴である『カートリッジシステム』。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸を使って、瞬間的に圧縮的な破壊力を生み出す事の出来るシステムだよ。古代ベルカ時代でよく使われていた機能らしいよ。」

フェイトがシグナムとの戦闘中に自分の持つデバイスに弾丸の様な物を装填していた事を思い出し質問すると、その説明はユーノがしてくれた。

「…ところで、龍也、奴等と一緒に居た君と似ている奴が連れていた赤い鳥の事を教えてもらえないか？」

「…………。軍神の星、火星を守護に持つ聖獣^{マイソジー}で名前はアレシディア。能力は炎を操る事。聖獣使い（バインダー）は『ゴッドガングダム』、接近戦の格闘能力に特化した奴。…って、デスティニーが記憶してる。」

「…相変わらず規格外だな、君達は…。では、君が戦つた黒い人型は何者なんだ?」

「それに関しては黙秘する。」

何が理由かは分からぬが敵対している焰の情報はあつさりと幼馴染の安全の為に説明する事を選んだ龍也。最近は彼の優先順位が『なのはく時也達』になりつつある様である。

だが、流石に管理局の事を嫌つてゐる時也の情報については黙秘を通す事を選んだ。下手に教えて余計な手出しをされても、自分が時也に恨まれるのだし、時也にまで敵に廻られたら、自分が苦労するのは目に見えている。

(…「クロノ」のKYを生贊に捧げて三人で袋叩きにした後で、雷斗をフェイト殿の前に連れて来て、時也殿にも協力を頼む切欠になるのなら、別に良いでござるが…。)

クロノは時也と雷斗の特殊召喚のためのコストか!? 取り合えず失敗した時のリスクを考えて却下する。

「何故だ?」

「さあ?」

龍也がそんな物騒な事を考えているとも知らず、互いに睨み合いながらそんな事を言い合つてゐる龍也とクロノ。静かだが完全に険悪なムードある。これで、ここに雷斗と時也の一人まで加わった何処まで空気が悪くなる事か。

「レイジングハート、いっぱい頑張つてくれてありがと。今はゆっくり休んでね…。」

その険悪な空気を一切感じさせず・気付かせずにいる龍也の努力によつて、一切険悪な空気を感じていなければ戦いで傷ついたレイジングハートにお礼を言つていた。

さて、睨みあつていても話は進まないと思つたのか、クロノはなは達三人に会つて欲しい人物がいると話、三人を連れて出て行く。

「あー、なんでオレまで…。」

不機嫌な様子で何度もになるか分からぬ心底嫌そうな顔の龍也の言葉が響く。

「つゆ、龍くん。」

「つむれい、君は黙つて着いて来たらどうだー。」

「何でお前の命令を聞かなきやならない? 大体誰なんだ、オレ達に開いたいって人は。」

「本局に勤務する『ギル・グレアム』提督だ。地球で活躍する魔導師に会いたいそうだ。」

クロノの言葉に余計に不機嫌そうに顔を歪める。

「なんで、それにオレも含まれるんだ。なのちゃんは兎も角、オレは魔導師なんかじゃないぞ、^{チビ}K.Y.。」

「誰がチビだ！ 誰が！！！ 大体君の方が年下だろ？ がー？ もう少し、年上を敬え！」

怒鳴るクロノを鼻で笑いつつ、龍也はクロノに近づき、

「オレの方が背は高い。背を伸ばすには牛乳を飲むよりも適度な運動と睡眠が良いんだぞ。」

「つー？ そ、わうなのかー？」

龍也の言葉に過剰な反応をして『〇ーーン』な体制で蹲るクロノ。

「や、そうだったの？」

「やうだよ、なのちゃん。オレは普段から学校に行く前に家の道場での素振りと走りこみ、睡眠時間にしても規則正しい生活を送つてるから。」

そして、『ペシッ！』とクロノを指差し、

「その歳で成長阻害するような職業着いでる時点で、背もついては“絶望的”だぞ！」

クロノにドドメとなる一言を言ご放つ。

「グハツ……！」

「ク、クロノ！」

その一言で完全に崩れ落ちるクロノであった。実際、年下の龍也の方がクロノよりも背は高い。

「ところで、魔導師つて所で、なのちゃんとフェイトさんは兔も角、何でオレまで呼ばれたんだ？ オレは魔導師じゃないの！」

「あ、ああ。君の力の事を教えたる、興味を持つてな。一度会つて……ブツ！」

「なに、人の秘密べらべら喋つてくれてるかア！ 」のオ、口輕豆粒KYOUドチビガア……！」

「ク、クロノ君！」
「ク、クロノ！」

顎に突き刺さる龍也の見事なアッパーに殴り飛ばされるクロノと、それを心配するなはとフェイトだつた。

「りゅ、龍也くん、やり過ぎなの……！」

「い、いや……ユーノの時の反省から、手加減したんだけどな……。」

そりやそりや、ユーノの場合は問答無用の『パルマ・フィオキーナ』だったのに、クロノの場合はアッパーなのだから、十分過ぎるほどの手加減に……なるのか？

時也SHIDE

「…何故でしょ…妙に危険な胸騒ぎがするのは…」

雷斗の眩きが漏れる。

「どうしたんだ、雷斗？」

「い、いえ…何故か身の危険を感じてしまったので。」

丁度それは、時空管理局の本局で龍也が雷斗をフロイドの前に連れて行く方法を考えている頃だった。

「それはそうと…気付いてますか？」

「ああ、さつきから人気が無い。結界を張られたらしくな。守護騎士達か、それとも管理局の狗か？」

臨戦態勢を取るかとした二人の前に白い羽が舞い散る。

「どうりでない、オレだ。裏切り者達。」

ウイングゼロカスタムが空からゆっくりと降りてくると、彼は顔を上げ時也達へと視線を向ける。

「「翼！？」」

「まあ、待て。」

二人がガンダムとフリーダムに変身しようとした瞬間、ウイニングゼロは手を上げてそう告げる。

「今のオレにお前達と戦う意思は無い。オレはお前達に総帥からの“宣戦布告”を届けに来た。」

そつとウイニングゼロは時也に一つの封筒を投げ渡す。

「宣戦布告？」

封筒を受け止め、時也はウイニングゼロを睨みつけながらそつ問い合わせる。

「その通り、今回の夜天の魔道書を巡る戦いの黒幕と、黒幕の計画だ。それを知った上で、好きに動け…オレ達マイシスもその事件に介入する。“第二の究極聖獣のパート”を得る為に。」

「つ！？ ア、^{アルティメットマイソロジー}究極聖獣のパート！？ 今回の事件にも関係しているんですか！？」

「その通り、運良く前回のP.T.事件の時には最初の一つをオレ達が得た。前回とは違い、今回はバインダー全員が揃っている。総帥の命により、マイシス親衛隊隊長『ウイニングゼロ』…総帥に代わり、ここに宣言する。偉大なる総帥エイロスに反抗する愚かなる裏切り者、ガンダム、デスティニー、フリーダム、ゴッド…^{アルティメットマイソロジー}究極聖獣のパート

ーツを巡る戦いの始まりを……

高らかと宣言するウイングゼロを睨みながら、時せばウイングゼロから受け取った封筒の感触を確かめる。

「教えておこう……第一のパーツの“再生”の力に対し、我々が狙つている第一のパーツは最も“破壊”的性質を強く持つている。精々気を付ける事だ。」

時せば達へとさう告げてウイングゼロは純白の翼を広げて飛び去っていく。

（……）それで、総帥から云々ておけと言われた事は全部伝えたか……。しかし、何故パーツの持つ性質まで教える必要がある？）

そんな疑問を持ちながら。

「……行きましたね……時せば……それはどうします？」

「さうだな……参考までに見ておくれか……。」

そつまつて二人はウイングゼロから渡された封筒を開く。

SIDE OUT

さて、あの遣り取りの後、クロノに案内された龍也となのは、フュイトの三人は『ギル・グレアム』と会っていた。

「初めまして、ギル・グレアムだ。」

「た、高町なのはです。」

「フュイト・テスタロッサです。」

「…時野龍也。」

グレアムもなのはと同じ管理外世界地球の出身で、子供の頃に偶然に出会った管理局の魔導師を救つた事で自分に魔法の資質がある事を知り、そのまま管理局入りしたと言つ。

（…ある意味、拙者の知るなのちゃん達の未来の『高町なのは』とは別の可能性でござるな。しかし、その管理局員、狙つてやつたんじゃないだろうな…）

魔法との出会いがなのはと全く似た事に笑うグレアムと、自分と同じ世界の人間が提督と言つ職についている事に驚くなのはに視線を向けながら、龍也はそんな事を考えていた。

そんな自分が知る限り僅か一回。そんなに偶然が重なる物かと言つ疑問を浮かべる。全く同じ状況…それを考えての疑惑。

そして、時也とは違い、自分にとつての“過去”で有り、ある意味の未来で敵対していた『高町なのは』を目の前にいるなのはとは別人と既に切り捨てている。

（…まあ、拙者が力を得る切欠よりはマシでござるな。）

クロスティアとハーディアのパート…その一つに宿る『テスティニア・ガンダム』の意思に選ばれた事、以前の自分にとつての悲劇の始まりを思い出すと苦笑してしまつ。

そう考えた後、再びグレアムの話へと耳を向けると、彼はその持てる才能を發揮し、艦隊指揮官となり、後に執務官長に就いた“歴戦の勇士”と言う呼び声も有つたそうだ。

そこまで話を聞いた後、龍也は疑問に思つ。“前回”的マイシスと管理局の戦争に目の前の男の名前は最後まで挙がらなかつた。

それほどの人間ならば、翼の性格上間違ひなく調べ上げ情報を全員に教えているだろう。現にJS事件等の関係者…機動六課の両分隊や前線に立たなかつた守護騎士達を初めとする構成員、及びナンバーズと言つた者達の戦闘データの詳細、能力、そこから分析できた弱点さえも『要注意人物』として見事に調べ上げていた。

（…前回の時に何らかの理由で前線から離れたとしても、指揮官としては立つていられるはず…寧ろ、翼なら『最優先で潰せ』と言うはず…。だとしたら…既にあの時点で引退していく、管理局も止めていたんだろう…。）

その後、グレアムは保護監察官としてフェイトにある条件を出す。その条件とは“自分を信頼してくれる友達や人を絶対に裏切らない事”だった。その条件を飲むと言つなら、フェイトの行動に何も制限しない事を話す。フェイトはその条件必ず守ると答えた。

「ところで、君が報告に有つたデバイス無しで魔力を操る変わった
レアスキルを持つた少年だね。」

「まあ、確かにバインダーの力は変わっているのは認めますけど、
オレに何のようですか？」

「いや、君には是非とも管理局に入つて貰いたい。君ほどの力があれば多くの世界を「お断りします。」何故だね、その力は人の為に使つてこそ価値が有るのではないかね？」

グレアムの言葉に龍也は苦笑を浮かべる。

「無理ですね。オレには百人も千人も救いたいって言う考えは無い。

」

そこまで言つた後、龍也はデスティニーの姿に変わり、掌を握る。

「拙者が守りたい一握りの人達を守る。それだけで十分でござるよ。全てを守る為に必要なのは、意思でもなければ心でもない、全てを踏み躡るだけの力でござるよ。」

デスティニーは握つていた掌を広げ、

「そんな力に興味はないし、意味も無い。…そんな物は手に入れた時点で守りたい人達を失い…“信頼してくれている人達を裏切る”だけでござる。だから、拙者はそれで十分。」

そう、デスティニーの力を得た事で龍也は“前回”は両親や故郷、そこに住む人々を失った。強大な力を得る事の代価は大切な人々の命と理解している。

『デスティニー』への変身を解除し、元の姿に戻ると、

「一握りの人達を守る。それがオレの力を振るう理由。だから、管理局には入らない。理解していただいたでしようか？」

「いや、すまなかつたね。そこまでしつかりした考えを持っているなら、勧誘は無理そうだ。」

SIDE OUT

焰SIDE

八神家にて、ヴォルケンリッターのシグナム、シャマル、ヴィータ、そして、狼形態の『盾の守護獣ザフィーラ』と、彼等と協力関係にある焰はヴォルケンリッターの主で有るはやてと共にゆつたりと、食後の時間を過ごしていた。

「つと、もうこんな時間か。そろそろ、帰らないとな。」

時計を確認すると焰はソファーカラ立ち上がる。

「ええー、焰兄、もう帰るんか？」

「今日は泊まつてけば、いいじゃん。」

残念そうにそつまつのははやてどヴィータの一人。そんな一人の頭を撫でながら、

「悪いな、はやて、ヴィータ。流石に今日も帰つてこないだらうけど、帰らないと母さんが心配するんでな。」

「ええ、だつたら電話しとけばええやん。」

「主にヴィータも、あまりジンノを困らせては行けません。」

そんな一人をシグナムが嗜める。

「ま、明日も遊びに来るからさ。」

「うう…しゃあないな。」

「わーつたよ。」

焰を引きとめよつとしていた一人が離れると、

「じゃ、また明日な」

「またな、焰兄。」

「絶対に来いよ、約束だからなー。」

そう言つて八神家を後にする焰を見送る様にはやてどヴィータの声が響く。

(…たくつ、事態の進行が早いからつて、一般の人間や、時也にま

で手を出して、あいつ等は…。）

今日のヴィータとシグナムの行動に帰り道で思わずそう考えて頭を抱えてしまつ、焰。色々と説教はしておいたが、はやての為と言わるとそれほど強くは出れない。不幸中の幸いか、今回の一件で管理局がこいつに向かつてきてくれるのだから、向かつてくる局員を返り討ちにでもして蒐集すればいい。

危険性は高いがそれで数は稼げるだらう。最悪は…。

「向かつてくる敵はオレが叩き潰す。それだけだ。」

「それだけで済むほど事は自体はシンプルじやないぞ、焰。」

焰は突然聞こえてきた声に反応し、身構える。

「お前…翼…？」

「…久しぶりだな…焰。」

そこで相対するのは、かつての親友同士…。電柱の影から現れた翼を睨みながら、焰は何時でもゴッドガンダムに変身できるように身構える。

「…そう怖い顔をするな。今日は戦いに来たんじゃない。」

「なに?」

「…お前に一つほど伝えておく…。」の時点での守護騎士達は知らないだろうが、夜天の魔道書に巢くつ“闇”は完成した時に動き出

す。」

「どう言つ意味だ！？」

「…完成して直に力が渡される訳は無いと言つ訳だ。詳しい事は戻つてくるなら教えるが…そんな気は無いんだろう？」

「当たり前だ！」

「…残念だ…。もう一つ…総帥からの「」命令で、オレとクロスボーンは全面的にお前達に協力する事になった。お前くらいには先に話を通しておこうと思った。…オレがここに来たのは、ただそれだけだ…。」

翼の言葉に焰はより視線を鋭くし、翼を睨みつける。

「ハツ、協力だと…冗談は止めろ！」

「冗談じゃない…。それに、オレ達の目的も有る。」

「目的…なんだよ、それ？」

「報酬はちゃんと受け取る。それだけだ。なに、それほど高い物じゃない。お前達…いや、夜天の魔道書の主にとつても…“不要”な“ノリ”を引き取ろうと言つ訳だ。」

「はあ？」

「夜天を闇に変える二つの元凶…それがオレ達には必要なだけだ。」

「つー？ 翼ア！…！」

翼の言葉を聞き「ゴッドガンダムへと変身して殴りかかるが、その拳はワインクゼロに変身した翼に簡単に避けられる。

「…受け入れられない心境は分かるが、今は協力して貰おう…。同盟を受け入れるなら今回の一件が終わるまで、お前達とは戦わないと総帥の名に賭けて誓おう。」

「教えて貰おうか、なんでそれをオレに聞く…？」

ゴッドのラッシュを避けながら言葉を続けるワインクゼロに更に叫びながら問うが、

「…守護騎士側でオレ達の事を知っているのが、お前だけだからだ…。それに、総帥は代金はもう一つ用意しているそうだ。」

「もう一つだと？」

「…最大の犠牲者を救う為の情報…。協力した方が得だと思つぞ、オレ達の欲しい物はお前達がどう動いても手に入るんだからな。」

ワインクゼロの言葉にゴッドは大きく拳を振り上げる。

「だつたら、何でオレ達に協力しようとする…？」

大振りな一撃…今までのラッシュの方が避けられないであつたその一撃をワインクゼロは顔に、

「総帥はその方法も考えていた。だが、お前達達と言つイレギュラ

ーの存在を考えれば、協力した方が確実……そう考えただけだ。」

黙つて受けていた。

「オレと有つた事は、次に会う時まで黙つていて貰おう……。判断は次に有つた時……守護騎士達と決めて貰えばいい。それだけだ。」

そう告げてウイングゼロは翼を広げ飛び去つていく。

SIDE OUT

龍也SIDE

とある部屋にアースラスタッフと龍也が集まつていた。

「さて、私達アースラスタッフは今回、ロストロギア『闇の書』の搜索、及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました。しかし、肝心のアースラが暫く使えない都合上、事件発生地の近隣に臨時の作戦本部を置く事になります。」

クロノの母で有りアースラの館長『リンディ・ハラオウン』がそう話を切り出し、スタッフに役割を伝えていく。

「それで、君はどうするんだ？　君は魔導師でもなんでもない、ただの民間人だ。何の関係もないこの事件を手伝う必要は無いんだぞ。」

「

「せうだけどな、向こうにオレと同じ聖獣使いが居る以上、オレが手を貸さない訳にはな。それに…オレとしても、幼馴染に怪我をしてくれた奴等には落とし前を付けさせるたいし…なにより。」

クロノの言葉にせう答えるながら、龍也はなのはへと視線を移す。

「なのちやんが心配だからな。今回だけは手を貸してやる。」

「せうか。」

心底嫌そつな顔でそつ答えるクロノだが、

「だつたら、せめてこちらの命令には…納得がいく範囲なら、従うけど、納得行かないなら勝手に行動させてもらひ。」君は…。

「以前…町を危険に晒した事をもう忘れたか？ オレやフリーダム、なのちやんが動かなかつたら、町にまで被害が及んでたぞ。」

そつ…クロスボーンと戦つ事となり、クロノに破壊力以上に殺傷力を高めたもう一つのクロノディメンションを打ち込みたくなつた一件である。

「因みに司令部は、なのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのお家の、すぐ近所になります。」

「え？」

リンディが悪戯つ子の様な笑みを浮かべて言つた言葉になのはは、一瞬ポカンとした後、フェイトと顔を見合わせ。

「よかつたね、なのちゃん。」

「わあ～！」

嬉しさからそう笑みを零した。

翌日、引越しが始まっていた。なのはは家からすぐ近くだった為に、フロイトと一緒に嬉しそうにはしゃいでいる。

「あ、龍也くんに雷斗くんと、そつちの人達は？」

雷斗と時也をほほ無理矢理に連れてきた龍也も手伝って来た。時也は最後まで嫌がったのだが、

「うん、オレの文通相手の時也と、そのお姉さんの時也さんだよ。時也達もこっちに引っ越してきたから、一緒に紹介しようと思つて、つい想い出しちゃうね。」

偶然にも話を聞いた時音に連れてこられた訳である。

「始めてまして、高町なのはです。」

「フロイト・テスター・ロッサです。」

「始めてまして、フロイトさん。私は光羽雷斗と言います。どうぞ、

よひしへ。」

「始めてまして、なのはちやんこフロイトちやん、私は円富時音つて言つて、いわちは弟の時也。時也は同じ年だから、仲良くしてあげてね。」

「はーー。」

時音の言葉に元氣よく返事をするなのは。そして、時也は時音に促され、

「円富時也……まあ、よひしへ。」

皿口紹介する時也だつた。そして、時也は龍也に近づいた。

「なんで、思いつきり敵地に連れてきてるんだよ、お前は？」

「いや、どの道、時也はオレ達と同じ学校に転校するんだつ。なのちやんとは学校で顔を合わせるんだから、一緒だろ?。」

「まあ、確かにねなんですねうどね。…気付かせんか?」

「大丈夫で!」れるよ。…多分。それに、気付かれるなら遅いとかの違いで!」れる。それよりも…。」

「時音さん…ハイロスで有る可能性のある人ですか?」

「…ああ…。」

小声でそんな事を話している三人だった。

なお、アルフは子犬モード、ユーノはフューレットモードである。

フュイトは時也と龍也の「一人と小声で話している雷斗の背中を見つめながら…。

「？ もうしたの、フュイトちゃん？」

「あつ、なんでもない。（何でだるり…フリーダムさんの様な気がする。）」

微妙にフリーダムの正体に近づいているフュイトでした。

そんな中、なのはの友人の『アリサ・バーニングス』と『月村 すずか』と一緒になのはの家である喫茶店『翠屋』でお茶をする事になったのだが…。

（…味が分からぬ…。）

警戒心全開な為に何を口にしても全く味を感じない時也だった。

「まあ、気持ちは分かりますけどね…慣れですよ、慣れ。」

「うふうふ。」

時音を含んだ女性陣とは別に男二人で揃つてお茶している時也達だが、一度この店には近づくまこと心に決める時也だったが、常に現実は彼に残酷である（笑）

さて、その後、アースラスタッフがフュイトに聖祥小学校の制服を

渡し、時音が『私と時也も同じ学校なのよ。』と言われた事で同じ学校に通つ事が明らかになつたのである。

その日の夢の中…

「…オレの『氣』が休まる時つて…？」

「あー…なんか、悪い事しちゃつたでござるか？」

「良いでしょ、どうせ何時かは分かる事なんですか？」

（彼の認識の上では）敵と学校まで同じになつてしまつた事に心底落ち込んでいるガンダムの姿の時也だった。

だが、同じクラスでも一切警戒していらない龍也と雷斗も居るのだが、その辺は警戒心と敵意の差だろうか？ それとも、『前回』の彼女達と今の彼女達を重ねてみると時也と、別人として割り切つている龍也達の差だろうか？

付け加えておくと、焰に至つては一応、前回の時で戦つていたヴォルケンリッター（外見まで変わつてないし）やはやて達と一切気にせず仲良くやつてしているのは、『過去は過去、今は今』で割り切つているのも有るが、彼の性格上、龍也以上に警戒していないだけである。こう言つう時、一切苦労しないタイプなのだ。

なお、地球に居る機動六課の中心人物達に対して警戒心の低い順は、

焰（警戒心〇）＼龍也（気にするほどじゃないで）＼アーラル（雷斗（少しあは氣をつけましょ）＼時也（警戒心全開）である。

多分、心境が変化するまで永遠に時也に安らぎの時は訪れないだろう。

「あー…バレたらバレたで、最初はあのＫＹが出てくると思つてござるから…ストレス解消に全力で戦えば良いでござるよ…。」

デスティニーはクロノを生贊にガンダムを回復。

「まあ、生きてさえ居ればどれだけボコボコにしても大丈夫だと思いつから、取り合えず聖獣^{マジンロジー}がバレるとか考えない方がいいですよ。ＫＹまでなら返り討ちにすればいいだけですから。」

フリーダムもクロノを生贊にガンダムを回復。

「で、出でたのが悪魔と死神だつたらどうする気だ？」

「「まあ、その時はその時考えれば良いですよ（で）」（で）」（で）」
悪魔（死神）とか呼ばないで上げて下さい（で）」（で）」（で）」。

そう即答する二人だつた。二人の中で優先順位が高い位置にあるなのはとフェイトの二人とは比べ物にならない程扱いの悪い優先順位が下から数えた方が早いクロノだつた。……下手をしたら、クロノ、良くて管理局引退レベルのダメージを負うのではないだろうか…？ 他でもない、ガンダムのハーディアを使ったストレス解消によつて。

「あー…だから、態と聖獣の事をバラして、クロノ殿を呼び出すのは無しでござるよ。」

「分かつてゐる。ストレス解消のサンドバック用意する為にそんな危険は払わないよ。」

「…それなら、良いんですけどね。」

明後日の方へと視線を向けながら、ガンダムは一言呟く。

「はあ…スバルちゃんに会いたい…。」

10年と言つ時やの予想よりも早く最初の再会は起つたのだが、それはまた未来の話である。

次なる戦いへ向けての暫しの休息（一名を除いて。）。

ガンダム達反マイシスチーム、アースラチーム、守護騎士達、マイシス…四者の思惑が絡み合つ戦いへの新たな幕が開こうとしていた。

つづく…

007ステージ -新たなる力-

????? SIDE

翼が焰に接触した時の深夜…

月の光に照らされながら、純白の翼を持つ破壊の天使…ウイングゼロが佇んでいた。

「ヘルメディア！」

月の光によって作り出される影から現れるのは非対称の双剣を持つた鎧武者^{マイソロジー}の様な人型の聖獣^{マイソロジー}『ヘルメディア』。

「ヘルメディア…増殖せよ！！！」

ウイングゼロの宣言と共にヘルメディアの影から幾つかのバーツが欠損している数体のヘルメディア達…クローンヘルメディア達が現れる。

「…融合…。」

宣言と共にクローンヘルメディア達がパーティ状に分離し四本の腕を持つ一体の巨大な異形の巨大聖獣を作り出す。

「能力の制御とシステムのコントロールには成功した…。合体は本体ではまだ試していないが、クローンヘルメディア達の戦闘力を考

えても、これは大体本体の1・5倍程度と言ったレベルか。」

そう呟くと最後に『実戦テストをしない事には正確なデータは分からぬ』と付け加える。

「…今のオレではヘルメディアの能力で完全なクローンを作り出す事は無理か…一体の合体形態を作り出すのに、何体必要になる?」

現に作り上げたクローンヘルメディアは欠落した部分が多く、本来ならヘルメディア本体とクローンヘルメディアだけで完成するはずの巨大ヘルメディアもクローンだけとは言え大量に必要になり、総合しても戦闘力は本体よりも多少高い程度。

本来なら三体目以上クローンヘルメディアを取り込めば、合体状態のヘルメディアは戦闘力を強化できるはずなのにである。

思わず溜息をついてしまうが、前回の時ではまだ合体状態さえも使いこなせなかつたのだから、進歩したとは言えるだろう。

完全なヘルメディアのクローンを作り出すには、今の自分ではまだ無理かと考えずには居られない。

「戦闘力に直結しない部分の能力の制御が此れほどきついとはな…。当面の課題は能力の制御に尽くるな。（オレが使いこなせない限り、ヘルメディアと総帥のウラノディアは真の力が使えないからな。）」

溜息を付きながら己に課せられた今後の課題を上げるマイシス親衛隊隊長ウイングゼロ…翼だつた。

「マイシステムSHIDE

夢の中、それぞれの聖獣達の足元で、ガンダム（時也）、デスティニー（龍也）、ストライクフリーダム（雷斗）の三人が集まっていた。行っているのは、現在の事件についての情報交換。

「…と言つて、拙者もなのちゃん達と一緒にアースラチームに協力する事になつたでござる。」

後に『闇の書事件』と呼ばれる事となる事件に建前上時空管理局側となつたデスティニーがそう言つて話を終える。

「厄介な事ですね。私達は闇の書の主が誰なのか知つてゐるところだ。」

フリーダムが溜息をつきながら呟く。そう、この場に居る全員が闇の書の主が誰なのかは知つてゐる。

『ハ神はやて』…未来では時也達が管理局と敵対した際に最も多く戦つた管理局の切り札と言つべき部隊『機動六課』の部隊長にして、守護騎士達の主、夜天の王。

マイシスでも要注意人物の一人として龍也と雷斗はデータを渡され
ていたし、未来ではなのはとフェイトの二人と並んで有名な事もあり、時也も顔も名前も知っている相手である。…最も時也は前回の
時はでは管理局に入った経緯などは一切調べておらず、飽く迄倒す
べき敵として能力などの必要な事だけしか知らないが。

「そうだな…オレ達三人で偶然を裝つて八神はやてと一緒に居る守
護騎士の一人にでも会うか？ そうすれば、特に烈火の将にはオレ
は会つたし、上手くすれば龍也からの一言で直に解決するだろ？？」

「ですが、そう簡単にも行かないんですね。なるべくでしたら、
私達の事は知られたくないですし…。下手をすれば、時空管理局に
時也さんのハーディアの事だけでなく、私の事まで知られる危険も
有る上に…焰さんの事も有りますし。」

そう、ヴォルケンリッターの側には何故か焰も参加しているのだ。
下手に戦う事になつたら焰さえも敵に回してしまつ為に、素顔での
直接的な接触は避けるべきだと考えている。

「確かに…烈火の将の前でガンダムになつたのは拙かつたな…確實
に管理局にオレの情報が流れる。」

「ええ、ですから、私はフェイトさんや…“特にアルフさんには”
一切正体に繋がる情報を出さない様に気を付けていたんですよ。」

「…どう言つ意味で“じれる”か？」

「…はあ…私はアルフさんの事を信頼していても、信用はしていな
かつただけですよ。守護獣や使い魔…更に言えば守護騎士達も最優
先すべきなのは『主』だけ。下手に私の正体を知られたら、フェイ

トさんの罪を軽くする為に証言しかねないので。フュイトさんに私を『裏切った』と言う余計な負い目を与えたくなかったですからね。

「

「はあ…確かに一理あるな。ウォルケンリッターの連中も捕まつたら、オレの事は平氣で教えてくれそうだ…。」

思わず溜息をついてしまうガンダム。敵対しているのだから仕方が無いこと言つてもそれだけは避けたい状況ではある。

「…ええ…まあ、今の所時也さんは管理局と敵対していないですし、向こうが手を出したら、正当防衛を理由にエクリプスクライドでも叩き込めば良いと思つますよ。」

「せうでござる。拙者も最新の注意を払つたとは言えクロノティメンションを叩き込んだでござるか…。」

「…そうだな…。」

正当防衛にしては過剰過ぎると思つたが…叩き込むのが『必殺技』なのは、そして、一つどうでも良いつが…。

「…でも、なのがやん(フュイトやん)には止めて欲しいでござる(止めてください)。」

しつかりとなのはとフュイトに対してだけは止めるように釘を刺す一人だった。前回は完全な敵対状態とは言えハーディアを使って未来のなのは達に対し必殺技を叩き込んだのだが。

「分かつてゐる…今のあいつらはオレの知つてゐる奴等じゃないだ

目の前の一人からも何度も注意されているだけ有つて多少警戒心は解けているのだが…それでも、残つてゐる物は残つてゐる。

「時也さんの氣持ちは分かるんですけどね…。私も始めてあつた時は警戒してしまいましたし。」

口には出していいが、『何より現在進行形での二人はガンダムが憎む時空管理局に関わつてゐるのだから。』と心の中で付け加える。

（まあ、拙者達は時空管理局と関わる前に知り合つたでござるから、余計な警戒心を抱く事は無かつたと言えるでござるが。）「それにしても…情報の出所は信用出来ないでござるが、それ以前に拙者に言わても何も出来ないでござる。この人とは拙者も有つた事は有るけど、こんな非道な事をする人には見えなかつたでござる…。だが、動機や計画を聞けば納得も行く…寧ろ人物像と重なるでござる。」

「

翼^{（ウイングゼロ）}から渡された今回の事件の黒幕と真相…それを知つた上でどう行動するのかは悩む所である。勿論本人達曰く“悪の組織”のマイシスが出所なだけに情報事態が偽りと言つ可能性もあるが、それは真っ先に否定した。

…マイシス側にとつてそれをする上での利点が少なすぎるのだ。精々が時也達と管理局側…アースラチームとの敵対程度だが、既に時也達とマイシスを含めれば盤上は四つ巴の様相を見せてゐるのだし、管理局側と既にある亀裂を広げた所で利点は少ない。

念の為に時也に黒幕とされている人物と上手く接触できいか聞い

てみたが、運が良い事に時也は黒幕とされている既に接觸しているので問題なく聞き出せた訳である。

そして、計画の内容から浮かび上がる人物像と時也が感じたその人物像を比べてみた訳だが…見事に一致してしまっていた。

「そうか。だとしたら、こいつが事件の黒幕で間違いなさそうだな…つたく、下手したらこの野郎のせいでオレ達の聖獣もバカな計画お蔭で狙われるって訳か！？」

「あー…確かに時也殿が言つていた聖獣についての仮説。意思を持った魔力…一種のエネルギー生命体と考えるなら、間違いなく狙われるでござるな。星の加護をもつた神候補の聖獣の魔力など、下手をすれば夜天の魔道書の容量を遥かに超えていそうでござる。」

「そうですね。でも、考えてみると色々と腹立ちますね…。向こうが私達を利用しようとしたら、報復にこの計画の要のデバイスですが…それを取り上げて目の前で叩き壊しましょうか？ 無くなつたとしても、代用は龍也のクロノキャプチャード何とかなりそうですし。」

クロスディアの持つクロノキャプチャードによる時間停止ならば間違いない計画の中にある方法よりも確実だらう。大き過ぎる問題点を一つ除けばの話だが。

「問題は大きさでござる。流石にクロノキャプチャードはクロスディアより巨大な相手には効果が無いでござるよ。」

デスティニーがフリーダムの言葉にそつ反論する。デスティニー自身それについては一度経験済みである。

「やうだな。それについては考えてみるか。だけど、それ以上に考
えるべきことないか……？」

「「なんですか（で）」ざるのか）？」

「…オレの仮説が正しく、夜天の魔道書^{マイソロジー}が聖獣^{マイソロジー}を魔力として蒐集するとする…。そうなつたら、確実に守護騎士達^{マイソロジー}が…主である八神はやても危険だ。いや…最悪は聖獣^{マイソロジー}の暴走で世界全体が滅ぶ。」

聖獣に選ばれたガンダム達は兎も角選ばれてない人間が無理矢理奪おうとすれば、聖獣^{マイソロジー}の暴走が起こる。

そうなつたら良くて世界が一つ消える。最悪は大破壊^{カタストロフ}が起こり次元世界全土が消え去る。

聖獣^{マイソロジー}の力に由来しない方法によつて完成した聖獣^{マイソロジー}を全て奪取する事は、ガンダムの記憶の一部と未来と言つべき過去で調べた聖獣^{マイソロジー}に存在していた安全装置のスイッチである。

だが、考えてみれば聖獣^{マイソロジー}に選ばれても居ない強欲な第三者^{マイソロジー}が別の方法で戦いに勝利した神となつた聖獣^{マイソロジー}を手に入れるとする。そうなれば…世界は第二の地獄となる事は間違いない。暴走してその手段毎消し去つてしまう方が何倍も安全だ。

そして、良くても夜天の魔道書は聖獣^{マイソロジー}の力と意思に侵食されて確実にヴォルケンリツター達は消える。恐らくは今まで聖獣^{マイソロジー}の意思に飲み込まれ、八神はやての精神は死ぬ。候補とは言え、聖獣^{マイソロジー}は星の加護を持つた神なのだから。

「い、今更ながら私達の力つて…。」

「とんでもない爆弾で）」ざるな…。」

「…本当に今更だな…。」

冷や汗を流しながら『アースティニー』とフリーダムに対してガンダムは本当に今更と思つてしまつ。第一危険だと入つても自分達の下に有る間やパーシの状態なら奪取された所で安全なのだし。そして、本当に今更だが、自分達の持つ力の大きさを改めて実感してしまうのだ。

「兎も角だ。龍也、お前はアースラチームの仲間として動きながら、黒幕の動きを見ていてくれ、何か動きが有れば分かるだろ？…不利な事情が起こればそれは黒幕の仕業と考えて良い。」

「分かつたでござる。」

ガンダムの言葉の『アースティニー』が頷く。

「オレと雷斗は第二勢力として動くか…黒幕に付いては要注意だ…。」

「分かりました。」

ガンダムの言葉に頷くフリーダム。こつして、次の動きについて話し合いを終えたのだが…。時也達の計画は何気に早々と崩壊する事になる…が、同様にマイシス側も黒幕への警戒を露にしているのだから…何気に時也達にとつても良い方向に進んでいると言えるだろう。…………本当に珍しく。

「それにしても、時也殿に雷斗…良かったのか大変なのが分からないけど…何と言つかその…。」

「いえ、私としては何も気にしてませんけどね。フロイトさんはフ

リーダムの私しか知りませんし。」

「…オレも流石にあの一人と学校で同じクラスに転校した時点で色々と吹っ切れた。どうせ目の前で変身しなけりや、オレも雷斗も精々が魔力を持つたタダの人だ。」

そう、見事に時也もフェイトと一緒になのはや龍也や雷斗の居るクラスに転校してしまった訳である。一人と同じクラスなのはありがたいのだが…流石に偶然が重なった時点で警戒するのを止めた。向かってきました倒すだけ、当面の敵はマイシスと言う方向で時也も自分の中に決着を付けたのだ。

付け加えておくと聖獣^{マイシス}が魔力生命体ならば時也達もリンク^{リンク}カーコアを持つつていても不思議ではない。結構高いランクらしいが…その辺は別に気にしていないし興味もない。精々遠慮なく地獄に叩き込める管理局員を引き寄せる餌としか捕らえていない。

『悪人に人権なし』…エクリプスクライドで切られようが、クロノディメンションで切り裂かれた拳句に異次元に落とされようが、問題ない。と考えているガンダムだった。

SIDE OUT

焰SIDE

「ふあくねえつ…… ハイパー・ゴッド・フィンガー……」

ヴィータとザフィーラと共に魔力の蒐集に出かけていた焰・ゴッド・ガンダムは両腕のゴッド・フィンガーを順番に収集対象の野生生物に叩きつける。

なお、知名度は低いですが実在の技です、両腕でのゴッド・フィンガーこと『ハイパー・ゴッド・フィンガー』。

「良し、終わり。」

「ゴッドの一撃でKOして魔力を奪つたのだが……。」

「くそ……」いつ、こんなデカイ団体してるクセに持つてる魔力は少ない……」

「これだけ倒して蒐集できた魔力はほんの数ページ分か……。」

「はあ……アレシティアの魔力分けりやいいんだけどな……。」

「焰兄のあれは一度蒐集しようとしたけど、リンク・コアが無かつたしな。魔力はバカみたい持つてるクセに……」

「確か、オレの魔力も下手に蒐集しようとして、シャマルが怪我しがけたつ……」

そう、少しでもページを稼ぐように焰自身の魔力を分けようとしたのだが、リンク・コアに触れた瞬間にシャマルの手が何かに潰さ

れそうになつた。…怪我を見てみたが…ゴッドフインガーが掠ればこんな傷跡になるのだろうと思える様な痕が残つていた。

「そうなると、シグナムが戦つたガンダム達バインダーは対象から外した方がいいだろうな。流石に腕とか無くなつてたら、転んだとかで誤魔化せないだろ?」

「あ…ああ…。」

「う…うん…焰兄。」

焰の言葉にそうなる未来を創造して思わず顔を青くするヴィータとザフィーラの一人。ハイリターンだが、それ以上のハイリスクの相手と認識された瞬間だった。

そんな事を話しながら柔軟運動をしている焰と、カートリッジを再装填しているヴィータと、ザフィーラの後では同じ姿の生物が幾つも転がつていた。

「さて、次の蒐集相手を探すぞ!」

「おう!… つと、ヴィータ、休まなくて大丈夫か?」

「平気だよ、焰兄、あたしだつて騎士だ。この程度の戦闘で疲れるほど柔じやないよ。」

「それよりも、焰は大丈夫か?」

「ん? いや、やつと体が暖まつて来た所だぜ、アレシディアも有るしな。」

「いや、焰兄のあれを使つたら蒐集にならないって。」

互いにそんな会話を交わしながら休息を終えた三人は次の収集対象を探して動き出した。

SIDE OUT

蒐集から戻つた海鳴上空では結界が発生していた。その中に閉じ込められているのは、焰、ヴィータ、ザファイーラの三人。その三人を数人の武装局員が取り囲んでいた。

「…囮まれたか。」

「おー、おー、仕事が早い事で。へつ、でもな、向こうから獲物がやつて来てくれたんだ、遠慮なく頂くぜ。」

「いや、流石に時間は掛けられない。」

「そりや残念だな、結界は…。」

「あたしがぶち壊す！一気に突破すつぞ！」

「おひー！ つて、それはオレがやるー。」

突つ込もつとある「シードヴィータの一人がそつまつていの間に局員達は、

「都市上空にて捜索指定の対象三名を補足。現在、強層結界内部で大気中です。」

『相手は強敵よ！ 交戦は避けて、外部から結界の強化と維持を！』

「了解！」

『現地には執務官を向かわせます！』

彼らへの対応を話し合っていた。特に話は焰が『スバルタンインフェルノ』まで使おうと言つ話にまでなつていた。下手したら死人が出るぞ。

そして、同時に向かうと言つ事になつた時、グラーフアイゼンと拳を構えるヴィータと焰。だが、三人を取り囲んでいた局員達は散開していった。

「何だよ……あいつら逃げやがつたぞ？」

「つー？ 違うぞー。」

「ヴィータ……上だ……！」

相手の行動に呆気に取られているヴィータに、ゴッドとザフィーラが何かに気が付き、上を見上げると続いて、ヴィータも見上げる。そこにはクロノが杖を上げていた。

「ステインガー・ブレイド、エクスキューションシフト……」

自身の魔力で生み出した数百を超える剣状の魔力の刃を、ゴッド、ヴィータ、ザフィーラに向かつて発射する。

ヴィータとゴッドを守るように前に出ようとしたザフィーラを押しのけて、ゴッドが前に出る。そして、三人を何百と言ひ、剣の雨と青白い爆発に飲み込まれる。

「はあ……はあ……少しば通ったか？」

流石にクロノも大量の魔力を消費したせいで息を切らせていたが、少しばダメージを負わせられたと思つたが、

「分身殺法・ゴッドシャドー+ハイパー・ゴッドフィンガーシールド！」

そこには、ある意味、究極な理不尽の権化がいたのだ。

「ゴッド兄ー？」

「ゴッドー！」

「バカな……あれで無傷だと……？」

煙が晴れていく中で一人の前に立つて受け止めていたゴッド。その場に居た全員が無傷で立っていたのだ。

「へへ、全部で一百七十五発…お前が一百七十五発の刃を放つなら、オレは一百七十五になつて受け止める…」

「…なんだそれは！？ 理不尽すぎるだらつ…！… 大体、ビリヤ
つて増えた！？」

至極最もな突つ込みが出るのでした。そんな叫びをスルーしつつ、ゴッドはクロノを指差し、

「やつてくれるじゃねえか、あと一歩遅かつたら受け止め切れなか
つたな。でもな、このお礼はたつぱりさせてもらひや…！」

高らかと宣言するゴッドにクロノは背中に冷や汗をかく。デステイ
ニーと互角に戦つたと言つ事はクロノも知つてゐる。しかも、（マ
イシス時代の立場上）龍也からは自分よりも強いと言われているの
だ。デステイニーに負けたクロノでは勝ち目は無いに等しい相手に
狙われた訳なのだから。

だが、そんなクロノの所に『助つ人が送られた』と言つ連絡が届く。

クロノのいる位置から少し下に有るビルの屋上になはとフロイト
と龍也、そして、すこし離れた所にユーノとアルフの姿があつた。

「それじゃあ、行こうか、なのちゃん、フロイトさん。」

「うん。」「

龍也の言葉に頷く一人、それぞれ修理の完了したデバイスを掲げて起動させるが、何時もと様子が違う事に気付くと、通信を通じて『エイミィ』が話してくれた。

『呼んであげて、その子達の新しい名前を…』

「レイジングハート・エクセリオン…」

「バルディッシュ・アサルト…」

「セット・アップ…！」

「ユニオン…！」

新しいバリアジャケットを纏い、デバイスを構えるのはトフュイト。そして、デスティーの姿に変わる龍也。

別の場所…

「始まったか。」

「くつ、やつとオレ等も暴れられるぜー。」

結界の外部から監視していたウイングガンダムゼロカスタムとクロ

スローンガンダム・フルクロスのマイシス幹部の一人。

別の場所からは時也と雷斗も近づいていく。

ここに第一ラウンド…いや、その言い方は正しくもあり、間違つても居る事だらう。

だが、ここではいつ言い換えよ。

ここに、ヴォルケンリッター・マイシスの連合軍とマイシスチーム・アースラチームの連合軍の戦いの前哨戦が始まった。

つづく…

翼 SIDE

思い起こすのはマイシスの旗の下に集った過去の会話…。

『私の様な悲劇を繰り返さない為にも…私は戦います。』

雷斗…。

『例えそれが罪で有つたとしても…拙者はこれ以上の悲しみを生み出さない為にも、罪を背負つ覚悟は出来てこむでござる。』

龍也…。

『へへ、あいつ等のせいで泣く奴等が出てくるなり…オレが全て叩き潰す。難しく考えたり、面倒な事は苦手なんだよ。』

焰…。

『はい? ピンとも良こそ、オレは楽しく戦えりゃそれで十分なんだよ。』

宗一…。

…焰、雷斗、龍也…オレ達の道は何時違えたんだつな…。聖獣の力を得て総帥の旗の下で戦う為に集つた時…その時は見ていた景色は同じではないにしても…似た景色を見ていたはずだ。

「…考えるだけ意味の無い事か…。」

オレは管理局の張った結界へと視線を向ける。この中に焰も居る。この時だけは再び仲間として戦える。

「（…何れは再び敵になる…。…分かつていても嬉しい物が有るな…。）行くぞ、クロスボーン。介入開始だ。」

「応ッ！ へへへっ…面白い戦いになりそうだな。」

オレとクロスボーンは総帥の命で戦いの中へと向かう。

SIDE OUT

時也 SIDE

その戦いの日より数日前の会話…

「なあ、雷斗…。 “過去” の悲劇は何が原因だつたんだろうな…？ オレが聖獣マイソロジーの力を手に入れたから？ それとも、エイロディアが復活した事か…？」

「私には分かりませんね。寧ろ、その真実は時也さん…貴方の方が近い位置に居るのでは？」

時也の問いに雷斗が答える。

「そうだな。ハーディアとウラノディアのパーティを手に入れて、ガンドムとキュベレイになったオレと姉さんがマイシスと言う組織を作り上げた。最初はオレ達の世界を守る為の自警団だった。」

今までこそ総帥と言う立場だが今のエイロスも、最初は自警団の団長と言う立場だった。そして、以前の時也がその自警団の現場での指揮官。

最初は聖獣のパーティと言う程度の物から始まった。今でこそ強力な聖獣マイシスロジーを持つているが、以前は時也も時音もバインドも使えずにガンドムやキュベレイの力だけだった。

「はっきり言ってオレ達の世界の管理局は頼りにならなかつた。」

「いえ、私達の世界も似た様な物では？ そもそも、『危険だから管理する』と言う名田で、魔力を帯びた物や自分達の技術以上の物を『ロストロギア』扱いして、ロストロギア収集に精を出すだけの妙な連中と言つ認識でしたね。以前の私は…。」

時也の言葉に溜息をついて答える雷斗。

「…大体…よく有るファンタジーの小説やゲームじゃないけど、それが何かの封印だつたらどうするんだ？ まったく…自分の足元の事を無視して無駄に手を広げる。しかも、海と呼んでいるロストロギア収集要員に地上から人材盗んで、その結果治安は悪化…そして、

あのヒゲゴリラの様なバカな事に手を出す。悪循環だな。」

「…実際…エイロスから聞いた話では、私の世界で封印されて休眠状態だったアロー・デイアを持つて行こうとした事で、アロー・デイアが目覚めてしまつて自衛モードによる暴走が起こうした事が私の世界の消滅の理由でしたつけ？」

神になる力を秘めた聖獣の自衛能力…完全ではないと言え、世界一つが滅ぶ程度で強欲な神候補を誕生させないのならば、それは最小限の犠牲だろう。問題は最悪の場合は全次元世界規模なのだから。

「結果、時也さん達が目覚めさせてくれたハーディアの翼を私が持つていた事で私は助かりましたけどね。結果、私の元に来たアロー・デイアの頭を手に入れて…他のバーツは飛び散つてしまい…故郷の世界は消え去り、私だけが助かってしました…。」

表情は変えていないが、雷斗はその表情には憎しみの…憎悪の感情を貼り付けていた。

「しかも、あの連中は早々に引き上げて逃げ出した訳だよな。実際、姉さんの…エイロ・デイアの策は本局と地上本部…その両方がやつていた必要悪を超えた悪事の証拠…。実際、まともな神経を持つていたのか、疑いを持っていたのか知らないけど…それを知つて辞める人間は多かつた。」

そこまで言つと笑いを浮かべる。

「…まあ、辞めなかつたのは多く分けて三つ。管理局の上層部とその子飼…闇の部分に住んで利益を貪つて肥えた連中。マイシスとの戦いの最激戦区であるミッドの人間…こつちは少しでも被害を少な

くする為に辞める訳には行かないんだろうけどな。…そして、後は何の疑いも持たない狂信者と盲信している連中か…。」

「まあ、あの時も今のマイシスも『自称悪の組織』だつたんですね…？」

「そうなんだろうけどな。少なくとも…少しずつバイインダーが集まり始め、オレがエイロディアの存在に気付いて抜けた直後から…マイシスは可笑しくなり始めた…。」

そこで一度言葉を止めると時やは、

「管理局がレアスキルの一種と考えバイインダー達を有するマイシスを取り込もうと濡れ衣を着せて逮捕しようとした事…それが一つの引き金だつたんだろうな。悪の組織としての第一歩は存在していた世界の管理局の施設…いや、痕跡の完全な消滅…。生き残りは誰一人…その世界に住んでいた無関係な局員の家族に至るまで…居なかつた。」

過去の時也がマイシスの行動に気付いて止め様とした時には既に手遅れだつた。その一件には何も関係していないはずの局員の家族まで殺された所を目撃した時…幼い子供の命まで奪つた姿を見て確信した。既にそれは姉ではなくエイロディアと言う別の存在だと。自分の記憶の中にある姉と同じ笑い声で…助けを求める局員の家族をウラノディアに惨殺させる姿…それに頭に血が上つて戦いを挑んだが、片腕のパークだけしか所持していない時也では歯が立つ筈もなく、返り討ちにされて…見逃された。

「…オレは奴を止める…必ずな…。」

「……ええ…止めましょ…必ず。」

決意を定めて戦つ意味を確認しなおす時也と雷斗…。

SHADE OUT

結界の上空

ウイングゼロとクロスボーン、時也と雷斗が結界の近くの地上で介入するタイミングを計りながら、結界の中に入り込む方法を選択している時、シグナムも騎士甲冑を纏い、結界の見える場所まで来ていた。

「……強層型の捕獲結界、ヴィータ達は閉じ込められたか…。」

『Please choose your action』

「レヴァンティン、お前の主は「」で立くなつた騎士だったか?」

『No』

「もうだレヴァンティンー、私達は今までずっとやつてきた!」

「……！」

彼女の言葉にレヴァンティンはカートリッジをロードし、刀身に炎を纏わせる。そして、シグナムはそのまま結界に向かって突撃を仕掛けた。

シグナムの姿が結界の中に消えていくと、ヘルメディアの両腕の上に立つその主ウイングゼロとクロスボーンがそこに現れる。

「そろそろオレ達も介入するだ。」

「はつ、いいねえ、それでオレは誰と遣り合えば良いんだ？」

「……焰には話は通してある……。お前のターゲットは『テスティード龍也だ。オレは今之内に猫退治をさせて貰おう。それと……焰を外に転送してくれ、アイツから紹介してもらつた方が遣り易い。』

「オッケー、楽しませてもらひござ」

ウイングゼロの言葉に答え、彼の投げ渡した待機状態のストレージデバイスを受け取り、ウイングゼロと共にクロスボーンがヘルメディアの肩に飛び乗ると、ヘルメディアは背中の非対称の双剣を手に取る。

「受けろ……暗黒の双撃……『スヘルメッショ』……！」

ヘルメディアの双剣から放たれた黒き炎が結界の一部を切り裂く。

「へへへっ……行くぜ、行くぜ……！……！」

ウイングゼロとヘルメディアが結界を破壊すると同時に、そこからクロスボーンがムラマサブラスターを持つて結界の中へと飛び込んでいく。

そんなクロスボーンを一瞥しながら、ウイングゼロはヘルメディアを影の中に帰還させると翼を広げてその場を飛び去っていく。

一方、結界の中ではヴィータ達ベルカの騎士に対抗する為にカートリッジシステムを搭載したレイジングハートとバルディッシュュを持つのはとフェイト、そして、デスティニーがヴィータとザフィーラ、ゴッドの三人と対峙していた。

「私達は、ただあなた達と戦いに来た訳じゃない。まずは話を聞かせて……。」

「闇の書の完成を目指している理由を…」

「オロ…」

なのはとフェイトの叫びにアロンダイトを構えていたデスティニーが前転気味にずつこける。

戦闘体勢を取っていたなのはとフェイトの一人と戦うと思っていたヴィータ達だったが、二人は飽く迄闇の書の完成を目指している理

由を知りたがつてゐる様子だった。

「あのせ、ベルカの諺で「なんなんがあんだよ……『和平の使者は槍を持たない』ってな。」

「？」

「あー……確かにやうじやるな。」

疑問を浮かべる一人に対して言葉の意味を納得したのか頷いているデスティニー。

「話し合いをしに来たのに武器を持つてやつて来る奴が居るかつて意味だよ、バア～カ！」

「確かに……話し合いの基本は非武装で「」やるからな……。武器を持つてするには、脅迫か宣戦布告で「」やるよ、なのちゃん。」

「なつ！？ 行き成り有無を言わせず襲い掛かつてきた子がそれを言つー？ それに、龍君も酷いの！……」

なのはとフロイトの問いにヴィータは諺と言つてなのは達をバカにする。龍や……デスティニーとしても話し合つならせめて武器を持つ前にするべきだらうと思つてゐるので納得する。そして、味方のはずの幼馴染の言葉に抗議するなのはだつた。

「それにそれは諺でなく、小話のオチだ。」

「まつ、確かに言えてるけどな……。」

ザフイーのシックミードそれは間違いだと指摘され、「シードは額をながらかしき上げた後、ヴィータの前まで移動し、額にドロップンを当てる。

「痛つー? なにすんだよ、ゴシード兄?」

額を押さえながら涙田で抗議するヴィータだが、「シードはなのはを指差し。

「取り合はず、先に手を出したのはこっちなんだから、ちがいと謝つとけ。」

「うう。」めんなさい。

「まつ、もう言つ訳での時は懲かつたな、オレからも謝る。」めん。

「シードを言わると素直に頭を下げて謝るヴィータと、一緒に謝るゴッドだつた。

「な、なんだか…毒気が抜かれる感じあるな…。」

「あ、あの、それは良いんですけど…なんで闇の書を完成させようとしているか、教えて貰えませんか?」

「悪い、それは教えられねえな。それに、これからはお互に同意の上の戦闘だ、どっちが悪いってのは無しだぜー。」

「ドロップンやるな…では、勝つてから質問させて貰つだ」やれぬ。

「龍君！？」

すっかり、ゴッドのペースに持ち込まれている状況だつたが、一人ゴッドの性格を理解しているテスティニーはゴッドを見据えながらアロンダイトを向けるとゴッドもそれに応じるように拳を構える。その時、一閃の閃光がなのはやテスティニー達とヴィータ、ザフィーラ、ゴッドの三人の間に降り立つた。

「シグナム！」

その光の正体は局員の張つている結界を貫いて来たシグナムだつた。

「龍君、ユーノ君、クロノ君、手を出さないでね！　私とあの子と一対一だから！」

「オッケーで、じゃねよ、なのちゃん。では拙者は…ゴッド殿と戦うで、いざなるよ…。」

自分が一方的とは言え因縁の有るシグナムと戦おうとしたが、先にフェイトがシグナムと戦いたいと念話で伝え、アルフもザフィーラの相手をしたいと書いてザフィーラを見る。仕方ないと言う意思と同時に、ゴッドの相手は自分がするのが良いと判断する。

構えるフェイトとなのは、アルフもザフィーラと対峙し、テスティニーとゴッドも対峙する。

（ユーノ、それなら丁度良い。まくと君で手分けして闇の書の主を探すんだ。）

（闇の書の？）

（連中は持つていね。恐らくもう一人の仲間か主かが何処かに居る。ぼくは結界の外を探す、君は中を。）

(分かつた。)

一方、念話でクロノとユーノの二人は互いの役割を確認し合う。結果以内に居る守護騎士達とゴッドは闇の書を持つていないと確認し、ユーノに結界内を、クロノが結界の外に闇の書を持つ者が闇の書の主が居ると考え、それぞれ分かれていった。

なのはドヴィータ、フェイドとシグナム、アルフとザフィーラがそ
れぞれ戦いを始めると、剣と拳を構えていたテスティニーとゴッド
はゆっくりと動き始める。

僅かずつ間合いを詰める一人。そして、有る程度まで近づいた瞬間、光の翼ヒガードフィールドを展開させ一気に加速し、

ぶつかり合ひ。

共に最も得意なのは接近戦。素手での格闘技が主体のゴッドは大剣

を操る剣士である「テスティニー」の相手は本来不利のはずなのだが…完全に圧倒していた。

「「ゴッドストライク！…！」

「ぐつ…」

乱打から一回転し「テスティニー」の顎を蹴り上げようとするが、その動きを読んでいたのだろう、テスティニーは上空へと飛び上を取る。

「お主と戦つ奴はあ…！…！」

光の翼を広げ落下的加速さえも利用した斬撃を放つ「テスティニー」だが、「ゴッド」はその動きを読んでいた様に振り下ろされたアロンダイトを両腕で…真剣白刃取りの体制で受け止める。

「甘こいでいるよ…」

素早く何の未練も無くアロンダイトを手放すと「テスティニー」は右肩に有るフラッシュショエッジの一つをビームサーベルとして抜き放ち、両腕が塞がった状態の「ゴッド」へと切りかかる。

「チッ…！」

アロンダイトを手放して「テスティニー」の一撃を避けようとするが、その一閃は確実にゴッドを捕らえていた。

「やつてくれるじゃねえか。」

「そりゃやつでいるよ。実力は拙者よりも「ゴッド」殿の方が上で…」

る。だから拙者は策を弄わせて頂いたで」*アガル*。」

先手を取ったのは『デスティニー』。良くも悪くも一直線な性格のゴッドだが、格下の相手と言つても悔りず全力で戦うタイプだ。空戦部隊の隊長・副隊長の地位にあつたゴッドと『デスティニー』の二人は実力の上ではゴッドの方が上であり、『デスティニー』が勝つには油断を誘うしかないが、ゴッドは油断するタイプではない。『デスティニー』はゴッドの中に自分への油断が無いのなら油断を誘うべく、アロンダイトを困に受け止めさせたのだ。

「やるじゃねえか……だつたら……」いつももつ少し派手に行かせて貰う

更に拳を構えるゴッドだが、そんな中、何かが降つて来る。

「さつさつさつ……！ 祭りだ、祭りだあ……！ 御祭りだあ……！」

「！」

その動きに気が付いてアロンダイトを振り上げ、振り下ろされた影の剣を受け止める。

マントの様な装甲を纏い、胸部と額に有る特徴的なドクロマーク。その者の名は、マイシス海戦部隊隊長にして、最狂の狂戦士『クロスボーンガンダム・フルクロス』。

「お前は…クロスボーン…？」

「くつ、お前の相手はオレ様だぜ……！ おい、ゴッド、ウイングゼロから話は言つてこないと思うけどな、手を貸してやるぜ……！」

驚愕と共に叫ばれるゴッドとティスティーが叫ぶ。一人の叫びに笑みを浮かべながら、クロスボーンのムラマサグラスターから木の葉状に十四の光の刃が伸びる。

「クッ！ 礼は言わねえよ。」

「ハッ！？ 言われる筋合にもねえな。」

そんなクロスボーンを睨みつけながらゴッドがそう言い放つと、クロスボーンはゴッドの言葉を鼻で笑いながら、そう言葉を返す。

「ゴッド殿…何故再びマイシス等と協力するでござるーー？」

「ん？ ああ、総帥の命令でな、闇の書の完成に力を貸せだそ�だ。」

笑いを浮かべながらゴッドの変わりにティスティーの問いにクロスボーンが答える。

「そう言つて、オレ達は期間限定で仲間に戻つた、つて説だぜ、龍也。」

「ふざけるな！ 誰が仲間だ！？」

「ああ？ 悪い、悪い。オレは今はゴッドと守護騎士達の利害の一致の協力者つて奴だ。ああ、そつそつ、ウイングゼロが呼んでるぜ。」

「つー？ お前！？」

右腕を向けると「ヒヂード式魔法陣が展開され、そのまま「ヒヂードの姿が消えていく。

「クロスボーン、貴様！？」

「ハッ、そろそろ本氣で行こうぜ！　来な、海神の加護を受けし海の主、聖獸『^{マイソロジー}ポセイディア』……！」

「クッ、来たれ、クロスティア！……！」

祝詞に導かれるよつにクロスボーンの影から現れるのは海王星の加護を持つ水中戦用の首長竜型の聖獸『^{マイソロジー}ポセイディア』。それに対抗するべく、テスティニーもまた自身の聖獸であるクロスティアを呼び出す。

「な、なんだよ、あれ？」

「あ、あれって…あの時の…。」

ヴィータとなのはも戦いを止めてポセイディアの出現に驚愕を浮かべる。すぐ近くで繰り広げられている首長竜と翼竜の怪獣対決に入ってしまう。特になのははPT事件の時にクロスボーンと戦った時の事を思い出したのだろう、レイジングハートを握る手が震えている。

「あれは……ゴッズの物とは違う、何者だ。」

「あ……あ……。あれは……あの時の……。」

なのは達と同様にポセイディアの出現に驚愕を浮かべて戦いを止め
るシグナムとフェイト。以前にクロスボーンとポセイディアと戦つ
た時の記憶を思い出したのだろう、フェイトも恐怖に震えている。

結界の外、結界を破る手立てを考えていた時、シャマルはクロノに
デバイスを突きつけられていた。

「搜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します。

」

「へつー。」

「抵抗しなければ弁護の機会があるあなた達にはある。同意するな
ら武装の解除をお願いします。」

シャマルに至近距离でデバイスを突きつけ投降を宣言するクロノ。

ゴッドが居れば話は別だが、シャルの能力ではこの状況に対処の仕様はないだろう。既に投降する以外に手立ては無い。投降するのは時間の問題だろうと、臨時作戦本部のリンク・ディー達もそう思っていた。

— 2 ! ?

え、なに!?

慌ててそこから飛び退くと今までクロノの立っていた場所を異形の剣が突き刺さっていた。

：よく避けたな：執務官。

「お前は！？」

純白の翼を広げながら、影の様に漆黒の体を持ち、天使の翼を持たない代わりに禍々しい印象を与えるバツクパツクを持ったもう一人の己『バインドウイングガンダムゼロカスタム』を従えて現れたウイングゼロが感心した様に言う。

「あなた達は…………？」

シャルマルの問いかけを聞き、バインドワインディングゼロを影へと消し、クロノから注意を外し彼女へと視線を向けた時、ワインディングゼロはツインバスター・ライフルを2丁に分離させ、左右に向けてワインディングゼロはツインバスター・ライフルの引き金を引く。

分離させたバスター・ライフルから、なのはのディバインバスター級の砲撃が放たれ、二つ同時に悲鳴が響く。左右のビルの壁に叩きつけられるのは、クロノと仮面を付けた謎の男。

「悪いな、オレは短時間だけだが未来予知が出来てな……。」

翼はウイングゼロの持っていたシステム『ゼロシステム』をウイングゼロの姿の時に使用できる。それによつてクロノの動きを予知し反撃したという訳だ。

「自己紹介が遅れたな……。オレの名はウイングガンダムゼロ。ところで……ついでに反撃したが……奴は敵で良かつたのか？」

シャマルに己の名を名乗りながらウイングゼロは（知つてゐるが）仮面の男を指差して問い合わせる。

「い、いいえ、知らないわ！」

「どうか、取り合えず敵と認識して良いか。そつそつ、守護騎士の一人でシャマルと言つたか……オレは今はお前達の味方だ。」

「……信用できないわね……。」

「……それも、そうだな……だつたら、こう名乗つた方が良いか……オレは焰の……『ウイングゼロオオオオオオオオ……』……お前に証明してもらつた方が良いだろうな。」

「ほむ……じゃなかつた、ゴッド君……？」

上空に現れた魔法陣を通して現れたゴッドがウイングゼロの言葉を

遮る様に叫び、彼へと殴りかかる。その光景に驚いてシャマルは思わず焰の名で呼びそうになってしまつ。

「約束どおり協力しに来たぞ、ゴッド。執務官が居る事だし、本名は控えた方が良いだろう？」

「ハジエ、彼の事を知ってるの？」

「ああ……応……な。

「オレの事はどうでも良い。今から結界を破壊する。お前の力では無理なら、ゴッドのスバルタン、又は他の守護騎士の大技をぶつけ
る必要が有る。闇の書の力を使うと言うのは避けたいだろう?」

「つー? だつたら… 来い… 「止めておけ。 オレがやる。」 なんだ? と?」

ゴッドを止めてウイングゼロは前に出て、

「そんな事より、あいつはお前の知り合いか？」

仮面の男を指差して問い合わせる。

「ええ！？」

思いつきつ「仮面の男」を指差して叫ぶ「ゴッド」。

(ホントかよ、『ゴッド兄ー?』)

(ならば、奴も管理局か?)

念話を通して、ヴィータとザフィーラの声が響く。

「こや、どうやら、アイツも夜天の書を狙っている様だつたぜ。」

「((なんだと(です(て)ー?))」

ゴッドの言葉に驚愕の叫び声が重なつて響く。

「なるほどな…どうやら、完成した魔道書の主やその騎士には手が出せなかつたとしても、それ以外の人間を狙うのは容易い事だ。完成した所で、ゴッドを人質にして自分達の好きに利用しようとも思つたんだろうな…。」

最後に、『奴にとつて誤算だつたのは、ゴッドが普通の人間じゃなかつた事か?』と付け加え、ウイングゼロは言葉を区切る。

「いや、オレの事が邪魔だとかいつてた様な気が…」「どうちにしても、敵に代わりは無いだろう。結界破壊はオレに任せ、トドメを刺して來い。」それもそつだな。」

「え? ちよつと、『ゴッド君。』

「取り合えず一発ぶん殴るだけだ、安心してくれつてー。」

本氣で殺りに行きそうなゴッドを慌てて止めようとするシャマルだが、ゴッドはそう言って両腕をゴッドフインガーの体勢に変える。

『ハイパーゴッドフインガー！！！』と言つ飛び声と爆発音を背中にウイングゼロは『計画通り』と言つ様な黒い笑みを浮かべていた。長年の友人関係故か、徹底的にゴッドの扱いに慣れているウイングゼロである。

「さて、結界を破壊するか…。おい、結界の中の仲間に逃げる準備をしりつて伝えておけ。」

「え、ええ。」

「光臨せよ、偉大なる者より産み落とされし水の星の加護を受けし武士…聖獣『ヘルメディア』！！」

ウイングゼロの影より現れるヘルメディア。そして、更に、

「増殖せよ！…！」

ウイングゼロの叫びと共にヘルメディアの影から現れた九体のクローンヘルメディア達がヘルメディアと共に結界の周りを取り囲む。

「闇へと消える…『スヘルメッシュ』！…！十連撃！…！』

九体のクローンヘルメディア達とヘルメディアの総攻撃が同時に結界へと突き刺さる。十の漆黒の炎を纏つた斬撃はいとも簡単に管理局員が全力で張つた結界を破壊する。

同時に結界破壊のドサクサに紛れてウイングゼロはクローンヘルメ

ディア達を使って管理局が現場に飛ばしていたサーチャーを破壊する。

「さて、次に会う時は久しぶりに肩を並べて戦う事が出来ると楽しみにしているぞ…焰。」

結界内に居るシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、そして、クロスボーン達が逃げる。そして、横を通り過ぎていくゴシドに叫びてウイングゼロもその場を後にする。

「待て！！！」

ウイングゼロはクロノを嘲笑う様にクロノへと顔を向けて目を合わせて一瞬だけ笑みを浮かべてから飛び去る。

「くそつ…！…！」

クロノは怒りを叩き付けるように地面に拳を叩きつけるのだった。

反マイシスチームSIDE

「ポセイディア…クロスボーンですか…。」

クロスディアとの怪獣対決の様な戦いを繰り広げているポセイディ

アを眺めながらフリーダムの姿の雷斗が呴く。…戦いと言うよりポセイティアのそれは単なる大暴れに近いが、ポセイティアの能力が殲滅戦向けなのだからそれは仕方ない事だろ？

「つー？ それって、龍也一人じゃ拙いんじゃないのか？」

「ええ、拙いですね。私達も加勢に入りましょ。」

「ああ！」

ガンダムの姿の時也とフリーダムの姿の雷斗がそれぞれの聖獣を召喚しようとした時結界内に異変が起きる。

「つて、崩壊ですか！？」

「捕縛用の結界だからな…仲間を助ける為に破壊したんだろう…オレ達も脱出した方がいいな。」

そう言ってポセイティアに視線を向けるとポセイティアの姿が消えて、クロスボーンとウォルケンリッター達が逃げていく。

「そうですね。…はあ…私達…何の為に結界の中に入つたんでしょうか…？」

「言ひなよ、オレも久しぶりに活躍したかったのに…。（泣）」

妙にベタな発言をしてくれる主人公から主人公（仮）に成りつつある時也だった。…ヒロイン居れば少しはマシになるのだろうが…。

「だったら、st5編まで早く進めろ！…！」

「時也さん……やつらのまは樂屋裏でするセリフですよ。あれ？ 何故か逃げ遅れませんか……フュイトさん。」

「使い魔が居るなり、そいつや仲間が何とかするだろ？ 早く帰ろうぜ……。」

「いえ、ポセイディアの大暴れで分断されちゃったみたいで……。つて、物凄く拙いのでは！？」

物凄く……と言つよつも明らかに拙い。明らかにそれは時也達の存在が呼んだ歴史の変化と言つ所だろ？

「時也さん、彼女を助けに行きます、援護を！ アローディア！」

「仕方ないな。任せろー。」

フリーダムの叫び声と共に現れる金色の人馬の騎士型の聖獣アロー^{マイソロジー}ディア。フリーダムの持つ全聖獣の中^{マイソロジー}で最速のスピードを誇る聖獣^{マイソロジー}。

「駆け抜けろ、アローディア！ー！」

フリーダムの叫びと共にアローディアは飛び立つ。

「つたぐ。来い、ハーディア！ー！」

己の影へと触れてガンダムは自身の聖獣ハーディアを呼び出し、アローディアの後を追う。

「え？」

アローディアの最高速を維持しフェイトの元に辿り着くと、フリーダムはフェイトの腕を掴み、自身の下に引き寄せる。

「フリーダム…さん？」

「ええ。ここから離脱します。捕まつていて下さい。」

アローディアを「反転させ結界が崩壊する前に離脱しよう」としたが、流石のアローディアも最高速でなければ間に合う可能性は薄く、一度止まってしまった以上、再び最高速になるまでの時間が問題だろう。

だが、

「切り裂け…『崩壊』を…！」

ガンダムとハーディアがアローディアの後方・崩壊に向かつて腕を振り上げる。光と影の境界さえ切り裂くハーディアの力とバインダーの精神で大きく力を変えるハーディア。

…ならば、バインダーが望みさえすれば…ハーディアは“形の無い物”さえも“切り裂く事”が出来る。

「エクリプス…クライドオオオオオオオオ…！」

ハーディアの力でアローディアの後方で起こっている結界の崩壊を切り裂く。それによつて崩壊を阻止できたのは僅かな時間だけ…だが、アローディアのスピードならば、僅かな時間だけ有れば十分過ぎる。

アローディアの離脱を見届ける事無く、ガンダムはハーディアと共にその場から離脱して、ハーディアを影へと戻すと結界の外のビルの一つにゅつくつと降りる。

「え…？」

「間に合いましたね。」

フェイトを抱き抱えながらフリーダムはアローディアを影へと戻し、ゆつくつとビルへと降りる。

「フリーダムさん、ビルへ…？」

「ええ、単なる偶然ですね。」

そんな会話をしている一人はまあ放つて置いて良いだらう。取り合えず“それ”を無視して居るフリーダムは何時でも簡単に逃げられると言つて確信が有るからだらう。問題があるとすれば、

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせても

「うお！」

フリーダムとガンダムにバインドをかけて、そう宣言してくれているクロノと頭に『#』マークを貼り付けて『ティターンズカラー』に見えるダークオーラを纏うガンダムだらう。ガンダムの心境としては、『“過去”のクロノとは別人』と自分に言い聞かせて居る所だ。… どうでも良いが、連れて行かれた先で爆発されるよりはこの場で爆発してくれた方が何倍も安全だらうが…。

… 見事にクロノは“過去”のマイシスとの戦いの後での時也とクロノのファーストコンタクトを再現してくれたのであつた…。

（…クロノ殿… フォローできないでござるよ…。）

あとは、フュイトが助かつた事で安心しているアルフと、取り合えず危なくなつたら助けようと見えながらも、なのはの安全を最優先に考えながらクロノを眺めるティスティニーと、オロオロとしているなのはの姿だつた。

「ね、ねえ… 龍也… 彼つて大丈夫なのかな…？」

「あー… 何と言うか… かなり頭にきいてる感じでござるな…。臨時本部に連れて行くのは危ないと想ひついでござる。」

「さ、危険つてどれくらい…？」

「…あー… 下手に連行してその先で爆発されたら… 拙者はなのちやん以外の安全は保障しないでござるよ。」

「え… なんで、なのはだけ？」

「……あー……取り合えず拙者は、なのちゃんを全力で最優先で守るだけだから……でござる。まあ、フロイト殿の安全はフリーダムが保障すると思うから大丈夫だとは思つてござる。」

「あー……。」

龍也の言葉に妙に納得してしまったユーノだった。

（クロノ殿、あまり時也殿を怒らせないで貰いたいでござる。）

つづく…

さて、クロノの言葉を右から左に聞き逃しながら、怒りを必死に誤魔化しているバインドで捕獲されているガンダムと、『何時でも逃げられる』と言う余裕からかバインドで捕獲されながら呑気にフェイトと会話しているフリーダムの一人。

流石に目の前で爆発寸前の爆弾にも気付かないクロノの姿に、デスティニーも哀れになっていた。…………爆発したら、真っ先に被害を被るのが彼だし。

ガンダム自身は怒りを堪えているのだが、寧ろそれが怒りを増幅させると言つ悪循環を生み出している。

だが、デスティニーとしてはなのはに被害が及ばなければ、クロノは如何なつても良いとも割り切つている。寧ろ、それが原因でなのはやフェイトにまで被害が及んでは大変なので。

（…取り合えず…エクリプスクライドを使いそうになつたら、助けよつ…でござる。）

既にヘルメティアのヘカティブレイドまではデスティニーの中では許容範囲の様だ。流石に万物を切り裂くハーディアの必殺技エクリプスクライド…防御無視の回避以外に防ぐ手段が限られる技は遺り過ぎと考へているようだ。…目の前で死なれても困るし…。すつかり、デスティニー（龍也）の中での価値が暴落中のクロノだった。

クロノの言葉を無視しながら顔を俯かせてブツブツと呟いていたガンダムが勢い良く顔を上げると、

「バインド、タイプ『シャドウフレアモード』……」

そう叫んだ瞬間、ガンダムの体が漆黒に染まり、同時に右腕が『バインドガンダム』の物に、左腕が『バインドゴッド』の物、背中のバックパックが『バインドストライクフリーダム』の翼に変わる。その姿は正しくはハーディアの両腕と翼を持った黒いガンダムと言うべきだろう。

これがガンダムのバインドモードの一つで三つのパートを同時に使用した『シャドウフレアモード』。

「無駄だ、そんな事をしてもそのバインドは……なに…？ ガア…！」

クロノが驚愕の叫びを上げる。ガンダムを捕らえていたバインドを簡単に破壊したシャドウフレアモードのガンダムは通常の姿に戻るとクロノの顔に蹴りを入れてそのまま後ろに跳ぶと自身の影に触れる。

（（距離を取る為に蹴るのは分かりますけど（るで）））（）（）（）（）（）（）

そんなガンダムに対しても、そんな感想を持つテスティーラとフリーダムの二人だった。

「はあ、仕方ないです。すみません、フェイトさん…危ないですから、少し離れていて貰えますか？」

「え？ あ、はい。」

思わずフリーダムの言葉に返事を返してフリーダムからフェイトが距離を取ると、フリーダムは静かに咳く。

「バインドモード、タイプ『パラティオン』。」

フリーダムが静かにそう呟くとフリーダムの全身が金色に染まり、頭部と両腕がアローディアの物に変わる。それによつてフリーダムを拘束していたバインドが砕け散る。

それを確認するとガンダムと『ステイニー』と等間隔で距離を取る位置へと飛びと通常の姿に戻る。

「来い、月を守護に持つ漆黒の戦士、聖獣ハーディア！……」

「来たれ、金星を守護に持つ金色の騎士、聖獣アローディア！……」

自身の影に触れ、二人の叫ぶ祝詞に合わせ召喚されるのは一人の操る聖獣、ハーディアとアローディア。

「お前達、お前達の行動は公務執行妨害だぞ！」

「笑わせるな、この世界は『管理外世界』でオレ達はこの世界の住人だ！ お前達の法に付き合つ義理は無い！……」

「あー……ガンダムさん、それはちよつと言ひ方があ無茶苦茶ですよ。頭に来ているのは分かりますけど、少しは落ちついて下せ。」

「……そだな……。」

フリーダムの言葉に従つて一度深呼吸して精神を落ち着かせるヒクロノへと視線を向けなおし。

「この世界は『管理外世界』……貴様等の法は適用されないだろ？……」

「ロストロギアの回収」「聖獣^{マイソロジー}がロストロギアに近いのは百歩譲つて認める（で）」（いる）（ます）が、それ以上に聖獣^{マイソロジー}はある意味では魂や精神、リンク^{リンク}アと一体化している物であつて生まれつき持つている『希少^{レアスキル}技能』に近い物だ（で）」（いる）（です。）」「…ぐつ、龍也、君はどっちの味方だ！？」

声を揃えてガンダムとフリーダムに味方してくれた龍也^{ラスティー}へと振り向いてそう叫ぶ。

「あー…拙者は飽く迄『なのちゃんの味方』で、なのちゃんの友達のフロイト殿に味方はしても、お前の味方に等なつた覚えは無いでいるよ。それに、今のは拙者にまで被害を被ると想つたので言わせて貰つたで」（いる。）

「ぐつ…。」

クロノを指差しながらそのまま宣言するテスティニー。その発言になのはが顔を紅くしているが、それは良いとして…

「さて、私達の能力はレアスキルの一^ア種です^アので、別にそちらの法に触れている訳では無いですね。」

「付け加えると、今回のオレ達の行動は精々オレ達に手を出してくれた連中への報復と、マイシスとの戦闘を目的に来てみれば、そつちの仲間が危なかつたんで人として当然の行動として助けただけだ。それが何で拘束される理由がある？」

「…あれ、管理局の法では『人を助けたら犯罪』って言う法が有る

んですか？ うわっ、独裁者より最悪な連中ですね、貴方達は。」

「最悪だな。何処の悪の組織だ？」

「そんな訳が有るか！……」

「……それは良かつた。なら、オレ達は別に法に触れてないよな。」

「……寧ろ、不當に拘束されましたよね……。よくそんな人を責任ある立場につけますね……。本当に録でもない組織ですね。組織の名譽の為にも今すぐ辞めたらどうですか。」

(……一人とも……精神的に甚振る方向に切り換えたんでござるか……？)

精神的にクロノを甚振つている仲間一人に対し、呆れた視線を向けるデステイニーだった。… ガンダムの性格を考えれば直接的に攻撃している所だらうが、クロノの行動を理由に精神的に攻撃しているのは、ガンダム自身が冷静だからなのか… それとも…。

「…………僕が君達を捕らえた理由はだね… 君達が危険な力を持つて いるからだ…。…あの力は放置しておけない…。」

「そつちだつて、そんな物使つてるだらうが。」

「僕達は管理局の許可を得て使用している。」

「ハツ、バカかお前は？ ここはお前達の管理している世界じゃな いだろ？ この世界の許可得て無い時点で、お前らもオレ達も同罪 だ。」

「あー…寧ろ、他所の世界の者である分、黒豆達の方が性質が悪い
でござるな…。」

「だから、君はどっちの味方だあーーーー？」

「なのちゃんの味方でござるが…それがどうしたでござるか?」

怒鳴るクロノの叫びを当然のようにその一言の元に切り捨てるテス
ティニー。

「さて、話が済んだ所で帰るか。」

清々しい表情をしてクロノ達に背中を向けて立ち去ろうとしている
ガンダムとフリーダムに青色の魔力弾が掠る。

「お前達を…連行する…！」

我慢の限界に来たのだろうクロノが『デバイス』『S2』を構えてい
た。

「…良いでしょ、丁度2対2ですからね。」

「戦闘隊形に着け、この犯罪者達を捕縛するぞ…って?」

「ちよっと、龍也、何でぼくまでー?」

何時のか間にかクロスティアを呼んでなのはとフェイトとアルフの一
人と一匹を確保して安全圏まで離脱している『デスティニー』だった。
彼女達が加勢に入ろう物ならその前にクロノキャプチャーで止める
事が出来る位置だ。

「あー……『いつたばすド』『じれるよ』、拙者ほどのちやんの味方と。男同士2対2、正々堂々と戦つ『じれるよ』。」

「「え……あの……えっと……。」」

「りゅ、龍君、私達もコーノ君達に強力した方が…。」

「…今回ばかりは黒豆が悪い『じれる』。向こうはフロイト殿を助けただけで『じれる』から。」

「で、でも…だったら、コーノも関係は…。」

「…まあ、それをしたら…一対一は流石に可哀相だと思つたし、確実に命が危険と思ったで『じれる』から、防衛に長けたコーノ殿を残してで『じれる』。取り合えず、謝つて命乞いをすれば見逃してもりえるかもしけないので、謝るなら素直に謝つた方が良いで『じれる』よ。」

前半の言葉を一人へと返して後半の言葉をクロノ達へと向ける。つまり…クロノの死亡率を下げる為にコーノを見捨てたと言つ訳だ。

「ちよつと待て、そんな事が出来る訳が…。」

「スミマセン、ぼく達が悪かったです。」

「ユーノオオオオオオオオオオオオ……お前まで……」

土下座して、ガンダム達に謝るコーノに思わず叫ぶクロノ。あつさりとコーノにまで見捨てられたクロノだった。

「良いだろう…下がつてろ、フリーダム。そつちが一人で戦つなら、こつちはオレとハーディアだけで相手をしてやる。」

ガンダムが腕を振り上げて構えると、ハーディアもソードを構える。

「ちょっと待て、それは『二対一』って言わないか…？」

「…ハーディアはオレの『力』で『能力』だろ？ 精々デバイスと一緒にだ。だつたら、実質戦うのはオレとお前。正々堂々と一騎打ちだ。」

そう言つてゐるが、戦力差を考えるとデバイスを使うクロノと聖獣^{マイシンロジ}を使うガンダムでは、明らかにガンダムの方が卑怯な気がするのだが…。なにより、

（…聖獣が魔力『生命体』と考える以上、どう考へても状況は『二対一』の気がするんですけどね…。）

フリーダムの考へに心から同意したい所だ。だが、それでも『召喚師が召喚獣を使って戦うのが卑怯なのか？』と言われば何も言い返せない。

「行くぞ、ハーディア…！」

クロノの返事を聞かずにハーディアと共にガンダムが戦闘体制を取つた時だつた。

『待つてください。』

『か…艦長…！』

(…「の女は…確か…。）

(…リンディ・ハラオウン…クロフ・ハラオウン彼の母親ですね。）

リンディからの通信が繋がり、ガンダム達の前方の虚空に画面が現れる。

『今回の事は息子が失礼しました。本当にごめんなさい。』

ハーディアのソードを向けていたガンダムだが…

「チッ！ 謝られた以上、こっちもこれ以上手を出す『気は無い』…。」

クロノの事は嫌つてはいるが、こうして向こうから非を認めて謝られた以上はそれ以上攻撃できなくなる。舌打ちしつつ、ガンダムが腕を下ろすとハーディアも向けていたソード状の腕を下ろした。

「ガンダムさんの言う通りです。そちらに戦意が無い以上、私達はこれで失礼させて頂きます。」

そう言ってガンダムとフリーダムが立ち去りつとした時、

『待つてください。この世界を中心として活動している、マイシスと名乗る一人組みについて説明を求めるわ。彼や貴方達と同じレアスキルを持っている人間が一人「いや、違う。」…え？』

リンディの言葉を遮りガンダムは言葉を続けていく。

「少なくとも、連中にはあと一人…あいつ等のボスである『エイロ

ス』と言つ奴が居る。』

「ええ、彼等の組織…マイシスの総帥である存在です。」

「…そして、奴等の総帥は、オレが知る…『最強』の聖獣の所持者である。」

二人の言葉にその言葉を聞いていたデスティニーを除いた全員が絶句してしまう。ウイングゼロやクロスボーンだけでも十分に強敵だと言つのに、更に彼等を従える程の力を持つたボスが存在していると言つのだから。

『…貴方達に正式に協力を願いするわ。』

「…どうします？ 私達のリーダーは貴方ですから、判断は任せますよ。」

リンクティからの依頼に対する答えをフリーダムがガンダムに問う。…ここでガンダムが出す答えは決まっている。

「そんな物、NOに決まってるだろ。」

そう、どんなメリットが有つたとしても管理局嫌いのガンダムが協力する訳が無い。反マイシスチームのリーダーが彼である以上は、彼等は単独でマイシスとマイシスが協力しているヴォルケンリッターを追う。それだけなのだから。

だが、

「あ、あの…フリーダムさん、私からもお願いします、私達に協力

してください。

「私からもお願ひするよ、前みたいに私達に協力してくれないかい？」

ガンダムの答えを聞いたフリーダムに対してフェイトとアルフが頼む。

「……あー……； ガンダムさん、先ほどの言葉を撤回するよいつで申し訳ないんですけど……協力してあげてくれませんか……。」

「チツ。」

フェイト達に頼まれるとフリーダムは断り難いのだろう。申し訳な
さ全開の言葉でフリーダムがガンダムにそう頼む。

「あ、あの、私からもお願ひします、私達に力を貸してください。」

「… なのちゃんがそう言つたら… 挙者からも頼むでござれ。こんな事を頼める立場でないのは理解してござるが…。黒豆のせいで。」

そう言つてガンダムに頭を下げるテスティーノ。

「……チツ……仕方ないな……オレ達も協力してやるつ……。協力するのに条件は有るがな。（これで貸しは返したぞ……雷斗、龍也。）」

「ええ、私には文句はありません。 (...スミマセン...)。寧ろ、まだ私達の方が貴方に貸しがあるんですが...。」

貸しがある仲間から頼まれた以上は条件付きで協力を受け入れるガンダムに続いてそう言つフリーダム。だが、

「条件だと、ふざけるな！？」

ガンダムの態度に約一名・クロノが怒り出す。そんなクロノを横目で睨み付けながら、ガンダムは…。

「…悪いけど、オレはタダでお前達に協力するほどお人好しじゃ無いんでな。イヤなら良いぞ…協力はしない…。ただそれだけだからな。」

『クロノ！』

「大体、寧ろオレ達は『自称』悪の組織を追つていて、今回は人助けをしてそつちに不当に拘束されて攻撃された。正当防衛で反撃されても文句は言えないはずだ。何の権利がある？」

「僕は管理局の執務官だ！ 逮捕の権限くらいはある！」

「…私達は犯罪行為はしませんよ…。」

「ぐ…。」

「まあ、条件については後々決めるとして…どうする？」

言外にフリーダムと『ステイシー』の仲間一人の頼みに応じつつも、リンディ達に対して協力の見返りとして、『白紙の小切手』を要求しているガンダムでした。

『…分かりました。マイシスを名乗る敵の危険性を考えて、貴方達の条件を飲みます。』

「艦長！」

『クロノ、いい加減にしなさい！ 龍也君の時も、今回の権も、貴方に責任があるわ。全く…これで執務官なんて…我が子ながら情けないわ…。』

「も、申し訳有りません…。」

リンディの言葉に頭を下げて謝るクロノ。そして、リンディは続いてデスティニーとコノノに。

『龍也君、貴方の言つた通りになつたわね。』

「上手く行つて良かつたでござる。」

「そうだね。」

「え？」

「ふえ？」

横でそんな事を話しているリンディ、デスティニー、コノノの三人と疑問の声を上げるフェイトとなのはの二人。

そして…

「母さん、龍也、コノ…ぼくはそんな事は聞いて無いぞ……！」

「… 言つてないから当然でござる。大体、教えて下手な演技されても困るでござる。」

「… それに今日のクロノの行動つて完全に龍也の予想した最悪のパターンだったし…。」

『お蔭で協力の条件は高く着いちやつたわね。』

「つー?」

『デスティニーとユーノ、リンディの言葉に思わず絶句するクロノ。』

付け加えておくと、デスティニーはユーノとリンディ以外には今回の事を話していなかつた。… そつ、なのは達にも知らせていなかつた。

「ふえ、龍君、どう言つ事なの?」

「あー… フリーダム殿達の性格を考えて… 確実に協力してくれる様に話を進めたんでござる。」

要はガンダム達の協力を得る為に、ガンダムではなくフリーダムから協力の了承を得る為に行動したと言つ結果である。後は心境が協力する方に傾いたフリーダムからガンダムに協力する様に話を進めてくれると考えた結果である。

「え、私達もそんな事聞いてない…。」

「… いや、なのちゃんとフロイト殿は演技は上手く無いやつでござる

るから…。」

「むへ、龍也、今日は酷いの…。」

「「「」めんどいやうやう… なのがやん。」

「許してあげない…」

「「「」めんどいやうやう… 許して欲しいでいやうやう…。」

怒っているなのはに対する必死に謝っているデステイニー…とそれを羨ましそうにも悔しそうにも見える表情で見ているユーノ。今のデステイニーとなの姿は『ケンカするほど仲がいい』と書く言葉が浮んでくる微笑ましい姿だ。

さて、デステイニーの策に嵌められたと言つ状況のガンダムとフリーダムだが…。

「はあ…なんて言つた…お前等を見ていると、警戒しているオレがバカみたいだな。」

「…所詮、今の彼女達は私達が知っている“彼女達”とは違うんですから。警戒しそぎは良くないですよ。」

溜息を吐くガンダムに対するオレのフリーダム。

妙にホノボノとした空気が流れる中…

「ふふっ… 役者は揃つたようね。」

その一言共に空気が変わる。

白い羽を撒き散らしながらゆつくりと上空から降り立つウイングガンダムゼロカスタム。

武器を構えながら豪快に降り立つクロスボーンガンダムフルクロス。

「なつ！？ お前達は！？」

突然の一人の出現に反応するクロノ。マイシスの幹部である聖獣使の一人の出現にフリーダムはフェイトを、デスティニーはなのはを底う様に彼女達の前に立つ。

だが、現れたウイングゼロとクロスボーンは警戒する彼等を一瞥しただけで左右に分かれ、これから其処に現われる何かに対しても片膝を着く。

「ふふ…初めてまして。」

黒いマントを羽織ったモノアイの純由のMSがウイングゼロとクロスボーンを従える様に現れる。

「初めまして、時空管理局の皆さん…。そして、一人いないけど聖獣の記憶に刻まれた宿敵達と…私の同朋たる者…ガンダム。」

優しげに…それでいて威圧感を放ちながら彼女は、

「私の名は『キュベレイ』。そして、マイシス総帥『エイロス』よ。宜しくね。」

微笑を浮かべながら口の名を名乗る。

「マイシスの総帥だと…？ そつちからノコノコ出でてくるとはい一度胸だ！」

誰もが威圧感に対してもう動けなくなる中、エイロスに対して『バイスS2U』を向けるクロノ。

「黙れ、今は総帥が話されている。」

そんなクロノにツインバスターライフルを向けながら告げるウイングゼロに手を翳してエイロスが制する。

「別に良いわ。今日は戦いに来たんじゃないのよ。でもね。」

「うーー？ うわあーーー！」

エイロスが手を翳すとU2Hを向けていたクロノの体を何度も爆発が襲う。クロノの周りを囲むようにキュベレイのファンネルが飛び回りながら一斉にブームを浴びせ、デバイスを落としてクロノが地面に倒れると、それらはエイロスの元に戻る。

「クスクス…武器を向けられるのは良い気分はしないのよね。それでは、私達の要件を伝えさせてもらひつわ。」

倒れたクロノを囁いながらエイロスはガンダム達へと視線を向け、

「私達マイシスは偉大なる神『エイロ』ティア』の名の元に、ここに復活（誕生）を宣言し、宣戦を布告する！」

エイロスの宣言と共に自身の聖獣ヘルメ『ティア』とポセイドニアを出現させるウイングゼロとクロスボーン。

「今日はあなた達にそれを告げる為に来たのよ。丁度、戦いの構図は私達と守護騎士達と『ゴッド、貴方達と宿敵達』と言った構図が完成したのだしね。」

それを告げるとエイロスはゆつくつと両腕を広げる。

「御出でなさい。神より産み落とされた天王の加護を受けし悪夢の化身、聖獣『マイクロジー』ウラノ『ティア』。」

エイロスの祝詞共に現れるのは異形の四足獣。それが一つの姿を持つ彼女の聖獣『ウラノディア』の一つの姿。

首長竜、魔人、四足の魔獣を従える三人の聖獣使い達。…そして、三体の異形の聖獣達を従える様に、総帥であるエイロスさえも従える様に、幻影の様に、一際巨大な異形の影が現れる。

異形の影に見守られる様にエイロス達は自らの組織の誕生と復活を宣言し、その姿を消す。

後に残されたのは、姿を見せた敵の存在に圧倒される者達。

そして、長い時を経て現れた（再会した）宿敵の消えた虚空を眩みつける… ガンダムだけだった。

「うー」飯できただで〜。

「？ どうしたんや、焰兄？」

「いや、なんて言つかさ……。なんか、大事な所に出損なつた気がしてな……。」

「……なんだよ、それ？」

「……いや、良く分からんだけじ、なんかそんな気がしてな。まつ、思いつかないって事は気にしなくても良いって事だろ。」

今回出番の無い最後の聖獣使いのゴッドー」と、八神家の長男、焰。家族仲良く食事中の様でした。

『時野 龍也』設定

名前：『時野 龍也』

年齢：19歳（崩壊前） 9歳（一話現在）

設定

運命の剣士。『デスティニー・ガンダム』に変身する元マイシス空戦部隊副隊長。土星を守護に持つ龍型の聖獣クロスティアを持つ。ストライクフリーダム…雷斗とは腐れ縁といつてはいる。JJS事件の終盤では『ジエイル・スカリエッティ』のアジトに雷斗とともに現われ、マイシス幹部の一人としてその力を存分に見せつけた。また、唯一時也が負けた相手だつたりする。

デスティニーの姿の時には侍のような言葉遣いをするが実は普段は普通に話している。通称『似非侍』

アロンダイトを主力武器として使うが、他の『デスティニー・ガンダム』の武装も実は使用可能で飾りじゃない（バインド本編のデスティニーのビーム砲は飾りだった）。

本作では最近は主人公の座を奪いつつある。

マイシスに所属していた頃はエイロスに洗脳されていた。マイシス幹部としても洗脳が解けた後も機動六課のライトニング分隊の副隊長の『烈火の将シグナム』とは何度も刃を交えた。

無印編の主人公の一人。大破壊後の過去では雷斗と共にのク拉斯メイトに。海鳴市に有る剣道場の子供としてなのはとは幼馴染で「なのちゃん」と呼んでいた。彼女が魔法と出会う時、助けに入つた為に事件に協力する事になる。現在はアースラ組に協力している。なのちゃん大好きと恥ずかし気も無く言い切れる人。一人称は『拙者』または『オレ』

ガンダム

設定

龍也の変身するMS。SDガンダムバインドの主役の一人で現在は龍也の変身した姿。SDガンダムバインドではゴッド、フリーダムと並んで『三馬鹿』と言われていた。

デスティニーの能力を最大限に活用できる等バインドや聖獣を使わなくても決定力は高い。固定装備以外のビームライフルは自由に取り出すことが出来る。また、ビーム兵器限定で非殺傷設定が適応される。…ただ、アロンダイトはどちらかと言えば非殺傷設定でも打撃武器。…つまり、非殺傷でも撲殺は可能。

聖獣クロスティア

設定

土星を守護に持つ聖獣。

相手の時間を停止させる『クロノキヤプチャー』を持つが、対象がクロスティアより大きいと効果が無いと言う欠点を持つ。（漫画版でも巨大な合体ヘルメディアには意味が無かった。）また、回転しながらクロノキヤプチャーを使う乱れ撃ち等のバリエーションもある。

必殺技はクロスティアの嘴撃と共に相手をデスティニーの斬撃によつて相手を切り裂く、空間さえも切り裂く技『クロスティメンション（漫画版）』と剣で円を描いて空間を割り異空間に敵を吸い込ませる『クロスティメンション・オリジン（オフィシャル設定版クロスティメンション）』。クロスティメンションは『バインド一刀流奥義』、オリジンは『バインド一刀流奥義・番外』と名付けている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682s/>

魔法戦記リリカルなのは聖伝～SDガンダム・マイソロジー～
2011年11月12日14時20分発行